キハ手形上ノ權利ヲ喪フニ至ルモノトス。唯手形義務者ハ權利者ニ對シ拒絶證書作成ヲ免除スルコトヲ得。此場合ニ於テハ之ヲ作成セサルカ爲メ權利ヲ喪フコトナキハ勿論ナリ（四八九條）。拒絶證書ハ要式證券ナルヲ以テ一定ノ要件ヲ具備セサルヘカラス。而シテ之カ作成ハ公證人又ハ執達吏ノ任ナリ（五一四條）。拒絶證書ノ要件竝ニ手續ハ第五百十五條以下ニ規定セリ。

第十　爲替手形ノ複本及謄本

手形紛失ノ場合ニ備フル爲メ若クハ手形呈示中ニ於テ流通ヲ爲シ得ル爲メ手形ノ複本又ハ謄本ヲ備フルノ制度ヲ認ム。

（一）複本　爲替手形ノ複本ハ所持人ノ請求ニ因リ振出人ニ於テ作成シ各裏書人ノ裏書ヲ爲サシムルモノニシテ（五一八條）法律上完全ナル手形トシテ效力ヲ有ス。而モ元來一個ノ手形タルニ止マルカ故ニ各通獨立シテ活動スルモノニ非ス。隨テ手形ノ複本ニハ複本タルコトヲ示ス文字ヲ記入セサルヘカラス。然ラサレハ各通ハ獨立シテ其效力ヲ有スルモノト看做サルヘシ（五一九條）。而シテ各通ハ何レモ手形ノ原本トシテ同等ノ資格ヲ有スルヲ以テ其一通ニ依リテ引受又ハ支拂ヲ求ムルコトヲ得ヘク、一通ニ付キ支拂アリタルトキハ他ノ各通ハ當然其效力ヲ失フ（五二〇條）。

（二）謄本　爲替手形ノ所持人ハ自ラ其謄本ヲ作ルコトヲ得。謄本ハ獨立シタル手形ニ非ス隨テ之ニ依リテ引受又ハ支拂ヲ求ムルコトヲ得ス、唯之ニ依リテ裏書又ハ保證ヲ爲シ得ルニ過キス。謄本ニ依リテ裏書又ハ保證ヲ爲シタルトキハ原本ニ記載シタル事項ト區別シテ之ヲ明ナラシムルヲ要ス（五二二條）。

第三款　約束手形

約束手形ハ振出人自ラ一定ノ金額ノ支拂ヲ約スル手形ニシテ爲替手形ノ如ク一定ノ金額支拂ヲ他人ニ委託スルモノニ非ス。卽チ振出人ハ手形作成ト同時ニ主タル債務者ト爲ルモノナリ。此點ヨリシテ約束手形ニ關スル法則ハ爲替手形ニ關スル法則ト差異ヲ生スルモ、大體ニ於テ爲替手形ニ關スル規定ノ大部分ハ之ヲ約束手形ニ準用セラル。故ニ約束手形ニ關シテハ特ニ說明スヘキモノナシト雖モ、唯前述ノ理由ヨリ當然ノ結果トシテ手形要件ニ差異アリ（五二五條四四五條參照）。約束手形ニ在リテハ振出人ノ外ニ支拂人ナル者ナキ結果引受ノ制度ナク、隨テ引受、參加引受及擔保請求ニ關スル法則ハ全然約束手形ニ適用ナシ。

約束手形ニハ又爲替手形ノ如ク引受ノ爲メノ呈示ナキカ故ニ之カ爲メ流通ヲ阻害サルル惧ナク、隨テ複本及謄本ノ制度ヲ認メス。

第四款　小切手

小切手ニハ爲替手形ト同シク振出人、受取人ノ外ニ支拂ノ委託ヲ受クル所ノ支拂人アリ。既ニ爲替手

形アルニ拘ラス別ニ小切手ナル制度ノ認メラルル所以ノモノハ、小切手ハ現金ニ代ヘテ支拂ノ具ニ供シ以テ金錢保管ノ勞、盜難紛失ノ危險ヲ除キ及計算上ノ錯誤ヲ避ケンカ爲メニ特別ノ發達ヲ爲シタルモノニシテ爲替手形ノ如ク流通ヲ目的トシテ發達シタルモノニ非サルカ故ニ其間經濟上ノ用途ヲ異ニスルカ爲メナリ。故ヲ以テ小切手ハ常ニ必ス一覽拂ノモノニシテ且ツ其流通期間ノ如キモ甚タ短ク、所持人ハ其振出ノ日附ヨリ十日以內ニ呈示シテ支拂ヲ求ムルコトヲ要スルモノトセリ。既ニ小切手ハ必ス一覽拂ノモノナルカ故ニ手形ノ要件トシテ滿期日ヲ記載スルノ要ナシ（五三二條以下）。小切手ニハ小切手契約ノ存在スルコトヲ必要トス。小切手契約ハ卽チ資金關係ニシテ通常銀行取引ニ於ケル當座預金ニ對シ小切手帳ヲ交付スルノ方法ニ依ル。而モ預金者カ小切手ヲ振出シ得ル金額ハ必シモ其預金ト一致セス、或ハ過振契約ノ存スルコトアリ。振出人若シ支拂人ヲシテ支拂ヲ爲サシムルヲ得ル金額ヲ超エテ小切手ヲ振出シタルトキハ五圓以上千圓以下ノ過料ニ處セラル（五三六條）。振出人又ハ所持人カ表面ニ二條ノ平行線ヲ劃シ其線內ニ銀行又ハ之ト同一ノ意義ヲ有スル文字ヲ記載シタル小切手ニ在リテハ支拂人ハ銀行ニ對シテノミ支拂ヲ爲スヘキモノナリ。之ヲ橫線小切手又ハ平行線小切手ト稱ス。此制度ハ小切手ニ行ハレ易キ詐欺ヲ防キ正當ノ權利者ニ支拂ハシムルノ旨趣ニ出ツ（五三五條）。

小切手ニ付テモ亦爲替手形ニ關スル規定ノ大部分ヲ準用スヘキモノトス（五三七條）。

第六節　海商

海事ニ關スル法律規則ノ全體ヲ海法ト稱シ、海法ヲ分テ(一)海事國際法(二)海事公法(三)海事私法ノ三ト爲ス。海商法ハ海事私法ニ屬シ海事ニ關スル商關係ニ付テ規定スルモノニシテ、海事ニ關スル私法ノ最要部分ハ商事ニ屬ス。是ヲ以テ海商法ハ學理上一面ヨリ見テ商法ノ一部タルト同時ニ他面ヨリ見テ海法ノ一部タリ。

現行商法海商編ニ於テハ船舶、船舶所有者、船員、運送、海損、海難救助、保險、船舶債權者ニ付テ規定ヲ設ク。右ノ內保險ニ付テハ前ニ第三節商行爲中保險ヲ說明スルニ當リテ概說シタル所ナリ。

第一款　船舶及船舶所有者

船舶ナル汎稱中ニハ總テ水上ヲ航行スル用ニ供セラルル建設物ヲ包含スヘシ。而モ一般用語上軍艦ハ船舶ト竝稱セラレ所謂船舶中ニ含マシメサルノミナラス、海商法ニ船舶ト稱スルモノハ商行爲ヲ爲ス目的ヲ有スルコトヲ要シ、且ツ端舟其他櫓櫂ノミヲ以テ運轉シ又ハ主トシテ櫓櫂ヲ以テ運轉スル舟ハ之ヲ包含セス（五三八條）。商法ハ此等ノ物ニ舟ナル文字ヲ用ヰ以テ船舶ト區別セリ。

船舶ハ動產ナルコト勿論ナリト雖モ其容積ノ大ナルト其價額ノ高貴ナル等ヨリ普通ノ動產ト大ニ其性質ヲ異ニスルカ故ニ、法律上特殊ノ取扱ヲ受ケ、不動產ト同一ノ法則ニ支配セシメラルルモノ尠カ

ラス。船舶登記ノ制度、船舶抵當ノ制度、船舶ノ强制執行ニ關スルモノノ如キ皆然リ（五四〇條六八六條、民事訴訟法七一七條以下）。

船舶ハ名稱ヲ有シ且ツ國籍ヲ有スヘキモノナリ。船舶ノ國籍ヲ定ムル標準ニ關シ或ハ船舶所有者ノ全部又ハ一部カ自國ノ國籍ヲ有スルヲ以テ足レリトシ、或ハ乘組員、船長及船員ノ全體カ自國人タラサルヘカラストシ、更ニ船舶カ自國ニ於テ構造セラレタルモノナラサルヘカラストスルアリ。我船舶法ハ單ニ船舶所有者ニ關シテノミ制限ヲ設ク（船舶法一條）。

船舶ハ登記ヲ爲シ且ツ國籍證書ヲ請ヒ受クルコトヲ要ス。尤モ是レ只日本船舶タル權利ノ行使ニ必要ナル條件タルニ止マリ日本船舶タルニ必要ナル條件ニ非ス（五四〇條船舶法一條）。

日本船舶タル權利卽チ國籍ニ伴フ船舶ノ權利トハ（一）國旗ヲ揭揚スルコトヲ得ル權利（船舶法二條）（二）內國ノ沿岸ニ於テ貿易シ且ツ不開港場ニ寄港スルコトヲ得ル權利（同三條）（三）航海奬勵法ヨリ生スル特別ノ權利ノ如キヲ重ナルモノトス。殊ニ國旗揭揚權ノ如キ極メテ重要ナルモノニシテ、之ニ依リ領域外ニ在リテモ國家ノ保護ヲ受クルコトヲ得ヘク、外國間ニ戰爭アル場合ニハ中立國船舶トシテ捕獲ヲ免ルルコトヲ得ルモノナリ。

航海中ニ於テ船舶ヲ讓渡シタル場合ニ於テハ理論上其讓渡アリタル時ヨリ總テノ權利義務カ讓受人ニ移轉ストスルヲ正當トスト雖モ、若シ斯ノ如クスルトキハ運賃其他航海ヨリ生スル損害ニ關シテ困難ナル問題ヲ生スヘシ。是ヲ以テ法律ハ此場合ニ關シ特約ナキ限リハ其航海ヨリ生スル一切ノ損益ハ讓受人ニ歸スヘキモノト定ム（五四二條）。

船舶ハ其價格大ナルカ故ニ多數人ノ共有ニ屬スルコト多シ。共有船舶ノ利用行爲ハ共有持分價格ノ過半數ニ依リテ之ヲ決シ（五四六條）處分行爲ハ全員ノ同意ヲ得サルヘカラス。新ニ航海ヲ爲シ又ハ大修繕ヲ爲スヘキ決議ニ異議アル共有者ハ相當代價ヲ以テ自己ノ持分ヲ買取ルヘキコトヲ他ノ共有者ニ請求スルコトヲ得（五四八條）。船舶共有者ハ必ス船舶管理人ヲ選任シ一定ノ行爲ヲ處理セシメサルヘカラス（五五二條）。船舶共有者ノ持分ノ移轉又ハ共有者ノ國籍喪失等ニ因リ船舶カ國籍ヲ失フヘキ場合ニハ他ノ共有者ハ相當代價ヲ以テ其持分ヲ買取リ又ハ其競賣ヲ裁判所ニ請求スルコトヲ得。會社社員ノ持分移轉ニ因リ船舶カ國籍ヲ喪フ場合ニ於テモ亦均シク他ノ社員ニ先買權ヲ生ス（五五五條）。

第二款　船員

船員トハ航海ニ從事スル船舶乘組員ノ總テヲ謂フ。船員ヲ分テ船長及海員ノ二トス。海員トハ船長以外ノ乘組員ノ總稱ニシテ、船長ト海員ノ區別ハ畢竟權限ノ大小ニ外ナラス。

第一　船長

船長タルニハ法定ノ資格ヲ有スルコトヲ要ス。

船長ト船舶所有者トノ關係如何ハ大ニ議論ノ存スル所ナレトモ、雇傭及代理ノ關係ニ立ツモノト

云フヘシ。而モ船長タルヤ其性質普通ノ被雇者又ハ代理人ト大ニ趣ヲ異ニスルモノアルカ故ニ、其代理權限ハ擴大セラレ更ニ特殊ノ權限ヲ付與セラル。卽チ船長ハ所有者ノ被雇者トシテハ勞務ニ服シ、代理人トシテハ船籍港外ニ於テ航海ノ爲メニ必要ナル一切ノ裁判上又ハ裁判外ノ行爲ヲ爲ス權限ヲ有シ、尙ホ船舶ノ修繕費、救助料、其他航海ヲ繼續スルニ必要アル費用ヲ支辨スル爲メニハ船舶ヲ抵當トシ又ハ借財ヲ爲シ若クハ積荷ヲ質入スルコトヲ得ヘク、進ンテ之カ競賣ヲ爲スコトヲ得ヘシ。勿論船舶所有者ハ特別ノ契約ヲ以テ船長ノ代理權限ヲ制限スルコトヲ得ルモ之ヲ以テ善意ノ第三者ニ對抗スルコトヲ得ス（五六六條乃至五七〇條）。右ノ外更ニ船長ハ其特別ノ權限トシテ船內ノ安全及秩序ヲ維持スル爲メ海員ヲ懲戒シ（船員法三六條以下）乘客ノ自由ヲ制限スル權限ヲ有ス（船員法四三條）。

此ノ如ク船長ハ航海ニ關シ重大ナル權限ヲ有スルト同時ニ其責任亦重大ナルモノアリ。卽チ船長ハ荷物ノ船積及旅客ノ乘込ノ時ヨリ荷物ノ陸揚、旅客ノ上陸ノ時マテ船舶ヲ去ルコトヲ得ス（五六三條）發航船舶ノ航海ニ支障ナキヤ否ヤ航海ニ必要ナル準備ノ整頓セルヤ否ヤヲ檢査スルコトヲ要シ（五六一條）一定ノ書類ヲ船中ニ備ヘ置クコトヲ要シ（五六二條）其他自由ニ航路ヲ變更スルコトヲ得サルカ如キ（五六四條）積荷ニ關シ利害關係人ノ利益ヲ顧ミサルヘカラサルカ如キ（五六五條）海員ノ職務上ノ行爲ニ付キ責任ヲ負フカ如キ（五五九條）船舶所有者、傭船者、荷送人其他ノ利害關係人ニ對シ特別ナル注意ニ關スル責任ヲ負フカ如キ（五五八條）報告ノ義務ノ如キ（五七三條）其最モ重要ナルモノトス。

第二　海員

海員トハ船長以外ノ船員ノ總稱ニシテ上ハ運轉士、機關士、醫員ノ如キ高等海員ヨリ下ハ水夫、火夫、厨夫ニ至ル下級海員ノ總テヲ包括ス。海商法中海員ニ關スル規定ハ下級海員ヲ標準トシテ定メタルモノニシテ主トシテ海員ノ保護ニ關ス。

海員ノ雇入ハ船長之ヲ爲スヲ通常トス。海員ト船舶所有者トノ間ノ法律關係ハ雇傭ナルコト勿論ナリ。海員ハ其傭入ノ手續カ終リタル時ヨリ船長ノ指定シタル時ニ於テ船舶ニ乘組ミ勞務ニ服セサルヘカラス。海員ハ服役中食料ヲ請求スル權利ヲ有シ、服役中不行跡其他重大ナル過失ニ因ラスシテ疾病ニ罹リ又ハ傷痍ヲ受ケタルトキハ治療及看護ノ費用請求權ヲ有ス。海員ノ雇止ハ一般雇傭契約ニ關スル原則ニ依ルノ外、一定ノ場合ニ於テ船長ノ側ヨリ及海員ノ側ヨリ何レモ其契約解除ヲ爲スコトヲ得ヘク、又一定ノ事故發生ニ因リテ當然契約ノ終了スルモノトス（五八七條）。航海中ニ於テ雇止メラレタルトキハ海員ハ雇入港マテ送還ヲ受ケンコトヲ請求スルコトヲ得ル場合アリ（五八二條後段五八三條二項五八七條二項）。航海中船舶ノ所有者カ變更シタル場合ニ海員ハ當然新所有者ニ對シテ雇傭契約ニ因リテ生シタル權利義務ヲ有スルカ如キハ畢竟相互ノ便益ヲ酌量シテ設ケラレ

タル規定ニシテ一般雇傭ノ法則ノ例外ナリ(五八四條民法六二五條)。

第三款　運送

海上運送ニ關シテモ亦物品運送ト旅客運送ノ二ニ分チテ規定セラル。

第一　物品運送

海上運送ニ在リテハ運送ハ總テ船舶ニ依ラサル可カラス。而シテ物品運送ニハ個々ノ物品運送契約ト船舶ノ一部又ハ全部ヲ契約ノ目的トスル場合トアリ(五九〇條)。個々ノ物品ヲ運送契約ノ目的トスル場合ハ最モ單純ナル運送契約ナリ。船舶ノ全部又ハ一部ヲ運送契約ノ目的トスル場合ハ之ヲ傭船契約ト稱シ、船舶ノ賃貸借契約ト甚タ相似タリ。外國ノ立法例若クハ學說ニ依レハ或ハ船舶ノ全部若クハ一部ヲ目的トスル運送契約ヲ以テ船舶ノ賃貸借ナリトシ又ハ請負契約ナリト說明スル者アルモ、我商法ハ全ク別異ノ契約トシテ規定ヲ設ク。要スルニ船舶ノ賃貸借ニ在リテハ船舶所有者ハ船舶ヲ擧ケテ之ヲ賃借人ノ占有ニ移シ賃借人ハ任意ニ之ヲ利用シ得ルモノナルモ、傭船契約ニ在リテハ船舶ノ全部又ハ一部ヲ相手方ニ使用セシムルニ止マリ船舶ノ占有及管理權ハ依然所有者ニ存スルモノナリ。

海上運送ニ在リテハ總テ運送ハ船舶ニ依ラサル可カラサルカ故ニ原則トシテ船舶所有者卽チ運送人タリ。但シ船舶ノ賃貸借ノ場合ニハ賃借人カ運送人タリ。

船舶所有者ハ契約ニ定ムル船舶ヲ以テ運送ヲ爲ササルヘカラス。又其船舶ハ發航ノ當時ニ於テ航海ニ堪ユルモノナルコトヲ要ス。船舶所有者ハ自己ノ過失、船員其他ノ使用人ノ惡意若クハ重大ナル過失又ハ船舶カ航海ニ堪エサルニ因リテ生シタル損害ヲ賠償スルヲ免ルルコトヲ得ス(五九一條五九二條)。

以上ノ外、海上運送ニ於ケル特殊ノ規定ハ(一)船積期間ニ關スルモノ(二)陸揚期間ニ關スルモノ(三)契約ノ解除其他ノ終了原因ニ關スルモノ(四)運送賃ニ關スルモノ等ヲ重モナルモノトス。陸上運送ニ關スル規定ハ一定ノ範圍ニ於テ海上運送ニ準用セラルルモノナリ。

陸上運送ニ於テ運送人ノ發行スル貨物引換證ニ相當スルモノヲ海上運送ニ於テハ船荷證券ト稱ス船荷證券ハ傭船者又ハ荷送人ノ請求ニ因リ船長又ハ船舶所有者ノ委任ヲ受ケタル者カ之ヲ作ル。船荷證券モ亦要式證券ニシテ又物權的及證券的證券タルコト貨物引換證ト同一ナリ。船荷證券ヲ發行シタルトキハ船長ハ其證券所持人ニ積荷ヲ引渡スヘキ義務ヲ負フ。而シテ數通ノ船荷證券ヲ作リタル場合ニ於テハ陸揚港ニ於テハ其內ノ一通ノ所持人カ請求シタルトキト雖モ其引渡ヲ拒ムコトヲ得ス。陸揚港外ニ於テハ船荷證券ノ各通ノ返還ヲ受クルニ非サレハ運送品ヲ引渡スコトヲ得ス。二人以上ノ證券所持人カ運送品ノ引渡ヲ請求シタルトキハ船長ハ遲滯ナク運送品ヲ供託シ且ツ各請求者ニ對シ其通知ヲ發スヘキモノナリ(六二四條乃至六二六條)。

第二　旅客運送

旅客運送ニ在リテハ其契約成立ノ證トシテ切符ヲ發行交付スルヲ通常トス。切符ニ記名式ノモノト無記名式ノモノトアリ。記名式ノ切符ハ之ヲ他人ニ讓渡スコトヲ得ス（六三〇條）。

航海中旅客ノ食料ハ船舶所有者ニ於テ支給セサルヘカラス（六三一條）。加之ナラス航海ノ途中ニ於テ船舶ノ修繕ヲ要スル場合ニ於テモ船舶所有者ハ修繕中旅客ノ住居及食料ヲ供スル義務アリ（六三六條）。

其他契約ノ解除、運賃及手荷物ニ關スル船舶所有者ノ責任等ニ付キテ特別ノ規定アル外ハ陸上旅客運送及物品運送ノ原則ニ準スヘキモノトス（六三九條）。

第四款　海損

船舶カ航海中ニ生シタル總テノ損害ヲ海損ト稱シ、海損ヲ分テ單獨海損及共同海損ノ二ニ區別ス。單獨海損ハ偶然ナル事故ニ因リテ生シタル損害ニシテ、共同海損ハ船長カ船舶及積荷ヲシテ共同危險ヲ免レシムル爲メ船舶又ハ積荷ニ付キ爲シタル處分ニ因リテ生シタル損害及費用ヲ謂フ（尙ホ水先料、挽船料等ノ如キ多少豫期スヘキ通常若クハ臨時ノ費用ヲ小海損ト稱シテ說明スルモノアリ）。單獨海損ハ民法上ノ原則ニ準據シ其損害ヲ受ケタル者カ自ラ之ヲ負擔スヘキモノニシテ商法ニ之カ特別ノ規定ヲ設ケス。共同海損ハ其船長ノ處分ニ因リテ保存スルコトヲ得タル船舶又ハ積荷ノ價格及運送賃ノ半額ト共同海損額トノ割合ニ應シテ各利害關係人之ヲ分擔スヘキモノトス（六四二條）。共同海損ヲ分擔スル者ノ責任ハ船舶ノ到達又ハ積荷引渡ノ時ニ於テ現存スル價格ノ限度ニ限ラル（六四四條）。利害關係人カ共同海損ヲ分擔シタル後處分セラレタル船舶、其屬具若クハ積荷ノ全部又ハ一部カ其所有者ニ復シタルトキハ其所有者ハ償金中ヨリ救助ノ費用及一部滅失又ハ毀損ニ因リテ生シタル損害ノ額ヲ控除シタルモノヲ返還スルコトヲ要ス（六四九條）。

船舶カ不可抗力ニ因リ發航又ハ航海ノ途中ニ於テ碇泊ヲ爲ス爲メニ要スル費用ハ上ニ所謂共同海損ニ非ス。而モ此等ノ費用ハ共同海損ノ場合ト同シク船舶積荷共同ノ利益ト爲ルモノナリトノ理由ヲ以テ共同海損ノ場合ニ準シ各利害關係人ニ於テ損害ヲ分擔スヘキモノトス。學者ハ之ヲ準共同海損ト稱セリ（六五二條）。

船舶ノ衝突ノ場合ニ於テ之ニ因リテ生シタル損害ノ歸屬如何ハ實際ニ於テ屢々生スル問題ニシテ最モ重要ナルモノナリ。我商法ハ其衝突カ雙方ノ船員ノ過失ニ因リテ生シ而モ其過失ノ輕重ヲ判定スルコト能ハサル場合ニ付キテノミ一條ノ規定ヲ設ケ、雙方ノ船舶所有者平分シテ之ヲ負擔スヘキモノトス（六五〇條）。

第五款　海難救助

船舶又ハ積荷ノ全部又ハ一部カ海難ニ遭遇セル場合ニ於テ義務ナクシテ之ヲ救助シタル者ハ其結果

ニ對シテ相當ノ救助料ヲ請求スルコトヲ得(六五二條ノ二)。救助者ハ(一)自己ノ故意又ハ過失ニ因リテ海難ヲ惹起シタルトキ(二)正當ノ事由ニ因リテ救助ヲ拒マレタルニ拘ハラス强ヒテ之ニ從事シタルトキ(三)救助シタル物品ヲ隱匿シ又ハ濫ニ之ヲ處分シタルトキハ救助料ヲ請求スルヲ得ス(六五二條ノ十一)。

救助料ノ請求權ハ救助ノ時ヨリ一年ヲ經過シタルトキハ時效ニ因リテ消滅ス(六五二條ノ十六)。其他救助料ノ算定、共同救助ノ場合ニ於ケル救助料ノ分配手續等ニ關シテハ第六百五十二條ノ三乃至第六百五十二條ノ十五ニ詳細ナル規定ヲ存ス。

第六款　船舶債權者

商法ハ一定ノ船舶債權者ニ特種ノ先取特權ヲ與ヘ以テ其債權ヲ保護セリ。而シテ其規定スル所ハ優先權ヲ以テ保護ヲ受クヘキ債權ノ種類、船舶先取特權者相互間及他ノ先取特權者ト優先順位、優先權ノ消滅原因等ニ關ス(六八〇條以下)。

登記シタル船舶ハ不動產ノ抵當權ニ關スル規定ニ準シ抵當權ノ目的ト爲スコトヲ得(六八六條)ルト同時ニ之ヲ質權ノ目的ト爲スコトヲ得サルモノトス(六八八條)。

第七章　民事訴訟法

第一節　總論

法ニ實體法ト形式法トノ區別アルコトハ既ニ述ヘタリ(本書總論第十三章第四節參照)。民事訴訟法ハ所謂形式法ニ屬シ私法ヲ適用スルカ爲メノ方式ヲ定メタルモノナリ。

凡ソ公權ト私權トヲ問ハス苟モ權利ノ侵犯アレハ必スヤ之カ救濟ノ途ナクンハ非ス。而シテ權利ノ侵犯ニ對シ救濟ヲ與フル所ノモノハ國家タルコト勿論ニシテ、民事訴訟法ハ私權ヲ侵害セラレタリトスル者ニ對スル國家ノ救濟ニ關スル手續ヲ規定シタルモノナリ。是ヲ以テ民事訴訟法ハ公法ナリヤ私法ナリヤハ一時大ニ爭ハレタル所ナリシモ、今日ニ於テハ之ヲ公法ナリトスルニ何人モ異議ヲ挾ム者ナシ。

民事訴訟ニ在リテ國家機關ニ對シ私權保護ヲ要求スルノ權利ハ之ヲ訴權ト稱ス。訴權ハ更ニ之ヲ形式的訴權ト實質的訴權トニ別ツ。形式的訴權ハ單ニ私權ノ保護ニ付キ國家機關ノ裁判ヲ拒マレサルノ權利ニ止マリ、何人ト雖モ何時ニテモ之ヲ有スルモノナリ。之ニ反シテ實質的訴權ハ其裁判ノ目的タル請求カ正當ニシテ其申立テタル旨意ニ從フ裁判ヲ得ルノ權利ナリ。換言スレハ形式的訴權ハ訴訟ヲ受理セラルルノ權利ニシテ實質的訴權ハ勝訴ノ判決ヲ受クルノ權利タリ。

第二節　裁判所

民事訴訟ニ於テ私權保護ノ任ニ當ル者ハ卽チ裁判所ナリ。裁判所ノ行フ所ノ國家行爲ハ立法及行政ニ對シテ之ヲ司法ト云フ。

裁判所カ訴訟事件ニ付キ裁判ヲ爲ス權限ヲ有スルコトヲ裁判所ノ管轄ト云フ。裁判所ノ管轄中訴訟物ノ性質、事件ノ種類ニ由ルモノヲ事物ノ管轄ト稱シ、裁判權ヲ行フヘキ範圍ヲ土地ノ區域ニ由リテ定ムルモノヲ土地ノ管轄ト云フ。

事物ノ管轄トシテ區裁判所ニ於テハ輕微ナル事件又ハ迅速ヲ要シ簡易手續ニ依ルコトヲ便トスル事件ヲ第一審トシテ管轄シ（裁判所構成法四條以下）、地方裁判所ハ第一審トシテ區裁判所ノ權限ニ屬セサル事件、第二審トシテ區裁判所ノ裁判ニ對スル控訴抗告ニ付キ裁判權ヲ有シ（同二七條以下）、控訴院ハ地方裁判所ノ第一審裁判ノ上訴ニ付キ、大審院ハ地方裁判所ノ第二審裁判及控訴院ノ裁判ニ對スル上訴ニ付キ裁判權ヲ有ス（同三七條以下）。

土地ノ管轄ハ一ニ之ヲ裁判籍ト稱シ、原則トシテ被告ノ住所ニ依リテ定メラレ（一〇條）尙ホ幾多ノ例外裁判籍ヲ定メ（一〇條以下）數個ノ管轄裁判所アル場合ニハ原告ノ選擇ヲ許ス（二五條）。

裁判所ノ管轄ニ專屬ナルモノト否トアリ。專屬管轄ニ屬スルモノハ原告ノ選擇權ナキハ勿論當事者ノ合意ニ依ル管轄ノ變更ヲモ許ササルモノトス（二九條以下）。

裁判官カ其職務ヲ行フニ方リテハ常ニ必ス公平ヲ維持シ其間寸毫ノ私意ヲ挾ムヘカラス。是ニ於テカ判事及裁判所書記ニ對スル除斥及忌避ノ制度アリ。除斥トハ訴訟當事者ト一定ノ關係アル判事ハ法律上當然其事件ニ干與スヘカラサルヲ謂ヒ、忌避トハ訴訟當事者ノ申立ニ因リ不公平ノ裁判ヲ爲ス惧アル判事ヲ其事件ノ裁判ヨリ排斥スルヲ謂フ（三二條以下）。

第三節　訴訟當事者

訴訟當事者トハ訴訟法上ノ權利ノ主體タルヘキ者ヲ謂フ。私權ヲ害セラレタリトシテ國家ノ救濟ヲ要求スル者ヲ原告ト云ヒ、權利ヲ侵害シタリトシテ訴ヲ受クル者ヲ被告ト云フ。此等ノ者ヲ主タル當事者ト稱シ、主タル當事者ノ外ニ主參加人（五一條）從參加人（五三條）ヲ從タル當事者トシテ說明ス。

總テ私法上ノ權利ノ主體ト爲ルコトヲ得ル者ハ訴訟法上當事者能力ヲ有ス。然レトモ當事者タルノ能力ヲ有スル者必シモ訴訟能力ヲ有スルニ非ス。訴訟能力トハ自ラ訴訟ヲ爲シ又ハ他人ニ委任シテ之ヲ爲サシムル能力ヲ謂フ。訴訟能力ニ付テハ民法行爲能力ノ規定ニ從フヘキ旨ヲ定ム（四三條）。隨テ民法上完全ナル行爲能力ヲ有スル者ニ限リ訴訟能力ヲ有スト稱シテ差支ナシ。

我法律上民事訴訟行爲ハ當事者自ラ之ヲ爲スヲ原則トス（當事者訴訟主義—辯護士訴訟主義ニ對ス）。

只他人ヲシテ代リテ訴訟ヲ爲サシムル場合ニハ區裁判所ノ管轄ニ屬スル事件ノ外必ス辯護士ヲ以テ之ヲ爲サシメサル可カラス（六三條以下）。

訴訟費用ハ原則トシテ敗訴ノ當事者之ヲ負擔スヘキモノトス（七三條以下）。

第四節　訴訟手續總論

廣義ニ所謂訴訟手續中ニハ裁判手續ト强制執行手續ノ二ヲ含ム。判決ヲ爲ス裁判手續ハ訴訟當事者ノ相爭フ所ノ權利關係ニ對シ威力アル裁判所ノ宣言ヲ與フル手續ニシテ、强制執行手續ハ確定判決若クハ其他ノ執行名義ノ旨趣ニ從ヒ公力ニ依リ義務者ヲ强制シテ義務ヲ盡サシムル手續ヲ謂フ。玆ニ所謂訴訟手續トハ專ラ前者ニ關ス。

我民事訴訟法ハ自由心證主義ヲ採リ不干涉主義ヲ採リ口頭辯論主義ヲ採レリ。自由心證主義トハ各當事者ノ主張スル事實ヲ眞實ナリト認ムルニ於テ裁判官ノ自由ナル心證ニ依リ判斷セシムルヲ謂ヒ（二一七條）法律ヲ以テ證據ヲ制限スル所謂法定證據主義ニ對ス。不干涉主義トハ訴訟關係ヲ明確ニスルニ必要ナル事項ハ當事者ノ申立若クハ陳述シタルモノニ限リ、裁判所カ進ンテ職權ヲ以テ申立又ハ陳述以外ノ事項ニ立入ラサルヲ謂フ。換言スレハ當事者カ提出シタル訴訟材料ノミニ依リ判斷スル方法ナリ。口頭辯論主義ハ書面審理主義ニ對シ裁判官カ直接ニ訊問シ其心證ニ依リテ裁判ヲ爲ス主義ナリ（一〇三條）。此等ノ各主義ノ利害得失ハ社會ノ狀態、人文開明ノ程度如何ニ顧ミテ取捨スヘキモノニシテ一概ニ何レヲ是トシ何レヲ非トスルヲ得サルモノトス。尙ホ我訴訟法ノ採ル所ハ上ノ如クナルモ固ヨリ何レモ多少ノ例外アルコトヲ知ラサル可カラス。

訴訟手續ニ通常訴訟手續ト特別訴訟手續トアリ。通常訴訟手續ハ通常ノ場合ニ適用セラルヘキ手續ニシテ、特別訴訟手續ハ手續ヲ簡易ナラシメ若クハ事件ノ迅速ヲ圖ル必要アル場合ニ適用セラル。

第五節　通常訴訟手續

第一款　第一審ノ訴訟手續

第一審トシテ區裁判所ノ訴訟手續ト地方裁判所ノ訴訟手續トハ各個ノ場合ニ於テ多少ノ差異アリテ存ス。玆ニハ主トシテ地方裁判所ニ於ケル手續ニ就テ述ヘントス。蓋シ地方裁判所ノ訴訟手續ハ訴訟手續ノ原則トモ稱スヘキモノナレハナリ。

訴訟手續ハ訴ノ提起ニ因リテ開始ス。訴ノ提起ハ原告ヨリ訴狀ヲ裁判所ニ提出スルニ因リテ始マル。訴ノ提起ニ因リ裁判所ハ事件ニ付キ裁判ヲ爲スノ責務ヲ生シ、被告ニ應訴ノ義務ヲ生ス。此狀態ヲ權利拘束ト云フ。但シ我訴訟法ハ權利拘束ハ訴狀ヲ被告ニ送達スルヲ以テ始マルノ主義ヲ採レリ（一九五條）。權利拘束ノ效力トシテ（一）當事者ハ同一ノ訴訟目的ニ就キ他ノ裁判所ニ於テ訴ニ應スルヲ要

セス(權利拘束ノ抗辯)(二)原告ハ被告ノ承諾ナクシテ訴ヲ變更スルコトヲ得ス(三)受訴裁判所ヲ確定シ(以上一九五條)被告ノ反訴ヲ爲スコトヲ得ル時期ヲ定ム(二〇〇條)。權利拘束ハ訴ノ取下、判決ノ確定、和解、拋棄、認諾等ニ因リテ消滅ス。

訴狀ハ一定ノ形式ニ依ラサルヘカラス(一九〇條)。訴狀ノ要式ヲ缺クトキハ訴ノ效力ナシ(區裁判所ニ在リテハ口頭ヲ以テ訴ヲ爲スコトヲ得)(三七四條)。準備書面(一〇三條以下)ハ原告ニ於テ之ヲ提出セサルモ訴狀ノ要件ヲ缺クモノニ非スト雖モ、之カ爲メニ訴訟ノ遲滯ヲ生シ且ツ之ニ伴フ訴訟費用ヲ負擔セシメラルルノ不利アリ。被告カ訴狀ノ送達ヲ受ケタル場合ニ差出スヘキ答辯書亦同シ(一九九條)。裁判所ハ訴狀ノ送達ヨリ一定ノ期間ヲ隔テテ口頭辯論期日ヲ定メ(一九四條)當事者ヲ呼出ス。

我法律ハ口頭辯論ニ於テ訴訟手續ニ段落ヲ設ケス。故ニ當事者ハ口頭辯論ノ始ヨリ終ニ至ルマテ何時ニテモ一切ノ攻擊防禦ノ方法ヲ提出スルヲ得ヘシ(二〇九條)。只妨訴ノ抗辯ハ一定ノ時期ニ於テ之ヲ提出セサルヘカラサルモノトス(二〇六條)。裁判所ハ常ニ裁判ノ進行終結ニ注意スヘキモノニシテ、必要ノ場合ニハ訴ノ併合分離ヲ命シ及辯論ヲ一部ニ制限スルコトヲ得(一一八條乃至一二〇條)。

當事者ハ訴訟進行中ニ於テ訴ヲ處分スル權利アリ。卽チ原告ハ訴ヲ取下ケ又ハ請求ヲ拋棄スルコトヲ得ヘク、被告ハ原告ノ請求ヲ認諾スルコトヲ得。又當事者雙方ニ於テ和解ヲ爲スコトヲ得ヘシ。訴ノ取下トハ原告カ訴ヲ提起シテ求メタル裁判ヲ受クルノ權利ヲ拋棄スルコトヲ謂フモノニシテ、請求ノ拋棄ノ如ク實體上ノ權利マテモ拋棄スルモノニ非サルカ故ニ二者ヲ混同スヘカラス。又被告ノ認諾ハ之ヲ裁判上ノ自白ト混スヘカラス。自白ハ單ニ相手方ノ事實上ノ主張ヲ眞實ナリトスル意思表示タルニ止マリ、認諾ハ相手方ノ起シタル請求ヲ全然承認スルモノナリ。

被告カ原告ノ請求ヲ爭フ場合ニ於テハ裁判所ハ之カ審理ヲ爲ササルヘカラス。此場合ニ於テ各當事者ハ其主張ヲ維持センカ爲メニ各個ノ證據方法ヲ提出スルコトヲ得ヘク、裁判所ハ之ニ依リテ證據調ヲ爲スヘキモノトス。訴訟法ニ於テ認ラルル證據方法ハ(一)人證(二)鑑定(三)檢證(四)書證(五)當事者本人ノ訊問ノ五トス。

裁判所ハ當事者ノ申立、攻擊防禦ノ方法殊ニ證據調ノ結果ヲ綜合シテ裁判ヲ爲ス。裁判ニ判決、決定、命令ノ三アリ。判決ハ裁判所カ必要的口頭辯論ニ基キ訴訟方法上及實體法上ノ權利ノ存否ニ關シ宣言スル所ノ意思表示ニシテ、決定ハ判決以外ノ裁判所ノ宣言ヲ謂フ。命令ハ訴訟ノ指揮ニ關スル裁判長、受命判事、受託判事ノ爲ス宣言ナリ。請求ノ全部若クハ一部ニ付テ下シタル判決ニシテ其裁判シタル部分ニ付キ訴訟事件ヲ其審級ニ於テ完結スルモノヲ終局判決ト稱シ、終局判決ヲ爲スノ準備トシテ或爭點ニ付キ爲ス所ノ判決ヲ中間判決ト稱ス。

當事者ノ一方カ口頭辯論期日ニ出頭セサルトキハ裁判所ハ出頭シタル相手方ノ申立ニ因リ闕席判決ヲ爲ス(二四六條以下)。闕席判決ニ對シテハ一定ノ條件ヲ以テ故障ヲ申立ツルコトヲ得(二五五條以下)。

第二款　上訴審ノ訴訟手續

第一審裁判所ノ裁判ニ對シ不滿足アル當事者ハ更ニ上級裁判所ニ不服ヲ申立ツルコトヲ得ヘシ。蓋シ裁判官ト雖モ必シモ常ニ錯誤又ハ過失ナシト云フヲ得ス。是ヲ以テ一ハ當事者ノ利益ノ爲メ一ハ裁判ノ統一ヲ圖ランカ爲メニ上訴ノ制度ヲ認メタルモノナリ。然レトモ當事者ノ滿足セサル裁判ニ對シ際限ナク不服申立ヲ許スヘキニ非サルヲ以テ審級ハ之ヲ第三審ニ限レリ。

民事訴訟ハ私權保護ヲ目的トスルカ故ニ假令第一審裁判ニ不當アルモ國家カ進ンテ上訴ヲ起スモノニ非ス、只當事者ニ不滿足アル場合ニ限リ其申立ニ因リ裁判ヲ爲スヘキモノトス。

上訴ヲ分チテ控訴、上告、抗告ノ三トス。控訴及上告ハ終局判決ニ對スル不服申立ノ方法ニシテ、抗告ハ決定、命令ニ對シ特ニ許サレタル場合ニ限リ爲シ得ル不服申立ノ方法ナリ。

第一　控訴

控訴ハ未確定ナル第一審裁判ニ對シ法律點及事實點ニ不服アル當事者ヨリ一箇月ノ不變期間內ニ控訴裁判所ニ控訴狀ヲ差出シテ之ヲ爲ス（四〇〇條四〇一條）。

控訴提起ノ效力トシテ移審ノ效力、停止ノ效力ヲ生ス。移審ノ效力トハ控訴申立ニ因リテ第一審裁判所カ判決シタル訴訟ノ全部ヲシテ第一審裁判所ヲ離脫シ控訴裁判所ニ繫屬セシムルヲ謂ヒ、停止ノ效力トハ第一審判決ノ確定力卽チ上訴スヘカラサルニ至ル狀態ヲ停止スルコトヲ謂フ。元來控訴ハ第一審裁判ノ當否ヲ批判スルモノニ非スシテ事件全體ニ付キ新ニ審理裁判スルモノナリ。是ヲ以テ當事者ハ第一審ニ於テ主張セサリシ攻擊防禦ノ方法殊ニ新ナル事實及證據方法ヲ提出スルコトヲ得ヘク、第一審ニ於テ爲ササリシ陳述及拒ミタル陳述モ亦之ヲ爲スコトヲ得。但シ二者ハ全ク同一ノ訴訟ナルカ故ニ第一審ニ於テ爲シタル行爲ハ控訴審ニ於テ全然其效力ヲ失フモノニ非ス且ツ其審理裁判ハ不服ノ申立ニ依リテ定マリタル範圍ニ限ラル（四一二條乃至四一八條）。

控訴審ニ於テハ原則トシテ控訴人ノ不利益ニ前判決ヲ變更スルコトナシ（四二五條）。然ラサレハ控訴ハ控訴人ノ爲メ非常ニ危險ナルモノト爲リ、却テ權利伸張ノ途ヲ塞クノ結果ヲ生スルニ至ルヘケレハナリ。

第二　上告

上告ハ第二審ノ判決カ法律ニ違背シタルコトヲ主張スル當事者ヨリ上級裁判所ニ上告狀ヲ差出シテ之ヲ爲ス（四三四條四三八條）。

上告モ亦之ニ因リテ移審ノ效力及停止ノ效力ヲ生ス。只上告裁判所ニ於テハ常ニ法律點ニ付テノミ審理スルモノニシテ事實點ニ付テハ控訴裁判所カ憑據ト爲シタルモノヲ標準トス（四四六條）。此ノ如ク上告裁判所ハ事實ノ審理ヲ爲ササルノ結果トシテ、上告ヲ理由アリトスルトキハ上告裁判所ハ原判決ヲ破毀シ事件ヲ原控訴裁判所ニ差戻シ又ハ之ト同等ナル裁判所ニ移送スルモノトス（四

四八條)。但シ事實ノ審理ヲ要セサル場合ニ於テハ直ニ自ラ裁判ヲ爲スコトアリ(四五一條)。上告審ノ訴訟手續ニ付テハ地方裁判所ノ訴訟手續及控訴審ノ訴訟手續ノ一部ヲ準用ス(四四四條四五四條)。

第三　抗告

抗告ハ訴訟手續ニ關スル申請ヲ口頭辯論ヲ經スシテ却下シタル裁判其他法律ニ於テ特定シタル裁判ニ對シテ之ヲ爲スコトヲ得(四五五條)。

抗告ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所ノ直近上級裁判所(地方裁判所カ第二審トシテ爲シタル裁判ニ對シテハ大審院)ノ管轄ニ屬ス。而シテ抗告人ハ不服ヲ申立ラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ノ屬スル裁判所ニ抗告狀ヲ提出シテ之ヲ爲スヘキモノトス。但シ急迫ナル場合ニ限リ直接抗告裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得(四五六條四六一條)。

抗告ハ移審ノ效力ヲ生スルモ停止ノ效力ヲ生セサルヲ原則トス。不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ハ抗告ヲ理由アリト認ムルトキハ不服ノ點ヲ更正スルコトヲ得(四五九條四六〇條)。

抗告裁判所ノ裁判ニ新ナル抗告理由ヲ生シタルトキハ更ニ上級裁判所ニ再抗告ヲ爲スコトヲ得。普通ノ抗告ニ付テハ抗告期間ナキモ、即時抗告ト稱セラルルモノハ必ス七日ノ不變期間內ニ之ヲ爲ササルヘカラス(四五六條四六六條)。

第三款　再審手續

判決ハ上訴ナクシテ上訴期間ヲ經過スルト同時ニ確定シ復タ動カスヘカラサルモノト爲ル。蓋シ判決ニ對シ際限ナク不服申立ヲ許ストキハ徒ラニ權利關係ヲ永ク未確定ナラシムルノミニシテ決シテ秩序ヲ維持スル所以ニ非ス。是ヲ以テ法律ハ常ニ上訴期間ヲ定メ期間內ニ上訴ヲ爲ササルトキハ權利關係ヲ確定セシム。然リト雖モ判決ニシテ重大ナル法律ノ違背アリ又ハ重大ナル事實ノ認定ニ錯誤アル場合ニ尙ホ判決ノ確定シタル故ヲ以テ如何トモスヘカラスト爲スハ權利者ヲ保護スル途ニ於テ缺クル所ナシトセス。是ヲ以テ法律ハ確定判決ニ對シテハ一定ノ事由アル場合ニ限リ更ニ裁判所ノ審理裁判ヲ仰クコトヲ得セシム。之ヲ再審ト云フ。

再審ニ(一)原狀回復ノ訴ニ依ルモノト(二)取消ノ訴ニ依ルモノトアリ。取消ノ訴ハ判決カ訴訟手續ニ違背シタルコトヲ理由トスルモノニシテ(四六八條)原狀回復ノ訴ハ判決ノ基本ト爲リタル實體上ノ事實ニ不法アルコトヲ理由トスルモノナリ(四六九條)。

再審ヲ求ムル訴ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所ノ管轄ニ專屬ス(四七二條)。是レ再審カ上訴ト異ナル所ナリ。再審ヲ求ムル訴モ亦訴狀ヲ管轄裁判所ニ差出シテ之ヲ爲ス(四七五條)。

再審ハ新ニ事件ヲ審理スルモノニ非ス。上訴ト同シク曩ニ繫屬シタル訴訟ノ一部ニシテ不服ノ申立

アリタル判決ノ當否ヲ審査判斷スルモノナリ。而シテ再審ノ手續ハ再審ノ訴ヲ受ケタル裁判所ノ一般ノ訴訟手續ニ關スル規定ニ準據スヘキモノトス（四七三條）。

第六節　特別訴訟手續

第一　督促手續

督促手續トハ一定ノ金額ノ支拂其他ノ代替物若クハ有價證券ノ一定ノ數量ノ給付ヲ目的トスル請求ニ付キ通常ノ訴訟手續ニ依ラス簡易ナル方法ヲ以テ債權ノ執行ヲ爲サシムル手續ナリ（三八二條）。蓋シ此等ノ債權タル通常權利關係ニ付テハ爭ナキニ拘ラス債務者カ其履行ヲ爲ササル場合多ク、而モ常ニ之ヲシテ一々通常手續ニ依ラシムルカ如キハ徒ラニ時間ト手數ト費用ヲ要スルノミニシテ得ル所ナシ。是ヲ以テ法律ハ此場合ニ債權者ヲシテ簡易手續ニ依リ條件附ノ支拂命令ヲ債務者ニ對シテ發センコトヲ申立ツルコトヲ得セシム。

支拂命令ハ債務者ニ對シ債務ヲ履行スヘキコトヲ命シ若シ其債務ヲ認メサルトキハ一定ノ期間内ニ其命令ニ對シテ異議ヲ申立ツヘキコトヲ命ス（三八六條）。

支拂命令ヲ發センコトノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ爲スコトヲ得。而シテ此手續ハ事物ノ管轄ニ關係ナク通常訴訟手續ニ於ケル訴ノ提起ニ付キ普通裁判籍ノ屬スヘキ區裁判所ノ管轄ニ屬ス（三八三條）。

支拂命令ニ對シ異議ノ申立ナキトキハ期間後裁判所ハ債權者ノ申立ニ因リ之ヲ假ニ執行シ得ヘキコトヲ宣言ス（三九三條）。此假執行ノ命令ハ假執行ノ宣言ヲ附シタル闕席判決ト同一ニ取扱ハレ隨テ闕席判決ノ規定ニ從テ故障ヲ申立ツルコトヲ得（三九四條）。若シ適當ノ期間内ニ異議ノ申立アリタルトキハ支拂命令ハ其效力ヲ失ヒ爾後通常訴訟トシテ其請求ノ價額ニ從ヒ區裁判所又ハ地方裁判所ニ繫屬スヘキモノトス（三八八條乃至三九〇條）。

第二　證書訴訟、爲替訴訟

一定ノ金額ノ支拂其他ノ代替物若クハ有價證券ノ一定ノ數量ノ給付ヲ目的トスル請求ニシテ之ニ關スル證書ヲ債權者カ占有シ且ツ請求ヲ起ス理由タル總テノ必要ナル事實ヲ證書ニ依リ證スルコトヲ得ルトキハ、多クノ場合原告ニ權利ノ存在スルコトヲ推定シ得ヘシ。此等ノ場合ニ於テ原告ノ請求ヲ簡易ナル方法ニ依リ迅速ニ審理シ權利ノ執行ヲ速ナラシムルハ私權ヲ保護スル上ニ於テ緊切ノ事ニ屬ス。證書訴訟ハ此趣旨ニ由リテ設ケラレタル制度ナリ。此ノ如ク證書訴訟ハ迅速ニ權利ノ執行ヲ得セシメンカ爲メニ特ニ證據方法ヲ證書ニノミ限リタルモノニシテ原告被告共ニ只證書ニ據リテノミ權利ノ存否ヲ爭フコトヲ得ルモノトス（四八四條）。

爲替訴訟ハ證書訴訟ノ一種ニシテ商法ニ規定セル手形ニ基ク請求ニ付テ之ヲ提起スルコトヲ得セ

シム。其性質上特ニ簡易敏速ナル解決ヲ尙フカ爲メニ別段ナル規定ヲ設ク（四九四條乃至四九六條）。證書訴訟又ハ爲替訴訟ノ訴狀ニハ證書訴訟又ハ爲替訴訟トシテ訴フル旨ヲ揭ケテ之ヲ爲ス（四八五條）。

第三　公示催告手續

公示催告手續ハ未定又ハ不明ナル相手方ニ對シ權利ノ屆出ヲ催告シ其屆出ナキトキハ失權ノ宣告ヲ爲スモノニシテ、其本質ヨリ言ヘハ非訟事件ニ屬ス。而シテ公示催告手續ハ日常生スルコトアルヘキ證券紛失等ノ場合ニ於テ永ク其證券上ノ權利ヲ不確定ナラシムルノ不利ヲ除クノ必要ヨリ設ケラレタルモノニシテ、其失權ノ宣言ハ之ヲ除權判決ト稱ス。

公示催告手續ハ區裁判所ノ管轄ニ屬シ第七百六十四條以下ニ之カ規定ヲ存ス。

第七節　强制執行

强制執行ハ債權者ノ申立ニ因リ國家ノ威力ヲ以テ債務者ノ意思ヲ强制シ債權者ヲシテ實質的滿足ヲ得セシムルモノナリ。凡ソ裁判ハ裁判アリタルノミニテハ保護ノ目的ヲ達スルモノニ非ス、故ニ進ンテ其裁判ノ趣旨ニ適スル執行ヲ保障セサルヘカラス。是レ强制執行制度ノ設ケラルル所以ナリ。

强制執行ノ機關ハ裁判所又ハ執達吏ナリ。是等ノ機關ニ對シ强制執行手續ノ開始ヲ求ムルニ適スル權利ハ之ヲ債務名義ト云フ。民事訴訟法上債務名義ト爲リ得ルモノハ（一）執行シ得ヘキ判決（四九七條）（二）抗告ヲ以テノミ不服ヲ申立ツルコトヲ得ル裁判ニシテ性質上强行ヲ爲スニ適スルモノ（八五條二九四條三〇二條三二八條等）（三）執行命令（三九四條）（四）和解（二二一條五五九條）（五）特定ノ公正證書（五五九條）等是ナリ。債務名義ハ或ハ金錢ノ支拂ヲ目的トスルモノアリ、或ハ金錢以外ノ物件ノ引渡ヲ目的トスルモノアリ、從テ其執行方法ヲ異ニス。金錢ノ支拂ヲ目的トスルモノニ在リテモ執行ヲ受クル物體ノ如何ニ因リ（一）債權ニ對スル强制執行（二）動產ニ對スル强制執行（三）不動產ニ對スル强制執行等ノ別アリ。

强制執行ノ條件不備又ハ執行方法ノ不當ニ因リ債務者又ハ第三者ノ蒙ルヘキ損害ヲ除クカ爲メノ救濟トシテ各種ノ異議ヲ認ム（五二二條五四四條五四五條五四六條）。又同一債務者ニ對スル他ノ債權者ヲ保護スル爲メニ配當要求ノ制ヲ認ム（五八九條六二〇條六四六條七〇九條）。

尙ホ强制執行ヲ爲スニ先チ其執行ヲ保全スル爲メノ便宜處分トシテ假差押及假處分ノ二方法アリ。前者ハ金錢債權又ハ金錢ニ換フルコトヲ得ル債權ニ付キ債務者ノ財產ヲ假ニ差押ヘ其處分ヲ禁止制限スルコトヲ目的トシ（七三七條）後者ハ係爭物ニ關スル假ノ處分ヲ許シ及爭アル權利關係ニ付キ債權者申立ノ趣旨ニ隨ヒ假ノ地位ヲ定ムルモノトス（七五五條七六〇條）。

第八章　刑事訴訟法

第一節　總論

刑事訴訟法ハ國家カ刑法上ノ犯人ニ對シ刑罰權ヲ實行シ又ハ實行セントスルニ當リ法律適用ノ爭議ニ關シ判事、檢事、被告等ノ遵據セサルヘカラサル所ノ形式法ニシテ公法ニ屬スルモノナリ。故ニ刑事訴訟法ハ刑法ニ對スル形式法タルコト恰モ民事訴訟法カ民法ニ對スル形式法タルカ如シ。故ヲ以テ裁判所構成法ニ於テモ亦刑事裁判所ノ組織及其職務權限ト民事裁判所ノ組織及其職務權限トヲ相對立セシメテ規定セリ。

刑事訴訟ノ民事訴訟ト異ナル主要ノ點ハ、前者ハ國家カ公法上國家主權ノ侵害者ニ對シ刑罰權ヲ實行セントスルヲ以テ訴訟ノ目的トシ其訴訟當事者ノ權利義務ノ變更ヲ許ササルヲ以テ原則ト爲スモ後者ハ之ニ反シ私人カ私法上私權ノ侵害者ニ對シ之カ回復ヲ請求スルヲ以テ訴訟ノ目的ト爲シ其訴訟當事者間ノ權利義務ノ變更ヲ許スヲ以テ原則ト爲ス。卽チ一ハ所謂職權主義ニ據リ他ハ所謂處分權主義ニ據ルモノトス。斯ノ如ク刑事訴訟法ト民事訴訟法トハ其法性ニ於テ同一ナルニ拘ラス其訴訟ノ目的ヲ異ニスルノ結果、訴訟ノ開始、進行、終了ニ關シ異ナル點ヲ生ス。以下順次ニ之ヲ略述セン。

第二節　裁判所

第一　裁判所ノ管轄

刑事裁判所ノ管轄ハ民事裁判所ノ管轄ノ如ク事物ノ管轄ト土地ノ管轄トニ大別スルコトヲ得。乃チ事物ノ管轄トハ犯罪ノ種類、刑ノ輕重、犯人ノ身分、犯罪ノ目的等ニ因リテ定マル所ノ裁判管轄ニシテ、土地ノ管轄トハ事物ノ管轄ヲ有スル裁判所ノ有スル裁判權實行ノ地理的限界ヲ謂フ。而シテ事物ノ管轄ニ付テ衝突アリタル場合例ヘハ同一事件カ事物管轄ヲ異ニスル數箇ノ裁判所ノ豫審又ハ公判ニ繫屬スルトキハ上級裁判所ニ於テ之ヲ審判スヘク、又土地ノ管轄ニ付テ衝突アリタルトキ例ヘハ一犯罪事件カ數個ノ土地ノ管轄ニ屬スル場合ニ於テハ其中ニテ最初ニ公訴ヲ受ケタル裁判所之ヲ管轄スヘキモノトス（刑事訴訟法九條一〇條）。

第二　裁判所職員ノ除斥、忌避及回避

刑事訴訟法ハ民事訴訟法ト同一法理ニ由リ裁判ノ公正無私ヲ期スル爲メ判事カ犯罪事件ニ付キ特別ノ關係ヲ有スルトキ例ヘハ判事カ被害者タリ、私訴當事者タリ、若クハ判事カ被告人、被害者又ハ私訴當事者ノ配偶者、四親等內ノ血族、三親等內ノ姻族ナルカ如キ場合ニハ其職務ノ執行ヨリ除斥シ裁判ニ干與セシメス。又判事カ法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラルル場合及偏頗ナル裁判

ヲ爲スヲ疑フニ足ルヘキ狀況アル場合ニ於テハ檢事其他ノ訴訟關係人ハ之ニ對シ書面又ハ口頭ヲ以テ忌避ノ原因ヲ疏明シテ忌避ノ申請ヲ爲スコトヲ得（二四條乃至三二條）。然レトモ特ニ偏頗ノ虞アル場合ノ忌避ニ付テハ原告若クハ被告カ其覺知シタル忌避ノ原因ヲ主張セスシテ其判事ノ面前ニ於テ申立ヲ爲シ事件ニ付請求又ハ陳述ヲ爲シタル後ハ其ノ判事ニ對シ忌避ノ申請ヲ爲スコトヲ得ス（二六條）。若シ又判事ニ於テ自ラ忌避セラルヘキ原因アリト思料スルトキハ回避スヘク、回避ノ申立ハ判事所屬ノ裁判所ニ書面ヲ以テ之ヲ爲スヘキモノトス（三三條）。

要スルニ、除斥トハ裁判所ノ職權ヲ以テ裁判ニ特別關係ヲ有スル判事ヲ退去セシムルモノニシテ、忌避ハ檢事其他ノ訴訟關係人ヨリ裁判ニ特別關係ヲ有スル判事ヲ裁判ヨリ退去セシメンコトヲ裁判所ニ請求スルモノナリ。而シテ回避ニ至リテハ裁判ニ特別ノ關係ヲ有スル判事自ラ責ヲ負フテ裁判ヨリ退去センコトヲ請求スルモノナリトス（前章對照）。

除斥、忌避、回避ニ關スル此等ノ規定ハ裁判所書記ニモ亦準用セラル（三五條）。

第三節　訴訟當事者

舊時ニ在リテ斷獄ノ制度ハ所謂糾問主義ニ據リ被告人ハ單ニ犯罪ノ證據若クハ科刑ノ對象タルノ外何等特立ノ地位ヲ認メラルルコトナク、又之カ檢舉訴追ノ機關ト審理裁判ノ機關トハ大概一人ノ兼任スル所タリキ。而モ近時ノ治罪制度ハ舊制ヲ捨テテ所謂彈劾主義ニ據リ、國家機關タル檢事ヲシテ原告タラシメ被告人ハ之ト對立シテ當事者タルノ地位ヲ認メラレ、全ク訴訟ノ形式ニ則リ裁判所ノ審理裁判ヲ受クルコトト爲レリ。

檢事ハ國家ヲ代表シテ公訴權ヲ行フモノニシテ、犯罪ノ搜査及起訴ノ職務ヲ行ヒ、公訴ノ維持及刑ノ執行ニ干與ス。

被告人ハ當事者トシテ各種ノ訴訟行爲ヲ爲シ、自己ノ利益ヲ擁護スル爲メ辯護人ヲ用フルコトヲ得ヘク、又特別ナル事情ニ依リテハ輔佐人ヲ用ユルコトヲ得。被告人ノ辯護權ハ成ルヘク之ヲ尊重スルコトニ留意シ各種ノ規定ヲ設ケラレタリ。

第四節　犯罪ノ搜査及公訴

第一　搜査機關

檢事ハ告訴、告發、現行犯其他ノ原因ニ由リ犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタルトキハ先ツ公訴ヲ提起スルニ先チテ事實上ノ憑據アルヤ否ヤ卽チ被疑者ハ眞ノ犯人ナリヤ又其所爲ハ犯罪行爲ナルヤ、又通常裁判所ノ管轄ニ屬スル事件ナルヤ否ヤ等ヲ識別スルノ必要アリ。故ヲ以テ刑事訴訟法ハ檢事ニ對シ此等ノ問題ヲ自由ニ審明スルノ權利ヲ付與セリ。搜査ナルモノ卽チ是ナ

リ。而シテ警視總監、地方長官及憲兵司令官モ亦各其管轄地内ニ於テ司法警察官トシテ犯罪ヲ搜査スルニ付キ地方裁判所檢事ト同一ノ權ヲ有ス。但シ公訴ヲ提起スルコトヲ得ス。廳府縣ノ警察官、憲兵將校、准士官、下士、巡査、憲兵卒、其他勅令ヲ以テ司法警察官吏ト定メラレタル者ハ檢事ノ輔佐トシテ搜査權ヲ實行スルコトヲ得ルモノトス（二四六條乃至二五一條）。

第二　告訴、告發及自首

告訴トハ被害者又ハ被害者ノ爲メニ權利ヲ行フコトヲ得ヘキ者カ犯罪ノ搜査權アル檢事又ハ司法警察官ニ犯罪事實ヲ申告スルヲ謂ヒ、告發トハ犯罪アリト思料スルトキニ告訴權者ニ非サル者カ犯罪事實ヲ搜査スル職權アル檢事又ハ司法警察官ニ犯罪事實又ハ犯罪ニ對スル自己ノ思考ヲ申告スルヲ謂フ。告訴又ハ告發ヲ爲ス者ハ犯罪ニ對スル證憑及事實、參考ト爲ルヘキ事項ヲ書面又ハ口頭ヲ以テ申告スヘク、親告罪ノ告訴ハ犯人ヲ知リタル日ヨリ六箇月内ニ之ヲ爲ササルヘカラス（二五八條乃至二七七條）。然レトモ若シ告訴又ハ告發カ告訴人、告發人ノ惡意ニ出テタルトキハ被告訴人、被告發人カ他日免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタル際告訴人又ハ告發人ニ對シ誣告罪ノ訴ヲ提起スルコトヲ得ルモノトス（刑法一七二條）。自首トハ犯人自ラ犯罪事實ヲ搜査機關ニ申告スルコトヲ謂フ。自首ニ付テハ告發ト同一ノ法則ニ從フ（二七六條）。

第三　現行犯

刑事訴訟法第百三十條ニ依レハ、現行犯罪トハ現ニ行ヒ又ハ現ニ行ヒ終リタル際ニ發覺シタル罪ヲ謂ヒ、兇器贓物其他ノ物ヲ所持シ、誰何セラレテ逃走シ、犯人トシテ追呼セラレ又ハ身體被服ニ顯著ナル犯罪ノ痕跡アリテ犯人ト思料ス可キ場合ハ現行犯人其場所ニ在リタルモノト看做サルルモノトス。

抑モ刑事訴訟法カ特ニ現行犯ニ對スル規定ヲ認メタル理由ハ犯罪事件ニ對シ急速ノ處分ヲ爲スニアラスンハ犯人カ逃亡シ又ハ證據ノ湮滅センコトヲ恐レタルニ出ツ。然レハ現行犯人其場所ニ在ルトキハ檢事、司法警察官吏、其他何人ヲ問ハス現行犯アルコトヲ知リタルトキハ令狀ヲ待タスシテ直ニ犯人ヲ逮捕スルコトヲ得ルモノトス（二二四條乃至一三〇條）。

第四　公訴

公訴ノ提起ハ檢事カ犯罪事件ノ搜査ヲ終リ十分ナル犯罪事實ノ證據ヲ得タルトキ更ニ進ンテ豫審判事ニ豫審ヲ求メ又ハ豫審ヲ求メスシテ直ニ公判判事ニ訴追スル所ノ行爲ヲ謂フ（二七八條二八八條乃至二九二條）。而シテ我國ニ於テハ起訴ニ關シ原則トシテ屬行主義卽チ檢事カ犯罪事實ノ根據ヲ得タルトキハ自己ノ便宜又ハ事情ヲ顧ミルコトナク直ニ起訴セサルヘカラサル主義ヲ捨テ任意主義卽チ檢事カ自由意思ニ因リ犯罪事實ノ如何ニ拘ラス起訴シ又ハ起訴セサルコトヲ得ルノ主義ヲ採用セリ（二七九條）。

第五節　保全處分及證據方法

第一　總論

保全處分トハ證據保全ノ目的ヲ以テ證據物ヲ押收及搜索シ被告人ヲ召喚シ或ハ逃亡又ハ罪證ノ湮滅ヲ圖ルノ虞アル被告人ヲ勾引若クハ勾留スルヲ謂ヒ、證據方法トハ裁判所カ犯罪事實認識ノ用ニ供セラルヘキ人及物卽チ被告人、證人、鑑定人、檢證物等是ナリ。左ニ逐次說明スヘシ。

第二　押收及搜索

押收トハ裁判所カ犯罪ニ關スル證據物又ハ沒收スヘキ物ヲ占有スル處分ニシテ手段ノ異ナルニ依リ二種ニ分別ス、差押及領置是ナリ。差押トハ强制手段ヲ以テ犯罪事實ヲ證明スルニ足ルヘシト思料シタル物件ヲ其占有者ヨリ取去ルヲ謂ヒ、領置ニ在リテハ强制手段ヲ用ヰスシテ物ヲ占有スル處分ヲ謂フ(一四〇條一四二條)。然レトモ軍事上祕密ヲ要スル場所ニ在ル物、官公吏ノ職務上ノ祕密ニ關スル物及醫師、藥劑師、產婆、辯護士、公證人等ノ業務上保管スル他人ノ祕密ニ關スル物ハ夫々長官、監督官廳、本人等ノ承諾ヲ得ルニアラサレハ之ヲ押收スルコトヲ得サルヤ勿論ナリ(一四七條乃至一四九條)。

搜索トハ裁判所カ犯罪ノ證據タルヘキ物件、住居又ハ場所及被告人ヲ發見センカ爲メニ行フ所ノ强制作用ヲ謂フ(一四三條乃至一四七條)。

第三　召喚狀、勾引狀及勾留狀

召喚狀トハ豫審判事又ハ裁判所カ檢事ノ起訴ニ因リ犯罪事件ヲ受理シタルトキ被告人ニ對シ裁判所ニ出頭スヘキコトヲ命スル令狀ニシテ、勾引狀トハ(イ)再度召喚狀ヲ受ケタル被告人其日時ニ出頭セサルトキ(ロ)被告人定リタル住居アラサルトキ(ハ)被告人罪證ヲ湮滅スル虞アルトキ(ニ)被告人逃亡シタルトキ又ハ逃亡スル虞アル場合ニ於テ被告人ヲ裁判所ニ引致スル爲メニ發スル令狀ナリ。而シテ勾留狀ハ原則トシテ被告人ヲ訊問シタル後(イ)被告人定リタル住居ヲ有セサルトキ(ロ)被告人罪證ヲ湮滅スル虞アルトキ(ハ)被告人逃亡シタルトキ又ハ逃亡スル虞アル等ノ場合ニ於テ監獄ノ拘置監ニ拘禁スル爲メニ發スル令狀ナリ(八二條八三條八六條八七條九〇條)。而シテ此等ノ令狀ニハ被告事件、被告人ノ氏名住居及被告人ノ出頭スヘキ年月日等ヲ記載シ之ヲ發スル裁判長又ハ受命判事之ニ署名捺印シタル後、召喚狀ハ之ヲ被告人ニ送達シ、勾引狀、勾留狀ハ檢事ノ指揮ニ依リ司法警察官吏之ヲ執行スヘキモノトス(九七條九九條一〇〇條)。

第四　保釋及責付

保釋トハ豫審判事カ勾留セラレタル被告人又ハ其法定代理人、保佐人、直系ノ尊屬卑屬、配偶者、被告人ノ屬スル家ノ戶主若クハ辯護人ノ請求ニ因リ保釋請求者若クハ其他ノ者ヲシテ保證金ヲ差出

サシメ一時被告人ノ身體的自由ヲ與フルコトヲ許可スルコトヲ謂フ。然レトモ此保釋ハ被告人ニ對シ勾留狀ノ效力ヲ消滅セシムルモノニ非スシテ一時其執行ヲ停止スルノミナレハ裁判所カ被告人ノ出頭ヲ必要トスルトキハ何時ニテモ其呼出ニ應シ出頭セサルヘカラス。若シ被告人逃亡シタルトキ、逃亡スル虞アルトキ、召喚ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出頭セサルトキハ保證金ノ全部又ハ一部ヲ沒收セラルルノミナラス保釋取消ノ言渡ヲ受ケサルヘカラス(一一五條乃至一一七條一一九條)。

責付トハ我邦古昔ノ五人組預又ハ村預ノ制度ニ胚胎シタルモノニシテ、其保釋ト異ナル所ハ被告人、其他ノ者ノ請求及保證金等ヲ要スルコトナク單ニ當該機關カ職權ヲ以テ其親族又ハ故舊ニ對シ何時ニテモ呼出ニ應シ被告人ヲシテ出頭セシムヘキ旨ノ證書ヲ差出サシメ被告人ノ身柄ヲ依託スルヲ謂フ。故ニ責付中ノ被告人逃亡シタルトキ、逃亡スル虞アルトキ、召喚ヲ受ケタルモ正當ノ事由ナクシテ出頭セサルトキハ責付ノ言渡ヲ取消サルルモノトス(一一八條一一九條)。

第五　被告人ノ訊問

被告人ノ訊問ハ證據調ノ一方法ニシテ、其目的トスル所ハ豫審判事又ハ裁判長カ犯罪事件ニ關シ被告人ヲシテ自己ノ犯罪行爲ニ對シ利益又ハ不利益ト爲ルヘキコトヲ自由ニ供述セシメ之ニ由テ判事ノ心證ヲ形ラントスルニ在リ。舊時ノ糾問訴訟ニ於テハ被告人ノ自白ハ他ノ總テノ證據ヲ無效ト爲ストノ原則ヲ認メタリ。然レトモ此原則ハ不當ナルノ甚タシキモノナリ。凡ソ法理上被告人ニ不利益ナル供述卽チ自白モ被告人ノ供述ナリ、若シ夫レ被告人ノ單純ナル自白ヲ根據トシ有罪ノ宣告ヲ爲スコトヲ得ヘシトセハ其危險ヤ恐ルヘク、訴訟法存在ノ必要ヲ發見スルコトヲ得ス。故ヲ以テ我刑事訴訟法ハ第百三十四條ニ於テ「被告人ニ對シテハ被告事件ヲ告ケ其ノ事件ニ付陳述スヘキコトアリヤ否ヤヲ問フヘシ」ト規定シ、更ニ同法第百三十五條ニ於テ「被告人ニ對シテハ丁寧深切ヲ旨トシ其利益トナルヘキ事實ヲ陳述スル機會ヲ與フヘシ」ト規定シ、以テ被告人ニ利益ナル供述モ亦訴訟法上重スヘキモノナルコトヲ表彰セリ(一三三條一三九條)。

第六　證人訊問

裁判所ハ犯罪事實ヲ明確ニスル爲メ犯人以外ノ第三者カ犯罪事實ヲ實見シ又ハ實見セシナラント思料スルトキ訊問ノ爲メ之ヲ呼出スコトヲ得。此第三者ヲ名ケテ證人ト云フ。而シテ犯人以外ノ第三者カ法律上證人タルノ義務ヲ負擔シタルトキ正當ノ事由ナキ限リハ指定セラレタル日時ニ指定セラレタル場所ニ出頭シテ訊問ニ答ヘサルヘカラス。若シ證人ニシテ此責務ヲ果ササルトキハ過料、勾引等ノ制裁アリ、若シ證人カ不實ノ陳述ヲ爲ストキハ僞證罪ニ問擬セラルヘシ(刑法一六九條)。然レトモ(イ)被告人ノ配偶者、四親等內ノ血族若クハ三親等內ノ姻族又ハ被告人ト此等ノ親族關係アリタル者(ロ)被告人ノ後見人、後見監督人又ハ保佐人(ハ)被告人ヲ後見人、後見監督人又ハ保佐人ト爲ス者等ハ證言ヲ拒ムコトヲ得ルモノトス。

公務員又ハ公務員タリシ者其職務上默祕スヘキ義務アル事情ニ關スルトキ又ハ醫師、齒科醫、藥劑師、藥種商、產婆、辯護士、辯護人、辨理士、公證人及宗敎禱祀ノ職ニ在ル者又ハ此等ノ職ニ在リタル者カ其業務上取扱ヒタル事ニ付キ知リ得タル事實ニシテ默祕スヘキモノニ關スルトキ亦同シ。此等ノ者カ證言ヲ拒絕セントスルニハ其事由ヲ疏明セサル可カラス(一八四條乃至一九一條)。

第七　鑑定人

鑑定人トハ裁判所カ犯罪事件ニ繫屬スル事實ニ關シ之ヲ檢査シ其判斷ヲ徵シテ證據材料ヲ明確ニセントスルニ當リ之ニ對シ學識經驗ヲ有スルニ因リ刑事訴訟法上檢査及判斷ノ義務ヲ負擔セシメテ呼出サルル訴訟外ノ人ヲ謂フ。而シテ鑑定人ノ能力、鑑定拒絕、鑑定人ノ制裁等ハ證人ニ關スル規定ト大同小異ナリ(二一九條乃至二三〇條)。

第八　檢證

檢證トハ裁判所カ自己ノ知識ヲ以テ直覺的ニ犯罪事件ニ繫屬スル事實ノ存在ヲ知ランカ爲メニ行フ所ノ作用ニシテ、事物ノ現狀ノ實見、身體ノ檢査、死體ノ解剖、墳墓ノ發掘等ノ方法ニ依ツテ之ヲ行フ。檢證ノ目的物ヲ檢證物ト云フ。然レトモ日出前、日沒後ニ人ノ住居又ハ人ノ看守スル邸宅建造物若クハ艦船內ニ立入リ檢證セントスルニハ住居主若クハ看守者又ハ之ニ代ルヘキ者ノ承諾ヲ得ルコトヲ要ス(一七六條一七七條)。

第六節　豫審

第一　總論

豫審ハ公訴ノ提起ニ依リ開始セラルヘキ犯罪審理ノ一部ニシテ原告タル檢事、被告人及裁判所ヨリ成ル三面的訴訟關係ナリ。而シテ豫審ノ目的トスル所ハ被告人ノ犯罪所爲ヲ更ニ進ンテ公判ニ付シ其證據調ヲ準備スヘキヤ將タ被告人ヲ免訴シ訴訟關係ヲ終了スヘキヤヲ決定スルニ必要ナル程度マテ犯罪事實ノ下調ヲ爲スニ在リ。此故ニ豫審ニ於テハ此目的ヲ達スル爲メニハ物件ノ搜索、差押、被告人ノ勾引、勾留、證人、鑑定人、被告人ノ訊問、證書ノ利用、檢證處分ノ如キ殆ント總テノ審理行爲ヲ爲スコトヲ得ルモノナリ(一二二條)。而シテ我カ刑事訴訟法ハ此等ノ審理處分ニ對シ自由心證主義卽チ凡テノ方面ヨリ綜合シタル犯罪事實カ果シテ被告人ニ對シ有罪ヲ宣告スルニ足ルヤ否ヤハ判事ノ自由ナル判斷ニ任ストノ主義ヲ採用セリ(三三七條)。然レトモ豫審判事ハ濫リニ此自由心證主義ヲ暴用シ以テ檢事ノ指定シタル被告人及其行爲ノ範圍ヲ超越スルコト能ハス。是レ我國ノ法律カ糾問主義卽チ訴ノ提起ナシト雖モ裁判官ニ於テ何人カ犯罪ヲ行ヒタルヤヲ自由ニ搜査審理スルコトヲ許スノ主義ヲ捨テ彈劾主義卽チ原告ノ提起シタル訴ニ限リテ判決スルコトヲ許ス所ノ主義ヲ採用シタル當然ノ結果ナリ(二九八條)。又被告事件カ豫審ニ付セラルルモ其罪アリヤ

否ヤ全ク不明ナルハ勿論公判ヲ開始スルノ理由ト爲ルヘキ嫌疑アリヤ否ヤモ明白ナラサルヲ以テ訴訟資料ノ湮滅及ヒ内容ノ漏洩ヲ防ク爲メ公開主義ヲ捨テ密行主義卽チ取調ノ祕密ヲ保ツ主義ヲ採用シタリ(二九六條)。

第二　豫審終結

豫審終結ハ糾問主義ニ近キ豫審ヨリ純然タル訴訟主義ニ據ル公判ニ移スヘキヤ否ヤヲ決定スル中間ノ手續ナリ。我法律ニ依レハ豫審判事ハ被告事件ニ必要ナル取調ヲ終ヘタルトキハ書類及證據物ヲ檢事ニ送付シテ其意見ヲ求メサルヘカラス。而モ豫審判事ハ檢事ノ意見如何ヲ問ハス豫審ノ終結ヲ爲ササルヘカラス。而シテ被告人ニ對スル免訴ノ決定一旦確定シタルトキハ檢事ハ縱令罪名ノ變更アルモ同一ノ事件ニ付キ同一被告人ニ對シ再ヒ訴ヲ爲スコトヲ得スト規定シ以テ被告人ノ一身ヲ保障セリ。尤モ被告人ニ對スル犯罪事情ノ變更アリタル場合卽チ新ナル事實又ハ證據ヲ發見シタルトキ等ニハ其事實ニ付キ起訴シ得ヘキコト勿論ナリ(三一七條)。

第七節　公判

第一　總論

公判トハ判事カ豫審終結又ハ直接ノ起訴ニ基ツキ裁判所ニ繫屬シタル事件ニ對シ國家刑罰權ノ有無及範圍ヲ審理裁判スル所ノ行爲ヲ謂フ。

我カ刑事訴訟法ハ公判ニ關シ彈劾主義、公開主義、口頭辯論主義、直接審理主義等ヲ採用ス。彈劾主義トハ前ニ述ヘタル如ク訴追ノ問題ト裁判ノ問題トヲ分離シテ相異ナル機關ニ屬セシムルモノニシテ、口頭辯論主義トハ裁判所及訴訟當事者トノ訴訟關係カ言語ヲ機關トシテ媒介セラルルモノナリ。我カ刑事訴訟法ニ於テハ民事訴訟法第百三條ノ如ク口頭辯論主義ヲ採用スルコトヲ明言セサルモ、公判ニ關スル規定全體ノ上ヨリ推論シタル結果トシテ其然ルコトヲ斷定シ得ヘシ。公開主義トハ訴訟事件ニ對シ訴訟關係人以外ノ第三者ヲシテ介在セシムルヲ以テ其主義ト爲スモノナリ。我カ憲法ハ其第五十九條ニ於テ裁判ノ對審判決ハ之ヲ公開スヘキコトヲ規定シ、以テ刑事訴訟法カ原則トシテ此主義ヲ採用セサルヘカラサルコトヲ表彰セリ。直接審理主義トハ判事カ公判ニ於テ證據方法ヲ直接ニ自ラ利用シテ必要事實ノ存在ヲ知ルモノニシテ豫審判事ノ取調ニ基ク調書ニ依リテ判決セサルヲ主義ト爲スモノナリ(三二〇條三二九條三三七條乃至三四三條)。

第二　公判審理ノ範圍

公判審理ノ範圍カ公訴ノ範圍ニ限定セラルルコトハ刑事訴訟法第二百八十條ニ之ヲ規定セリ。卽チ公判審理ノ範圍ハ檢事カ直接ニ公判ニ起訴シタル場合及豫審判事ヨリ事件ヲ公判ニ付シ又ハ移ス言渡アリタル場合是ナリ。舊法ハ辯論ノ際發見セラレタル附帶ノ犯罪ニ付テハ公訴ナシト雖モ

之ヲ審理裁判スルコトヲ得ル例外ヲ認メタルモ新法ハ例外ヲ認メス。

第三　公判審理ノ順序

公判審理ノ順序ハ被告人ニ對シテハ先ツ人違ナキコトヲ確ムルニ足ルヘキ事項卽チ被告人ノ氏名、年齡、職業、住所及出生ノ地等ヲ問ヒ、然ル後檢事ハ被告事件ニ付キ豫審決定ニ基ツキ又ハ起訴狀ニ揭ケタル所爲ヲ陳述スヘキモノナリ。而シテ檢事ノ此陳述終リタル後判事ハ被告人ニ對シ被告事件ヲ告ケ其事件ニ付キ陳述スヘキコトアリヤ否ヤヲ問ヒ、丁寧深切ヲ旨トシ其利益ト爲ルヘキ事實ヲ陳述スル機會ヲ與ヘサルヘカラス(一三三條乃至一三五條)。檢事ノ陳述、被告人ノ訊問終リタル後證人、鑑定人ノ訊問、調書ノ朗讀、證據物件ヲ提示スル等證據調ヲ爲シ、然ル後檢事、被告人、辯護人等ノ辯論ニ移ルヘキモノトス。

第四　私訴

公判ニ於ケル審理ハ通常公訴ニ關スルモノナレトモ犯罪ニ因リ身體、自由、名譽又ハ財產ヲ害セラレ因テ生シタル損害ヲ原因トスル請求ハ便宜上之ヲ公訴ニ附帶セシメテ審理判斷スルヲ可トス。是ニ於テカ附帶私訴ノ制度アリ。被害者ハ刑事訴訟法第五百六十七條ニ依リ附帶私訴ヲ提起シ得ヘク、裁判所ハ公訴ト同時ニ之カ審理裁判ヲ爲ス(五六八條乃至五七七條五八三條乃至五八七條五九四條五九七條)。

第五　公判ノ裁判

裁判ハ形式上之ヲ區別シテ判決、決定、命令ノ三種ト爲ス。判決ハ裁判所カ公判ニ於テ爲ス終局裁判ニシテ、決定ハ裁判所ノ爲ス裁判ニシテ判決ニ屬セサルモノヲ謂ヒ、命令ハ裁判所ノ機關タル判事ノ爲ス裁判ナリ。而シテ判決ハ必ス書面ノ作成ヲ必要トスルモ、決定及命令ハ宣告セサル場合ニ限リ書面ノ作成ヲ必要トスルナリ。

裁判ニハ被告事件ニ對スル斷案卽チ主文ト斷案ノ由テ出ツル理由ナカルヘカラス。判決ニハ必ス理由ヲ附スヘキモノナリト雖モ、決定及命令ニハ理由ヲ附セサルコトヲ得ルモノアリ。而シテ裁判ハ別段ノ規定アル場合ヲ除クノ外之ヲ受クル者ニ告知スルヲ要ス。裁判ノ告知ハ宣告又ハ送達ニ依ルヘク、裁判ノ宣告ハ裁判長カ主文及理由ヲ朗讀シテ爲スヲ原則トス(五〇條五一條)。

第八節　上訴

上訴トハ當事者其他ノ訴訟關係人カ不服ナル裁判所ノ判決ニ對シ其確定前ニ於テ之ヲ破毀更正センコトヲ求ムル攻擊方法ナリ。上訴ヲ分チテ控訴、上告、抗告ノ三種ト爲ス。

第一　控訴

控訴ハ區裁判所又ハ地方裁判所ノ第一審ニ於テ爲シタル判決ニ對シ之ヲ爲スコトヲ得ルモノニシ

テ、之ヲ分テ全部控訴及一部控訴ト爲ス。

控訴ヲ爲サント欲スル檢事其他ノ訴訟關係人ハ第一審判決ノ言渡ヨリ七日內ニ原裁判所ニ申立書ヲ差出ササルヘカラス。而シテ控訴ノ申立法律上ノ方式ニ違反シ又ハ控訴權消滅後ニ爲シタルモノナルトキハ控訴ヲ棄却シ、第一審裁判所不法ニ管轄違ヲ言渡シ又ハ公訴ヲ棄却シタルトキハ判決ヲ以テ事件ヲ第一審裁判所ニ差戻スコトヲ得。其他ノ場合ニ於テハ被告事件ニ付キ更ニ判決ヲ爲ササルヘカラス（三九四條乃至四〇七條）。

第二　上告

上告ハ地方裁判所又ハ控訴院カ第二審トシテ爲シタル判決ニ對シ法令ノ違背アリタルコトヲ理由トスル場合ニ限リ之ヲ爲スコトヲ得ルヲ原則トシ例外トシテ區裁判所又ハ地方裁判所ニ於テ爲シタル第一審ノ判決ニ對シ控訴ヲ爲サスシテ上告ヲ爲スコトヲ得ル場合及ヒ法令違反以外ノ重大ナル事由アル場合ニ上告ヲ爲スコトヲ得（四〇八條乃至四一八條）。

而シテ茲ニ法令ノ違背トハ法令ヲ適用セス又ハ不當ニ適用シタルコトノ謂ニシテ、實體法ニ違背スル場合ト手續法ニ違背スル場合トアリ。前者ハ常ニ上告ノ理由ト爲ルモ、後者ハ其法規カ命令法ナル場合ニ限リ上告ノ理由ト爲ル。

檢事其他ノ訴訟關係人カ上告申立ヲ爲サント欲セハ上告申立書ヲ判決ノ言渡アリタル日ヨリ五日內ニ原裁判所ニ差出ササルヘカラス。而シテ上告ノ申立法律上ノ方式ニ違反シ又ハ上告權消滅後ニ爲シタルモノナルトキ、上告理由ナキトキハ之ヲ棄却シ、上告理由アルトキハ判決ヲ以テ原判決ヲ破毀ス。又不法ニ管轄違ヲ言渡シ又ハ公訴棄却ヲ理由トシテ原判決ヲ破毀スルトキハ事件ヲ原裁判所ニ差戻シ、不法ニ管轄ヲ認メタルコトヲ理由トスルトキハ管轄裁判所ニ移送セサルヘカラス（四四五條乃至四五〇條）。

第三　抗告

抗告ハ決定ニ對スル不服申立ニシテ法律上特ニ許サレタル場合ニ之ヲ爲スコトヲ得ルモノトス。卽チ明文ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得サル旨ヲ定メタル決定及裁判所ノ管轄又ハ訴訟手續ニ關シ判決前ニ爲シタル決定以外ノ決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得。其一二例ヲ示セハ（イ）忌避ノ申請ヲ不當ナリトシ却下スル決定（三一條）（ロ）證人、鑑定人カ宣誓又ハ供述ヲ肯セサル爲メ百圓以下ノ過料ニ處スル決定（二一〇條二二八條）ニ對シテ抗告ヲ爲スカ如キハ卽チ是ナリ。

抗告權利者カ抗告ヲ爲サント欲スルトキハ卽時抗告ハ決定アリタル日ヨリ三日內ニ普通抗告ハ原決定ヲ取消スニ付キ實益アル期間內ニ抗告申立書ヲ原裁判ヲ爲シタル裁判所ニ差出ササルヘカラス。而シテ其申立ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ抗告ヲ理由アリトスルトキハ不服ノ點ヲ更正シ又理由ナシトスルトキハ意見書ヲ附シテ抗告申立書ヲ抗告裁判所ニ送付セサルヘカラス。然ルトキハ

抗告裁判所ニ於テハ其抗告ヲ許スヘキヤ否ヤヲ調査シ、若シ抗告ノ手續其規定ニ違反シタルトキ又ハ抗告理由ナキトキハ抗告ヲ棄却シ、抗告理由アルトキハ原決定ヲ取消シ、必要アル場合ニ於テハ更ニ裁判ヲ爲スヘキモノトス。抗告裁判所ノ決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得サルモ特定ノ場合ニ限リ再抗告ヲ爲スコトヲ得ルモノナリ(四五八條乃至四六九條)。

第九節　確定判決

犯罪事件ニ關シ實體上ノ判決アリタル後一定ノ期日ノ經過ニ因リ控訴又ハ上告等ノ方法ヲ以テ判決ヲ攻擊スルコトヲ得サルニ至リタルトキハ其判決ハ茲ニ確定スルモノナリ。

判決ノ確定力ハ同一ノ所爲ニ付キ新ニ審理裁判ヲ求ムルコトヲ得ストノ主旨ニシテ判決ノ正當ナルヤ否ヤハ更ニ問フ所ニ非ス。是ヲ以テ一旦判決確定シタルトキハ同一ノ被告人ニ對シ同一ノ所爲ニ付テハ再ヒ審理裁判スルコトヲ得サル所ノ一事不再理ノ原則ヲ生ス(三一四條一號)(總論第十五章對照)。一事不再理ニ對スル例外ハ則チ次節ニ述フル所ノ非常上告及再審ノ二場合ナリトス。

第十節　再審及非常上告

再審ノ訴ハ刑事訴訟法第四百八十五條乃至五百十五條ニ規定スル所ナリ。確定判決ニ對シ事實ノ誤謬ヲ發見シタルトキ例ヘハ原判決ノ憑據ト爲リタル證據カ他ノ確定判決ニ因リ僞造又ハ變造ナリシコトノ證明セラレタル如キ場合ニ於テ、判決言渡ヲ受ケタル者ノ利益ノ爲メニスル再審ノ請求ハ管轄裁判所ノ檢事、有罪ノ言渡ヲ受ケタル者及其法定代理人、保佐人若クハ夫、有罪ノ言渡ヲ受ケタル者死亡シ又ハ心神喪失ノ狀態ニ在ル場合ニ於テハ其配偶者、家督相續人、直系ノ親族及兄弟姉妹之ヲ爲スコトヲ得ヘク、判決言渡ヲ受ケタル者ノ不利益ノ爲メニスル再審ノ請求ハ管轄裁判所ノ檢事之ヲ爲ス。

再審ノ請求ヲ爲サントスルトキハ再審請求ノ趣意書ニ原判決ノ謄本、證據書類及證據物ヲ添ヘ之ヲ管轄裁判所ニ差出スヘク、再審ノ請求ヲ受ケタル裁判所ハ申立カ法律上ノ方式ニ違反シ又ハ請求權消滅後ニ爲シタルモノナルトキ若クハ理由ナキトキハ決定ヲ以テ棄却スヘク、再審ノ請求理由アリトスルトキハ再審開始ノ決定ヲ爲ス。

非常上告ニ關シテハ刑事訴訟法第五百十六條乃至第五百二十二條ニ規定アリ。判決確定後其事件ノ審判カ法令ニ違反シタルコトヲ發見シタルトキハ檢事總長ハ大審院ニ其理由ヲ記載シタル申立書ヲ差出シテ非常上告ヲ爲スコトヲ得ルモノトス。而シテ非常上告ヲ理由ナシトスルトキハ判決ヲ以テ之ヲ棄却シ、理由アリトスルトキハ原判決ヲ破毀セサルヘカラス。然レトモ本法ニ於ケル非常上告ノ制度ハ法律適用ノ統一ヲ圖ルコトヲ目的トスルヲ以テ、大審院ニ於テハ判決ヲ法令違背ノ點ヲ破

毀スルニ止マリ其效果ヲ被告人ニ及ホササルヲ原則ト爲ス。

第十一節　裁判ノ執行

有罪ノ判決確定シタルトキハ茲ニ刑ノ執行ヲ爲ササルヘカラス。裁判ノ執行ハ其裁判ヲ爲シタル裁判所ノ檢事又ハ上訴裁判所ノ檢事ノ指揮ニ依リ之ヲ爲ササルヘカラス。然レトモ死刑ノ執行ニ付テハ例外トシテ死刑ノ言渡アリタル後一應訴訟記錄ヲ司法大臣ニ差出シ司法大臣ヨリ死刑執行ノ命令アリタル後ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス（五三四條乃至五六六條）。

尙ホ刑事訴訟ニ於ケル陪審手續ニ關シテハ卷末ニ「陪審法」ノ一編ヲ追補セルヲ以テ參照セラレンコトヲ希フ。

第九章　國際公法

第一節　國際公法上ノ權利主體

國際公法トハ國家間ノ權利義務ノ關係ヲ定メタル法律ナリ。只其制定ノ順序手續等ニ付テ國內法ト異ナル所アリ。國際公法上ノ權利ヲ有シ義務ヲ負フ者ハ只國家アルノミ。國家トハ一定ノ限ラレタル土地ニ於テ絕對服從者タル人民カ唯一ノ主權統治ノ下ニ立ツ所ノ團體ヲ謂フ。故ニ國家ノ要素ハ(一)主權(二)土地(三)人民ノ三者ナリ。

國家ノ主權ハ一ノミ。然レトモ其働キノ方面ヨリ觀察シテ國內ニ對スル働ト國外ニ對スル働トノ二種ト爲スコトヲ得。而シテ其國內ニ對スル主權ノ働ハ人民ニ對シテ積極的ニ權力ヲ以テ統治スルモノナリト雖モ、外國ニ對スル主權ノ働ハ他ノ國家ヲ侵犯スヘカラスト云フ消極的ノモノニシテ、自國主權カ他國ニ對シテ主働的ニ消極ナルカ如ク他國ヨリ自國ニ對シテモ受働的ニ消極タリ、又國內主權ノ働ノ如ク不平等ノ關係ニ非スシテ對等ニ交際スルノ關係ナリ。領土トハ一定ノ統治權ノ下ニ立ツ一定ノ限界セラレタル土地ヲ謂ヒ、積極的ノ力ト消極的ノ力トヲ有ス。積極的ノ力トハ自國ノ領土ヲ統治スル力ニシテ、消極的ノ力トハ其權力ヲ及ホスヘキ一定ノ範圍卽チ領土ヲ踰エテ主權ヲ及ホスヘカラサルコトヲ謂フ。

國家ノ領土ハ地球表面上ノ限ラレタル部分ナルカ故ニ之ヲ限ルニ境界ヲ以テセサルヘカラス。境界ヲ分チテ自然的境界及人工的境界ト爲ス。山川湖沼ヲ以テスル境界ノ如キハ前者ニ屬シ、人工ヲ以テ溝渠ヲ鑿チ境界ト爲スカ如キハ後者ニ屬ス。國家ノ領地ヲ分チテ空中ノ部分、水ノ部分、陸ノ部分ト爲ス。水ノ部分ハ(一)運河(二)海峽(三)湖水(四)河川(五)海ノ五者是ナリ。

海ヲ分チテ公海及領海トス。公海ハ自由ニシテ何レノ國ノ獨占的權力ノ下ニモ立ツコトナシ。故ヲ以テ世界萬國ハ共通ニ公海ヲ使用スルコトヲ得。領海ヲ分チテ沿岸海及狹義ノ領海ト爲ス。沿岸海トハ陸地ヨリ最低干潮ニ際シ海洋ニ向ヒテ三海里以內ヲ謂ヒ、狹義ノ領海トハ三方同一國ノ領地タル港灣內海等ノ公海ニ向ヘル入口ノ一直線ノ結付カ十里以內ナル場合ニ於テ其以內ノ部分凡テヲ謂フ。

國家カ領土主權ヲ取得スル方法ヲ分チテ二種トス。(一)本來ノ取得トハ何レノ國家ニモ屬セサル土地ヲ取得スルコトヲ謂フ。其最モ重ナルモノハ先占ナリ。(二)傳來ノ取得(繼承的取得)トハ他ノ國家ノ主權ニ屬スル領地ヲ取得スルコトヲ謂フ。其方法トシテハ交換アリ賣買アリ贈與アリ講和條約ニ基ク割讓アリ。永久占領、租借及委任統治ハ實際ニ於テ割讓ニ似タリト雖モ法理上ヨリ論スルトキハ割讓ト云フコトヲ得ス。

國家ノ第三ノ要素ハ其國籍ヲ有スル自然人ナリ。國籍トハ或ル人(自然人)カ或ル定リタル國家ノ主權ニ絕對的ニ服從スル關係ヲ謂フ。自然人カ如何ニシテ國籍ヲ有スルニ至ルヤ又何時ヨリ自己ノ從屬スル國家ノ法律上ノ權利ヲ享有行使スルニ至ルヤハ各國國內法ノ規定スル所ニシテ、我國ニ於テハ明治三十二年ノ國籍法ヲ以テ之ヲ規定ス(本書總論第二十一章第三節參照)。

第二節　國家ノ種類

主權ヲ標準トシテ國家ヲ分類スルトキハ主權國及一部主權國ノ二ト爲スコトヲ得。此區別ハ他國ヲシテ自國主權ノ行使ニ代位ヲ爲サシムルヤ否ヤヲ標準ト爲セルモノナリ。或ル國家ノ爲メニ主權ノ行使ニ承諾ヲ與ヘ又ハ之ニ依リテ主權ヲ行使スル國家ヲ宗主國ト稱ス。併合前ニ於ケル韓國ノ如キハ卽チ日本ニ對シテ一部主權國ナリ。永久中立國ハ均シク條約ニ因リテ主權行使ノ制限ヲ受クルモノナリト雖モ、宗主國ヲ有スルコトナク只永久中立ヲ保證スル國家ノ存在スルノミナルヲ以テ永久中立國ハ一部主權國ニ非ス。永久中立國ノ特性トスル所ハ(一)條約ニ因リテ生スルコト(二)他ノ國ヨリ保護ヲ受クルコト(三)中立スヘキコトヲ既ニ平時ヨリ定ムルコト(四)積極的ニ攻擊戰爭ヲ開始スルヲ得サルコト(五)他國ヨリ戰端ヲ啓カレサルコト是ナリ。

國家ノ組織ヲ標準トシテ分類ヲ爲ストキハ單獨國及複雜國ト爲スコトヲ得。單獨國トハ一個ノ國家ニシテ他ノ國家ト聯結スルコトナク其對外主權ヲ行使スルモノヲ謂フ。日本、英國ノ如キ皆然リ。複雜國トハ多數ノ國家相聚合シテ一ノ國家ヲ成シ其國家カ國際法上ノ主體タルト同時ニ之ヲ組織スル

各國家モ亦其主體タルモノヲ謂フ。千八百十五年乃至千八百六十六年ノ獨逸聯邦ノ如キ卽チ是ナリ。君合國トハ二個以上ノ國家カ君主ノ身體ヲ以テ結合スルモノニシテ國際法上各自單獨國ナリ。卽チ單ニ君主ヲ同一ニスルノミニシテ其他ノ事項ニ付テハ全ク關聯セサル國家ナリ。千九百八年以前ニ白耳義王カ亞弗利加ノコンゴー國王ヲ兼ネタルカ如キハ其實例ナリ。政合國トハ二個以上ノ國家カ政治上或事項ニ關シ合同シテ以テ外國ニ對スルモノヲ謂フ。千九百十八年以前ノ墺地利匈牙利ハ其適例ナリ。

政合國ト君合國トヲ區別スル實益ハ、政合國ヲ組成スル一國カ他國ト交戰スル場合ニ於テハ其他ノ政合國モ亦交戰國ト爲ルノ點ニ在リ。之ニ反シテ君合國ニ於テハ其一方カ第三國ト交戰スル場合ニ於テモ其君合國ノ他ノ一方ハ毫モ戰爭ニ關係セサルコトヲ得ヘシ。

第三節　國家ノ權利義務

國家ハ獨立ノ權利ヲ有スレトモ國際團體ノ一員トシテ存在スル限リハ勢ヒ他國ノ權利ヲ害セサル限リニ於テ獨立ナリト云ハサルヲ得ス。形式上ヨリ言ハハ國家ハ外國ニ對シ同等均一ノ權利ヲ有ス。國家ノ權利カ國際團體存立ノ必要ヨリ見テ多少ノ制限ヲ受クルハ蓋シ數ノ免レサル所ナリ。治外法權ハ其最モ重ナルモノナリ。治外法權ハ本國ノ政治又ハ軍事ヲ代表スル人又ハ物カ外國ノ領土内ニ在リテ其國ノ法律ノ實質ニ從フコトヲ免カルルノ觀念ニ非ス、却ツテ其國家カ自國ノ法律ニ從フコトヲ自國滯在ノ或外國ノ人及物ニ對シテ恩惠的ニ免除スルコトヲ謂フ。

治外法權ヲ受クル人及物左ノ如シ（總論第十四章對照）。

（一）國家　國家ハ他國主權ノ下ニ立ツヘキモノニ非サルヲ以テ外國ヨリ治外法權ヲ受ク。從テ國家カ他國ニ於テ財產ヲ有スルトキ又ハ行爲ヲ爲ストキハ該財產又ハ行爲ニ付テハ治外法權ヲ受クヘシ。

（二）君主、君主ノ扈從者及君主ノ貨物亦同シ。而シテ大統領亦之ニ準ス。

（三）大使、公使、大公使館、大公使館員亦然リ。

（四）領事　領事ハ本國ノ經濟上ノ代表者ニシテ政治上若クハ軍事上ノ代表者ニ非サルカ故ニ治外法權ヲ有セス。然レトモ今日ニ於テハ條約ヲ以テ領事、其家族、從者等ニモ或種ノ特權ヲ與フヘキコトヲ定ムルモノ多シ。舊日獨領事職務條約第三條ノ如キ是ナリ。

（五）軍艦及軍隊

治外法權ハ條約ノ約定ヲ俟タスシテ當然ニ存スルモノナレトモ、領事裁判權ハ特別ノ條約ニ基キテ生スルモノナリ。甲國ノ臣民乙國ニ在ルモ乙國ノ裁判權ニ服セシメスシテ甲國ヨリ乙國ニ派遣セル領事ヲシテ該事件ノ裁判ヲ爲サシムルコトヲ領事裁判權ト云フ。我國ハ舊時ニ於テ外國ノ領事裁判

權ヲ認メタレトモ、明治三十二年各國トノ條約改訂セラレテヨリ全ク之ヲ認メサルニ至レリ。而モ我國ハ支那ニ對シテ仍ホ領事裁判權ヲ有ス。我國ト支那トノ間ニ於テハ最初明治四年ノ日清修好條規ニ依リ相互ニ領事裁判權ヲ有シタリシカ、明治二十七年ノ日清戰爭開始ト共ニ一旦相互ニ領事裁判權ヲ失フニ至リ、明治二十八年ノ下ノ關講和條約ニ於テ日本ノミカ領事裁判權ヲ有スルコトトナリ、更ニ明治二十九年十月ノ日清通商航海條約第三條ニ依リ之ヲ明白ニ約定スルニ至レリ。領事裁判權ノ內容及領事裁判ノ構成ニ付テハ明治三十二年三月法律第七十號領事官ノ職務ニ關スル件ヲ見ルヘシ。

混合裁判トハ一國裁判所ニ外國人ヲ混シテ裁判官ト爲シ之ヲシテ內國裁判官ト共ニ裁判ヲ爲サシムルコトヲ謂フ。混合裁判ノ制度ハ條約ニ依リテ定メラルルモノニシテ、或國ノ法律制度完備セス其裁判公平ヲ缺クノ惧アル場合ニ於テ生スルモノナリ。

犯罪人引渡トハ犯罪人カ外國ニ逃亡シタル場合ニ於テ其者ヲ處罰スル權力ヲ有スル國家カ犯人ノ現在スル國家ニ對シテ之カ引渡ヲ請求シ其引渡ヲ受クルコトヲ謂フ。我國ハ明治十九年ニ北米合衆國ト此種ノ條約ヲ結ヒ、明治四十四年ニ露國トノ間ニモ之ニ關スル條約ヲ締結シタリ。明治二十九年ノ清國トノ通商條約第二十四條ノ內ニモ此事ニ關スル約定ヲ爲シ、明治三十年ノ西班牙トノ修好交通條約議定書第六ニ於テハ「兩締盟國ハ相互ニ犯罪人引渡ニ關スル特別條約ヲ締結スルコトニ同意ス尤モ該條約ノ締結ニ至ルマテハ該事故竝ニ民刑事件ニ關スル要求ノ執行ニ付キ締盟國ノ一方ハ他ノ一方ニ對シ最惠國ニ既ニ許與シ若クハ將來許與セラルヘキモノト同一ナル權利及特權ヲ許與スヘキモノトス」ト規定スルカ故ニ實際ニ於テハ西班牙トノ間ニモ犯罪人引渡ノ權利義務ヲ有スルナリ。

引渡スヘキ犯罪ノ種類ハ條約中ニ列記スルモノニ限ル（日米犯罪人引渡條約二條、日露犯罪人引渡條約二條）。犯罪人引渡ノ事ヲ約スルモ自國人ヲ除外シ、又政治上ノ犯罪者ヲ除外スルコト多クノ條約ニ於テ定ムル所ナリ（日米四條七條、日露三條四條）。

第四節　國家ノ代表機關

國家ノ代表機關中繼續的ニ外國ニ駐在スルモノヲ公使及領事トス。前者ハ本國ノ政治的行爲ヲ代表シ、後者ハ經濟的行爲ヲ代表ス。

外交官中特ニ廣義ノ公使ヲ分チテ全權大使、全權公使、辨理公使、代理公使ト爲ス。外國ヨリ公使ヲ自國ニ派遣スルトキハ自國ハ之ヲ受クルノ義務アリト雖モ、特ニ正當ノ理由アルトキハ其人ヲ限リテ之ヲ拒否スルコトヲ得。一切ノ公使ヲ受ケスト云フノ不法ナルコトハ固ヨリ論ナシ。公使カ外國ニ駐在セントスルニハ本國元首ヨリ（代理公使ニ在リテハ本國外務大臣ヨリ）駐在國ノ元首ニ（代理公使ニ在リテハ駐在國外務大臣ニ）宛テタル信任狀ヲ受ケ駐在國ニ赴キテ之ヲ捧呈ス。

領事ハ前ニ述ヘタル如ク本國ノ經濟上ノ代表者ナリ。其外國ニ駐在シテ職務ヲ執ルノ點ニ於テハ公使ト異ナルコトナシト雖モ其實質ニ付テハ大ナル差異アリ。卽チ公使ハ政治上ノ代表者ナルモ領事ハ經濟上ノ代表者タル根本的ノ差異以外ニ於テ、公使ハ其數ニ限アルモ領事ハ然ラス。常駐公使ハ一國ニ對シテ一人ナルヲ常例トスルニ反シ領事ハ一國內ノ諸所ニ駐在スル數人ヲ設クルヲ常トス。是レ政治上ノ利害關係ハ一ナルヘシト雖モ、經濟上ノ利害關係ハ一國ノ各所ニ依リテ異ナルヘケレハナリ。又公使ノ授受ハ特別ノ條約ヲ待ツコトナキニ反シ領事ノ駐在ハ條約ノ定ムル所ニ從フヘキモノトス。

領事ヲ分チテ任命領事、名譽領事及商業領事、裁判領事ト爲ス。任命領事ハ本國ノ官吏タル領事ニシテ、名譽領事ハ外國人ニ囑託シテ領事ノ職務ヲ執ラシムルモノナリ。商業領事トハ普通ノ領事ニシテ裁判領事トハ領事固有ノ職務タル通商ニ關スル職務ヲ行フノ外裁判事務ヲモ管掌スル領事ナリ。領事ハ本國ヨリ任命セラレテ駐在國ニ赴任スルモノナリト雖モ、其職務ヲ行フハ駐在國カ之ニ認可狀ヲ與ヘタル後ニ於テ始マル。而シテ領事ヲ受ケタル國家ハ其者ニ對シテ認可狀ヲ與フルヲ普通トスレトモ、其領事カ嘗テ犯罪ヲ爲シタル者ナルトキ、或ハ駐在國ノ安寧秩序ヲ紊ルノ虞アル場合ノ如キハ之ヲ拒否スルコトヲ得ヘシ。領事ノ職務ハ(一)駐在國ニ於テ本國ノ經濟上ノ利益ヲ圖ルコト(二)本國ト駐在國トノ間ニ於ケル通商交通ニ關スル條約カ實際適當ニ行ハルルヤ否ヤヲ監視スルコト(三)駐在國ニ在ル本國人民ヲ保護スルコト等ヲ主要ナルモノトス。

第五節　條約

條約トハ文字ヲ以テ表ハシタル國家間ノ意思ノ合致ナリ。條約ノ要素トシテ必要ナルハ(一)主權(二)代表者(三)合意(四)批准(五)適法(六)客體是ナリ。

條約ハ合意ニ因リテ成立スルカ故ニ其消滅モ亦合意ニ因ル。其他締結國一方ノミノ意思ニ因リテ條約ノ消滅スルコトアリ。締結國ノ一方ノミカ權利ヲ有スル場合ニ於テ其權利國カ義務ノ免除ヲ爲シタル場合ノ如キ是ナリ。又締結國ノ意思ニ因ラスシテ條約ノ消滅スルコトアリ。條約義務ノ履行カ法律上不能ト爲リタル場合是ナリ。主體及目的物ノ消滅ハ其主要ナルモノナリ。例ヘハ或ル河海ニ關シ航行條約ヲ締結シタル場合ニ於テ其河海カ航行スルコト能ハサルニ至リタルトキノ如キ、又例ヘハ三國間ニ同盟條約ヲ結ヒタルニ其內ノ兩國カ戰爭ヲ爲シタルトキハ第三國ノ條約義務ハ全ク消滅ニ歸スヘシ。

條約ノ內最モ普通ナルモノヲ通商條約トス。古代ニ於テハ各國概ネ鎖國主義ヲ固守シ外國トノ交通ヲ杜絕シタリト雖モ、今日ニ於テハ絕對的ニ外國ト交通セサル國家ナク自由ニ通商貿易ヲ爲スコトヲ得ヘシ。故ニ之ヲ條約ノ歷史ニ徵スルニ、各國ノ交通ハ修好條約ニ始マレリ。其後ニ至リテハ修好

ヲ原則トシ、鎖國主義ハ全然其跡ヲ絶チタルヲ以テ、玆ニ通商條約ノ發達ヲ見ルニ至レリ。而シテ該條約中ニハ通常(一)締結國人民ノ住居、往來ノ自由(二)生產及製造貨物ノ輸出入ノ自由(三)關稅ニ關スルコト等ヲ約定ス。關稅徵收ノ方法ニ二種アリ。一ヲ國定稅率ト云ヒ、他ヲ協定稅率ト云フ。前者ハ其國單獨ノ意思ヲ以テ一般ニ輸出入ノ物品ニ課スルモノニシテ、後者ハ條約ヲ以テ或ル特定ノ國ト協約シテ定ムル方法ナリ。

關稅賦課ノ標準ハ從價稅又ハ從量稅ノ何レカニ依ル。從價稅ニ付テノ價ハ何レノ地ニ於ケル何時ノ價格ニ依ルヤハ條約ヲ以テ定ムルモノナリ。而シテ日英追加條約ハ此點ニ關シ「本稅目ニ從ヒ輸入品ニ課スヘキ從價稅ハ其物品ノ仕入地、產出地若クハ製造地ニ於ケル原價ニ其仕入地產出地若クハ製造地ヨリ仕向港ニ至ルマテノ保險料及運送費ヲ加ヘ又手數料アルトキハ之ヲモ加ヘテ算定スヘキモノトス」ト規定セリ。

通商條約ニハ多ク最惠國條款アリ。最惠國條款トハ條約締結國一方カ第三國ニ與ヘタル且ツ將來ニ於テ與フルコトアルヘキ權利及利益ヲ條約締結國他方ニモ亦與フヘシト云フコトヲ相互的或ハ一方的ニ定メタル條款ヲ謂フ。

條約ハ普通之ヲ分チテ(一)政治的條約(二)行政的條約ノ二種ト爲ス。同盟條約、中立條約ノ如キハ前者ニ屬シ、郵便條約、通商條約、地役條約、電信條約、著作權ニ關スル條約、工業所有權ノ保護ニ關スル條約ノ如キハ後者ニ屬ス。我國ト諸外國トノ間ニ於ケル種々ノ條約ハ條約彙纂ニ就テ見ルヘシ。

第六節　國家間爭議ノ調和

國家間ニ爭議アル場合ニ成ルヘク戰爭ニ至ラサラシメンカ爲メニ之ヲ調和スル方法ニ第三國ノ其間ニ介入スルモノト紛爭國相互ニ於テスルモノトノ二者アリ。先ツ第三國カ紛爭國ノ間ニ介入シテ平和ヲ圖ル方法ヲ擧クレハ左ノ如シ。

(一)　周旋　周旋トハ第三國カ紛爭國ノ間ニ立チテ一方ノ意思ヲ他方ニ通スル方法ナリ。故ニ此場合ニ於ケル第三國ノ行動ハ一ノ使者タルニ過キス。卽チ紛爭國一方ハ其事件ニ付テ斯ル意見ヲ有ス斯ル請求ヲ爲ス等ノコトヲ周旋國タル第三國カ紛爭國他方ニ通知スルノミ。

(二)　居中調停　此場合ニ於テハ第三國ハ進ンテ平和ヲ圖ルノ手段ヲ盡スモノニシテ、周旋ノ場合ノ如ク單ニ一方ノ意見ヲ他方ニ通スルモノト異ナレリ。

(三)　仲裁裁判　國家カ法律上ノ疑義ニ關シテ相爭フニ當リ第三者カ之ヲ解決センカ爲メニ其間ニ介入シ判定ヲ與フルモノヲ仲裁裁判ト云フ。千九百七年ノ國際紛爭平和的處理條約ニ依レハ各國家ハ既ニ生シタル紛議又ハ將來生スルコトアルヘキ紛議ノ爲メニ所謂仲裁契約ヲ締結スルコトヲ得ヘク、此契約ハ誠實ニ仲裁宣告ニ服從スルノ約束ヲ包含スルモノトス。常設仲裁裁

判所ハ之ヲ和蘭ノ海牙ニ設置ス。仲裁裁判ノ手續、裁判官タルヘキ人、其補缺等ノコトハ凡テ右ノ國際紛爭平和的處理條約ヲ見ルヘシ。千九百十九年ノ國際聯盟規約第十條第十三條モ亦仲裁裁判ニ關スル規定ヲ設ケタリ。

(四) 國際審査　國家間ニ事實問題ニ付キ疑又ハ爭アル場合ニ第三者カ之ヲ調査スルヲ國際審査ト云フ。此點ニ付テモ亦千九百七年ノ國際紛爭平和的處理條約ヲ見ルヘシ、尙ホ國際聯盟理事會ノ審査ニ關スルコトハ千九百十九年國際聯盟規約第十二條ヲ見ルヘシ。

次ニ紛爭國雙方カ自ラ紛爭ヲ解決スル方法ニ二種アリ。一ハ暴力ヲ用ヒサルモノ例ヘハ說破、權利ノ拋棄、相手方ノ權利ノ是認、屈服、最後ノ通牒ノ如シ。他ハ暴力ヲ用フルモノニシテ其方法四種アリ。(一)報復(二)報仇(三)船舶ノ差押(四)平時ノ封鎖是ナリ。報復トハ甲國カ乙國ノ利益ヲ害シタル場合ニ於テ乙國カ之ト同一ノ方法ヲ以テ甲國ノ利益ヲ害スルヲ謂ヒ、報仇トハ甲國カ乙國ノ權利ヲ害シタル場合ニ於テ乙國カ之ト同一ナル方法又ハ異ナリタル方法ヲ以テ甲國ノ權利ヲ害スルヲ謂フ。

第七節　戰爭

戰爭トハ國際公法上ノ主體(時トシテ交戰主體タルノ承認ヲ受ケタル團體)ノ間ニ於テ雙方カ公ニ爲ス所ノ武力ノ爭ノ總稱ナリ。

第一款　戰爭開始ノ直接效果

戰爭開始ノ直接效果ヲ分チテ(一)人ニ對スルモノ(二)物ニ對スルモノ(三)法律關係ニ關スルモノトス。人ニ對スルモノノ內敵國人ニ對スルモノト中立國人ニ對スルモノトアレトモ玆ニハ前者ヲ說クニ止ム。敵國人ノ內交戰者ノ事ハ姑ラク措キ、平和的ノ人ニシテ內國ニ在ル者ヲ主トシテ說明セント欲ス。古ニ於テハ戰爭ハ交戰國相互ノ一切ノ關係ヲ破壞スルモノナリト思惟シタレトモ、近時ニ至リテハ戰爭ハ單ニ交戰國間ノ平和關係ヲ破ルニ止リテ一切ノ關係ヲ破壞スルモノニ非ストノ思想行ハル。故ニ兩國間ノ平和修好ノ代表機關タル公使領事ノ如キハ去ツテ本國ニ歸レトモ、交戰國ノ平和的人民ニシテ敵國ニ在ル者ハ必シモ然ラス。苟クモ特殊ノ事情ト交戰上ノ必要トカ存在スルニ非サルヨリハ交戰國ハ敵國人民ノ自國ニ在ル者ヲ追放スルコトナシ。日清戰爭ニ於ケル日本ノ行動(明治三十七年二月十日內務省訓令二號)日獨戰爭ニ於ケル日本ノ行動(大正三年八月內務省訓令一一號)皆然リ。然レトモ苟クモ交戰上ノ必要アルトキハ敵國人ノ內國ニ在ル者ヲ追放スルコトヲ得ヘク、又敵國人ノ新ニ入ラントスル者ヲ拒否スルコトヲ得ヘク、又敵國人ノ內國ヲ去ラントスルヲ止ムルコトヲ得ヘシ。

敵國ノ貨物ノ內國領海內ニ在ルモノハ之ヲ沒收スルコトヲ得ヘシ。敵船ハ其敵國國有ニ屬スルト敵國ノ個人ニ屬スルトヲ問ハス之ヲ沒收スルコトヲ得。然レトモ戰爭前ヨリ內國港灣內ニ在ル敵船及

戰爭ノ開始ヲ知ラスシテ內國港灣ニ入航シタル敵船ニ對シテハ一定ノ猶豫期間ヲ與ヘテ立去ラシメ該猶豫期間內ニ立去ル者ニ對シテハ沒收ヲ加フルコトナキヲ例トス（明治三十七年二月九日勅令二〇號）（千九百七年第二回萬國平和會議決議）（大正三年八月勅令一六三號）。

古ニ於テハ條約締結國間ニ戰爭ノ起ルトキハ其條約ハ之ト同時ニ當然ニ消滅スルモノナリトセリ。然ルニ今日ニ於テハ然ラス、或ル條約ハ消滅スレトモ或ル條約ハ依然トシテ有效ナリ。今之ヲ細別セハ左ノ如シ。

（一）開戰ト同時ニ消滅スルモノ　之ニ屬スルモノハ戰爭ノ原因ト爲リタル條約、政治上ノ條約及軍事上ノ條約是ナリ。

（二）開戰ト同時ニ其效力ヲ停止セラルルモノ　社會的條約例ヘハ郵便條約、犯罪人引渡條約ノ如キハ此種ニ屬ス。

（三）戰ノ開始セルニ拘ラス依然トシテ實行セラルルモノ　戰時ヲ目的トシテ締結セラレタル條約ハ之ニ屬ス。例ヘハ赤十字條約、陸戰ノ法規慣例ニ關スル條約等ノ如シ。其他交戰中ニ締結セラルル條約モ亦有效ナリ。例ヘハ休戰條約、俘虜交換條約、開城條約ノ如シ。而シテ此種ノ條約中ニハ戰爭ノ終了後其效力ヲ喪フモノアリ又存續スルモノアリ。俘虜交換條約ノ如キハ前者ニ屬シ、講和條約ノ如キハ後者ニ屬ス。

開戰後ノ通商及私人間ノ債權、訴權等ニ關シテハ英國主義ト大陸主義トノ二種アリ。英國主義ハ交戰國人民間ノ通商ヲ嚴禁シ、開戰後ノ取引ヲ無效トシ、開戰前ノ取引及其訴權ハ戰爭ノ終了ニ至ルマテ效力ヲ中止スルモノトス。大陸主義ハ之ニ反ス。千九百十四年——千九百十九年間ノ戰爭ニ於テハ前者ヲ採ル者極メテ多カリキ。是レ千九百十六年巴里經濟會議ニ於テ決シタル所ニシテ、我國內法トシテハ大正六年四月二十三日勅令第四十一號對敵取引禁止令其他ヲ以テ之ヲ定メタリ。

第二款　交戰者、非交戰者

戰爭ノ暴力ノ下ニ立ツ者ハ交戰者ニ限リ、非交戰者卽チ平和的人民ハ戰爭ノ暴力以外ニ立ツモノナリ。交戰者ヲ分チテ戰鬪員、非戰鬪員ト爲ス。何ヲ交戰者ト見ルヘキヤニ付テハ千九百七年十月十八日ノ陸戰ノ法規慣例ニ關スル規則第一條ノ左ノ規定ニ從フ。

戰爭ノ法規及權利義務ハ獨リ之ヲ軍ニ適用スルノミナラス左記ノ條件ヲ具備スル民兵及義勇兵團ニモ亦之ヲ適用ス

第一　部下ノ爲メ責任ヲ負フ者其頭ニ在ルコト

第二　遠方ヨリ認識シ得ヘキ固著ノ特殊徽章ヲ有スルコト

第三　公然兵器ヲ携帶スルコト

第四　其動作ニ付キ戰爭ノ法規慣例ヲ遵守スルコト

尙ホ其例外トシテ同第二條ニ左ノ規定アリ。

占領セラレサル地方ノ人民ニシテ敵ノ接近スルニ當リ第一條ニ依リ編成ヲ爲スノ遑ナク侵入軍隊ニ抗敵スル爲メ自ラ兵器ヲ操ル者カ公然兵器ヲ携帶シ且戰爭ノ法規慣例ヲ遵守スルトキハ之ヲ交戰者ト認ム

第三款　俘虜

俘虜トハ交戰國一方ノ交戰者(多少ノ例外アリ)カ事實上他方ノ軍隊ノ權力ノ下ニ立チタル者ヲ謂フ。俘虜ハ國家ノ俘虜ニシテ私人、將帥、兵士又ハ軍隊ノ俘虜ニ非ス。故ニ俘虜ヲ待遇スルハ之ヲ捕ヘタル國家ノ爲スヘキ行爲ナリ。俘虜ヲ爲スノ目的ハ之ニ依リテ敵ノ交戰力ヲ減殺センカ爲メナリ。故ヲ以テ國家ハ俘虜ヲ虐待スヘカラス、又理由ナクシテ俘虜ヲ責罰スヘカラス。俘虜カ逃走スルトキハ敵ノ交戰力ヲ減殺スルノ目的ヲ達スルコト能ハサルカ故ニ國家ハ俘虜ヲシテ武器ヲ脫セシメ一定ノ場所ニ留置スルコトヲ得(陸戰ノ法規慣例ニ關スル規則五條)。但シ之カ爲メニ俘虜ノ健康ヲ害スルノ擧動アルヘカラス。俘虜ニハ其名譽ト健康トヲ害セス且ツ戰爭行爲ニ關セサル限リニ於テ適當ナル職業ヲ執ラシムルコトヲ得ヘシ。又斯ル場合ニ於テハ勿論賃錢ヲ仕拂ハサルヘカラス。俘虜カ取得シタル賃錢ハ其境遇ノ艱苦ヲ輕減スルノ用ニ供シ、剩餘アルトキハ解放ニ際シ給養ノ費用ヲ差引キテ之ヲ交付ス(同六條、明治三十七年九月十六日俘虜勞役規則)。俘虜ヲ給養スルハ之ヲ捕ヘタル國家ノ義務ナリ。但シ條約ヲ以テ之カ反對ノ規定ヲ設クルコトヲ妨ケス。俘虜給養ノ程度ハ之ヲ捕ヘタル國家ノ軍隊ニ供スルモノヲ標準トス(同七條)。俘虜逃走ヲ企ツルトキハ處罰ヲ受ク。逃走ヲ遂ケタル者後ニ至リ再ヒ捕ヘラルルコトアルモ前ノ逃走ニ關シ何等處罰ヲ受クルコトナシ(同八條)。

俘虜ノ解放ヲ分チテ(一)單純解放(二)宣誓解放ノ二種トス。宣誓解放ハ捕ヘタル國家カ俘虜ヲシテ再ヒ此戰爭ニ從事スルコトナカルヘシト誓ハシメ此宣誓ヲ條件トシテ解放スル方法ナリ。此條件ニ依リテ解放セラレタル者ハ自ラ之ヲ守ラサルヘカラサルノミナラス俘虜ノ本國モ亦該被解放者ヲシテ此宣誓ニ背カシムヘカラス。本國若シ之ヲ犯サシムルトキハ國際法違反ノ責ヲ負フヘク、俘虜自ラ之ヲ犯セハ再ヒ捕ヘラレタル場合ニ處罰ヲ免レサルヘシ。解放ヲ許スト否トハ國家ノ權利ニシテ義務ニ非ス(同一〇條乃至一二條、明治三十八年二月法律三八條俘虜處罰ニ關スル件四條)。俘虜カ俘虜タルノ身分ヲ失フ原因ハ解放ノ外、交換、逃走、死亡、戰爭ノ終了、捕ヘタル國ノ國籍ノ取得等ナリ。

第四款　間諜

間諜トハ一方ノ交戰者ニ通知スルノ意思ヲ以テ他ノ一方ノ作戰地帶內ニ於テ隱密ニ行動シ又ハ虛妄ノ口實ヲ構ヘテ各種ノ情報ヲ收集シ若クハ收集セントスル者ヲ謂フ(同二九條)。間諜ハ俘虜タルノ待遇ヲ受クルコト能ハスシテ處罰ヲ受ク。蓋シ間諜ナル行爲ハ間諜セラルル國家ニ取リテ極メテ大ナル危險ナレハナリ。

第五款　軍使

軍使トハ交戰國一方ノ軍隊ニ赴キ軍隊ノ意思ヲ通スル者ナリ。軍使ハ平和的行動ヲ爲ス者ナルカ故ニ戰鬪ノ暴力ノ下ニ立ツコトヲ免除セラル。之ヲ名ケテ軍使ノ不可侵權ト云フ。軍使ハ外部ヨリノ表彰方法トシテ白旗ヲ揚ク。蓋シ白旗ハ平和ヲ意味スルモノナレハナリ。不可侵權ヲ受クル者ハ獨リ軍使ニ限ルコトナク軍使ニ隨從スル喇叭手、鼓手、旗手、通譯者皆然リ。軍隊ハ他方ヨリ來ル所ノ軍使ヲ受クヘキ義務アルモノニ非ス。然レトモ既ニ軍使ヲ受領スルトキハ自己ノ軍隊ノ狀態ヲ探知セラルルノ虞アルカ故ニ之ヲ防遏スルニ必要ナル充分ノ手段ヲ講スルコトヲ得ヘシ。軍使若シ特權ヲ濫用スレハ軍隊ハ之ヲ抑留スルノ權利ヲ有ス。軍使若シ特權ヲ利用シテ背信ノ行爲ヲ爲シ又ハ之ヲ敎唆シタルコト明カナルトキハ不可侵權ヲ失フ(同三二條乃至三四條)。

第六款　傷者、病者、難船者、死者

傷者及病者ハ既ニ戰鬪力ヲ有セサルカ故ニ之ニ對シテ暴力ヲ加フル必要ナシ。故ヲ以テ千八百六十四年ノジェネヴァ條約(明治三十九年改正)ハ傷者、病者及病院附屬ノ人員、負傷者ヲ救護スル人民及病院ヲ侵ササルヘキコトヲ定ム。此條約上ノ保護ヲ受クル者ハ白地ニ赤十字ヲ畫シテ其徽號ト爲ス。赤十字條約ハ只陸軍ニノミ適用セラルルモノナリシカ、千八百九十九年海牙ニ於テ成リタル千八百六十四年ジェネヴァ條約ノ原則ヲ海戰ニ應用スル條約及千九百七年ノ改正條約ニ依リ之ヲ海戰ノ上ニモ適用スルコトト爲リタリ。(一)交戰國カ艤裝シタル軍用病院船卽チ傷者病者及難船者ヲ救護スル唯一ノ目的ヲ有スル船舶(二)又ハ公認セラレタル救恤協會ノ費用ヲ以テ全部又ハ一部分ヲ艤裝シタル病院船(三)中立國ノ一個又ハ公認セラレタル協會ノ費用ヲ以テ全部又ハ一部分ヲ艤裝シタル軍用病院船ノ三者ハ戰爭ノ暴力ノ下ニ立タサルコトト爲レリ。委曲ハ同條約ヲ參照スヘシ。

死者ニ對シテハ凌辱ヲ加フヘカラス又成ルヘク其何人ナルヤヲ確ムルノ方法ヲ講スヘシ。又死者ハ之ヲ埋葬スヘク、埋葬ハ死者ノ階級ニ從ヒテ取扱ヲ異ニスヘシ。死者ノ財產ハ之ヲ本國ニ還付スヘシ(明治三十七年五月陸軍省達一〇〇號戰場掃除及戰死者埋葬規則陸戰ノ法規慣例ニ關スル規則一九條)。

第七款　敵ノ財產

敵ノ財產ヲ陸上ニ於ケルモノト海上ニ於ケルモノトニ區別スルヲ要ス。玆ニハ只陸上ニ於ケルモノヲ述フルニ止ム。敵ノ財產ハ所有者ヲ本トスレハ敵國國有ノモノト公有ノモノト私有ノモノトノ三種アリ。用方ヲ本トスレハ戰爭ノ用ニ供スルモノト平和ノ用ニ供スルモノト戰爭ノ用ニモ併用スルモノトノ三種アリ。國有財產ニシテ戰爭ノ用ニ供スル物カ不動產ナルトキハ之ヲ破壞スルコトヲ得ヘク、動產ナルトキハ悉ク之ヲ沒收スルコトヲ得。戰爭ノ用ニ供スルコトナク平和ノ用ニ供スル物ニ對シテハ使用收益ノ權ヲ有スルニ止マル。公有財產ハ凡テ戰爭ノ用ニ供セサルモノナルカ故ニ之ヲ破壞又ハ沒收スルコトヲ得ス。寺院、學校、育兒院、圖書館及其內ニ在ル財產ノ如シ。但シ公有財產ト

雖モ事實上戰爭ノ用ニ供シタル物ハ此限ニ在ラス。私有財產ハ凡テ不可侵ナリ。陸戰ノ法規慣例ニ關スル規則第四十六條第二項ニ「私有財產ハ之ヲ沒收スルコトヲ得ス」トアル是ナリ。

第八款　占領

占領トハ交戰國一方カ軍隊ノ力ヲ以テ他方ノ土地ニ侵入シ被侵入國ヲシテ實際上其土地ニ主權ヲ行動スルコト能ハサラシメタル狀態ヲ謂フ。陸戰ノ法規慣例ニ關スル規則第四十二條ニ「一地方ニシテ事實上敵軍ノ權力內ニ歸シタルトキハ之ヲ占領セラレタルモノト看做ス占領ハ右權力ノ成立シテ且行使セラルヘキ地域ヲ以テ限リトス」トアル是ナリ。

占領地ノ主權ハ依然トシテ被占領國ニ存シ、占領國ハ只軍事上ノ必要ヨリ占領軍隊ヲシテ事實上本國ノ主權ヲ占領地ノ上ニ行ハシムルニ過キス。故ニ講和ノ時ニ際シ何等特別ノ合意ナキトキハ占領地ハ當然被占領國ノ主權行使ニ復歸スルモノナリ、占領軍隊ハ占領地ニ於テ成ルヘク被占領國ノ法律、裁判、行政等ヲ尊重スヘキモノナリト雖モ、軍事ノ必要上已ムヲ得サルトキハ之ヲ中止シテ自ラ法律ヲ發布施行スルコトヲ得。占領軍隊ハ占領地人民ノ權利ヲ毀害スヘカラス。又占領地ノ人民ニ對シ占領軍ノ本國ニ臣從スヘシト命スルコトヲ得ス、又凡テ家族ノ名譽及權利、個人ノ生命及私有ノ財產竝ニ宗教上ノ信仰及其遵行ハ之ヲ尊重セサルヘカラス。

占領地ノ財產ニ對スル占領軍隊ノ權利ハ第七款ニ述ヘタル所ニ準スヘシ。占領地ノ私有財產ハ不可侵ナルコトヲ原則トスト雖モ二三ノ例外アリ。徵發、課役、取立金ノ三者是ナリ。徵發トハ占領軍ノ長官カ占領地住民又ハ團體ニ對シテ軍隊ノ行動又ハ支持ノ必要ヨリ物品ノ供給ヲ命スルコトヲ謂フ。例ヘハ宿舍、糧食、車馬等ノ供給ヲ要求スルカ如シ。課役トハ同シク勞役ノ供給ヲ命スルコトヲ謂フ。例ヘハ橋梁ヲ架スルニ必要ナル人夫ノ供給ヲ要求スルカ如シ。兩者共ニ長官ノ命令ヲ俟タサルヘカラス。又占領ニ必要ナルコトヲ限度トシ且ツ賠償金ノ支拂ヲ爲ササルヘカラス、徵發スヘキ物品ハ目的ニ適合シタルモノナラサルヘカラス、又代價ヲ支拂フコト能ハサルトキハ受領證書ヲ渡シ後ニ至リテ代價ノ支拂ヲ爲ササルヘカラス。取立金ニ關スル制限モ亦同シ。特ニ取立ニ際シテハ成ルヘク現行ノ租稅賦課ノ標準及原則ニ據ルヘク、納付者ニハ領收證ヲ交付スヘシ。

第九款　攻圍、砲擊及降伏

防禦セサル地ヲ攻圍スルハ只軍事上ノ必要アル場合ニ限ル（陸戰ノ法規慣例ニ關スル規則二五條）。防禦セル地ヲ攻擊又ハ砲擊スルハ適法ノ行爲ニシテ、其行爲ハ攻圍地內ノ物件ノ上ニモ人ノ上ニモ及フモノナリ。故ニ强襲ノ場合ノ外豫メ攻圍ヲ爲スコトヲ通告スルコトヲ要ス。蓋シ之ニ依リテ被攻圍地內ノ非交戰者及戰爭ニ關係ナキ財產ヲ安全ナル地ニ置カシメンカ爲メナリ（同二六條）。

被攻圍地ノ信仰、慈善、教育、美術、學問等ニ要スル建物ニハ外部ヨリ見ルコトヲ得ヘキ徽號ヲ附シ以テ攻擊軍ヲシテ此等ノ建物竝ニ其內ニ在ル財產ヲ毀害セサラシムルコトヲ注意スヘシ。勿論此建物

カ軍事上ノ目的ノ爲メニ用ヒラレサルコトヲ前提トス（同二七條）。攻圍地內ニ在ル第三國ノ外交官ハ戰爭ノ必要上本國政府トノ交通ニ全ク何等無制限ナルコトヲ得ス。中立者間ノ書類電報等ノ交換ハ成ルヘク妨害セサルヘシト雖モ、而モ交戰者ノ義務カ交戰ノ必要ト衝突スルトキハ後者ノ勝ヲ制スヘキコト當然ナリ。

海上ヨリ陸上ヲ砲擊スルコトニ付テハ千九百七年ノ戰時海軍力ヲ以テスル砲擊ニ關スル條約ヲ見ルヘシ。

降伏規約ハ締結者及其本國ヲ羈束ス。締結者ノ一方カ不當ノ理由ニ依リテ締結シタルトキニ於テモ該規約ハ無效ト爲ラス。只締結者カ其締結能力以外ノ事項ニ付テ約シタル降伏規約ハ其本國ヲ拘束セス。例ヘハ土地ヲ割讓スヘシト約シタル場合ノ如キ又ハ自己ノ權限內ニ屬セサル城砦ヲモ併セテ降伏セシムヘシト約シタル場合ノ如キ是ナリ。

第十款　害敵手段

戰爭ノ目的ハ敵ノ主張ヲ屈セシメンカ爲メニ敵國ノ交戰力ヲ殺クニ在リ。故ニ殘虐ノ行爲ヲ敢テシテ敵國ノ交戰力ヲ殺ク以外ノコトヲ爲スハ國際法違反ナリ。陸戰ノ法規慣例ニ關スル規則第二十二條ハ「交戰者ハ害敵手段ノ選擇上無限ノ權利ヲ有スルコトナシ」ト定メ、又第二十三條ハ左ノ如ク規定セリ。

特別ノ條約ヲ以テ定メタル禁止ノ外特ニ禁止スルモノ左ノ如シ

一　毒又ハ毒ヲ施シタル兵器ヲ使用スルコト

二　敵ノ國民又ハ軍ニ屬スル者ヲ背信ノ行爲ヲ以テ殺傷スルコト

三　兵器ヲ捨テ又ハ自衞ノ手段盡キテ降ヲ請ヘル敵ヲ殺傷スルコト

四　助命セサルコトヲ宣言スルコト

五　不必要ノ苦痛ヲ與フヘキ兵器、投射物其他ノ物質ヲ使用スルコト

六　軍使旗、國旗其他ノ軍用ノ標章、敵ノ制服又ハジェネヴァ條約ノ特殊徽章ヲ擅ニ使用スルコト

七　戰爭ノ必要上萬已ムヲ得サル外、敵ノ財產ヲ破壞シ又ハ押收スルコト

八　對手當事國國民ノ權利及訴權ノ消滅停止又ハ裁判上不受理ヲ宣言スルコト

千八百九十九年海牙ニ於ケル萬國平和會議ノ最終決議書ニハ左ノ數項ヲ定ム。其趣旨ハ均シク不必要ノ行動ニ依リテ敵ヲ害スルコトナカラシメントスルニ在リ。

一　輕氣球上ヨリ又ハ之ニ類似シタル新ナル他ノ方法ニ依リ投射物及爆發物ヲ投下スルコトヲ五箇年間禁止スルコトヲ約ス

二　窒息セシムヘキ瓦斯又ハ有毒質ノ瓦斯ヲ撒布スルヲ唯一ノ目的トスル投射物ノ使用ヲ各自ニ

禁止スルコト(千九百七年第二回萬國平和會議ノ決議亦同シ)

三　締盟國ハ外包硬固ナル彈丸ニシテ其外包中心ノ全部ヲ蓋包セス若クハ其外包ニ截刻ヲ施シタルモノノ如キ人體内ニ入テ容易ニ展開シ又ハ扁平ト爲ルヘキ彈丸ノ使用ヲ各自ニ禁止スルコト(前項ニ同シ)

第十一款　海戰法規

陸戰ニ於テハ敵ノ私有財産ハ不可侵ナレトモ海上ニ於テハ可侵ナリ。故ヲ以テ敵船ハ凡テ沒收セラレ敵貨ハ中立船内ニ在リ且ツ戰用ニ供セサル物ノ外盡ク沒收セラル。敵船ニシテ拿捕ヲ免除セラルルモノハ地方的小航海用船、沿岸漁船、學術、慈善又ハ教法ノ爲メニ航スル船舶、俘虜交換船、軍使船ナリ。燈臺用船ニ付テハ疑アリ(海戰法規二四條以下)。

敵國港灣封鎖ヲ有效ナラシメンニハ左ノ要件ヲ充タササルヘカラス。

(一)　封鎖ヲ爲スニハ司令官ノ命令ニ出テサルヘカラス　千八百五十六年ノ海上法要義ニ關スル宣言第四ニ「港口ノ封鎖ヲ有效ナラシムルニハ實力ヲ用ヒサルヘカラス卽チ敵國ノ海岸ニ接到スルヲ實際ニ防止スルニ足ルヘキ充分ノ兵備ヲ要スルコト」トアル是ナリ。尙ホ我國ノ海戰法規第三十四條及千九百九年倫敦宣告第二條ヲ參照スヘシ。

(二)　敵國港灣ノ通路ヲ事實上遮斷セサルヘカラス

(三)　封鎖ニハ告知ヲ要ス　告知ニハ一般ノ告知ト特別ノ告知トノ二種アレトモ、我國ニ於テハ其何レヲ問ハス實際ニ告知ヲ受ケタル者及告知ヲ受ケタリト認定セラルヘキ者カ封鎖ノ部分ニ出入セントスルトキハ之ヲ封鎖破毀トスヘシト爲セリ。

(四)　繼續シテ封鎖ヲ維持セサルヘカラス

封鎖ヲ破リタル船舶及該船舶内ノ貨物ハ之ヲ沒收ス。

戰時禁制品ニ二種アリ、一ヲ絶對的ノモノトシ他ヲ條件附ノモノトス。戰爭ノ用ノミニ供スル物品ニシテ敵地ニ到達スヘキ場合又ハ敵ノ陸海軍ニ到達スヘキ場合ニハ之ヲ絶對的戰時禁制品ト爲シ、戰爭ノ用ニモ平和ノ用ニモ供シ得ヘキ或種ノ物品ニシテ敵ノ陸海軍ニ到達スヘキ場合又ハ敵ノ行政廳ニ仕向ケラルルモノナルトキハ之ヲ條件的戰時禁制品ト爲ス。而シテ其物品ノ個々ニ付テハ各國ノ自由ニ定ムル所ナリ。

戰時禁制品ハ凡テ之ヲ沒收ス。戰時禁制品ヲ搭載スル船舶ニ對スル制裁ニ付テハ疑アリ。其必然的ニ沒收スヘキハ(一)戰時禁制品ノ所有者ト船舶ノ所有者トカ同一人ナルトキ(二)船舶ノ所有者又ハ船長カ戰時禁制品ノ搭載セラルルコトヲ知レルトキ是ナリ。戰時禁制品ノ多寡ニ依リテ船舶ヲ沒收スヘキ額ニ付テハ載貨ノ二分一以上トス(明治四十二年倫敦宣言二二條以下參照)(海戰法規五五條以下)。海戰法規第七十二條ハ「戰時禁制品ヲ輸送スル船舶ハ該戰時禁制品ニシテ其價格、重量、容積又ハ運賃上全載貨

ノ半額以上ニ上ル場合ニ限リ沒收セラルヘキモノトス」ト規定セリ。

戰時禁制品ニ非スト雖モ戰時禁制品ノ所有者ニ屬シ且ツ同一船舶內ニ搭載セラルルトキハ等シク沒收セラル。

敵船タルト中立船タルトヲ問ハス交戰國ハ之ヲ抑止シ、臨檢シ、搜索シ、拿捕スルノ權利ヲ有シ、拿捕ヲ遂ケクル曉ニハ之ヲ捕獲審檢所ノ審檢ニ付シ其沒收スヘキ否ヤヤヲ判定ス。捕獲審檢所ノ組織審檢ノ手續等ニ付テハ明治二十七年八月二十日勅令第百四十九號捕獲審檢令及之ヲ改正シタル明治三十七年三月一日勅令第五十五號大正三年十月六日軍令第八號海戰法規ヲ參照スヘシ。國內捕獲審檢所ノ上ニ國際捕獲審檢所ヲ設クルノ條約ハ實行力ヲ有セス。

第十二款　中立

中立トハ第三國カ交戰國ノ何レニモ積極的ニモ將タ消極的ニモ直接ニモ間接ニモ援助ヲ與ヘスト云フコトナリ。戰爭ニ加ハラサル國家ハ中立ノ宣言ヲ爲スヲ例トスレトモ、此宣言ヲ爲ササルモ事實戰爭ニ加ハラサルトキハ卽チ中立ナリ。

中立國ハ交戰國ノ軍隊カ自國ニ入リタルトキハ其武器ヲ脫セシメ成ルヘク戰場ヨリ遠隔シタル地ニ留置スヘシ。蓋シ然ラサルトキハ交戰國一方ノ援助ヲ爲スノ結果ヲ生スヘケレハナリ。留置軍隊ニ衣食住ヲ供給スルノ義務ハ中立國ニ存スレトモ戰爭ノ終了シタル後本國ヨリ之ヲ中立國ニ償還セサルヘカラス。交戰軍ニ屬スル者ト雖モ傷者病者ハ中立國之ヲ通過セシムルコトヲ得ヘシ（一九〇七年陸戰ノ場合ニ於ケル中立國及中立人ノ權利義務ニ關スル條約）。

交戰國軍艦及軍用船カ中立國ノ港灣內ニ在ルトキハ中立國ハ二十四時間內ニ退去ス可キ旨ヲ命セサルヘカラス。尤モ食糧薪炭ノ搭載ニ必要ナルトキ若クハ修繕ニ必要ナルトキハ猶豫ヲ與フルコトヲ得ヘシ。交戰國一方ノ軍艦又ハ船舶ト他方ノ軍艦トカ同時ニ中立國ノ港灣內ニ在ルトキハ前者ノ出發後二十四時間ヲ經過スルニ非サレハ他方ノ軍艦ハ出發スルコトヲ得ス。蓋シ若シ然ラサレハ追及シテ戰鬪ヲ開キ又ハ拿捕ヲ爲スノ惧アレハナリ（一九〇七年海戰ノ場合ニ於ケル中立國ノ權利義務ニ關スル條約）。

第十三款　休戰

休戰トハ交戰國ノ約スル戰爭ノ中止ナリ。休戰ニハ一部ノモノト全部ノモノトアリ。休戰條約既ニ締結セラルレハ戰爭行爲ハ一切之ヲ爲スコトヲ得ス。軍隊ノ增遣、糧食ノ運送ノ如キハ玆ニ所謂戰爭行爲ナルモノノ內ニ包含セラルルヤ否ヤニ付テハ疑アリ。故ニ休戰條約ヲ締結スルニ當リテハ此等ノ事項ヲ委曲ニ約定スルノ必要アリ。例ヘハ明治二十八年ノ日淸休戰條約第三條ノ如シ。休戰ハ戰鬪行爲ノ中止ニ過キサルカ故ニ戰鬪ノ結果ヲ維持スルコトハ自由ナリ。例ヘハ封鎖ハ尙ホ繼續スヘク占領モ亦然リ。

休戰中ト雖モ各交戰國ノ軍隊ハ對陣スルヲ以テ或ル一定ノ方法ヲ設ケサレハ衝突スルコトナキヲ保

セス。此衝突ヲ防クノ方法トシテ離隔地帶或ハ中立地帶ト稱スルモノヲ設ク。休戰條約ノ違反ニ二種アリ。(一)ハ軍隊カ國家ノ命令ナクシテ違反シタル場合(二)ハ國家自身カ違反シタル場合是ナリ。前ノ場合ニ於テ違反ヨリ損害ヲ生シタルトキハ其軍隊ノ本國ハ損害賠償ノ責任アリ。然レトモ對手國ハ之ヲ理由トシテ條約ヲ破毀スルコトヲ得ス。之ニ反シ後ノ場合ニ於テハ對手國ノ違反ヲ理由トシテ直チニ戰爭狀態ニ復歸スルコトヲ得ヘシ(陸戰ノ法規慣例ニ關スル規則三六條乃至四一條)。

第十四款　戰爭ノ終了

戰爭ハ條約ニ因リテ終了スル場合ト條約ニ因ラスシテ終了スル場合トアリ。條約ニ因ラスシテ戰爭ノ終了スル場合ヲ左ノ二ニ小別スルコトヲ得。

(一)　一國カ他國ヲ征服シタル場合　此場合ニハ征服セラレタル國家ハ其存在ヲ失フヲ以テ其國家トノ戰爭カ終了スルコト言ヲ俟タス。

(二)　戰爭カ事實上廢止セラレタル場合　此場合ニハ單ニ一時的ノ戰爭休止ノ如クナルノ觀アリト雖モ互ニ公使ヲ派遣スルカ如キ其他條約ヲ締結スルカ如キコトアラハ是レ明カニ平和關係ニ復シタルモノナリト云フヘシ。

講和條約ニ因リテ戰爭ノ終了スルハ言ヲ俟タス。講和條約ノ特別效果ハ各種ノ該條約ニ就テ知ルヘシ。

第十章　國際私法

第一節　國際私法ノ意義及性質

國際私法トハ或ル私法上ノ關係カ如何ナル國ノ法律ノ適用ヲ受ケ若クハ如何ナル國ノ法律ニ依リテ裁判又ハ執行セラルルカヲ決定シタルモノナリ。例ヘハ日本人ト日本人トカ米國ニ於テ婚姻シタル場合ニ此婚姻ニ日本ノ法律ヲ適用スヘキカ將タ米國ノ法律ヲ適用スヘキカヲ定ムルカ如キ、又ハ日本人ト米國人トカ英國ニ於テ賣買ノ契約ヲ爲シタルトキハ日英米何レノ法律ニ依リテ賣買契約ノ成立、效力等ヲ認ムヘキカノ如キ、又ハ獨逸人ト佛蘭西人トカ伊太利ニ於テ金錢ノ貸借契約ヲ爲シタル場合ニ於テ何レノ國法ニ依リ此貸借關係ヲ決定スヘキカノ如キ是ナリ。

歐羅巴ニ於テモ國際私法ハ國內法ナリト論スル學者アリト雖モ、國內法上ノ國際私法的規定ト國際私法夫レ自身トハ明カニ區別セサルヘカラス。何トナレハ國際私法上ノ原則ハ國際公法ト同シク世界各國カ之ニ拘束セラルヘキモノナレハナリ。今日ニ於テハ國際私法上ノ原則トシテ確然認メラレタルモノ多カラスト雖モ、將來漸次發達シテ各國悉ク之ヲ承認シ且之ニ從フヘキ趨勢アルモノナリ。

第二節　牴觸關係

第一　國籍ノ牴觸

諸國ノ國籍法ハ其採ル所ノ主義ヲ異ニスルノ結果同一人ニシテ同時ニ二個以上ノ國籍ヲ有シ又ハ何レノ國籍ヲモ有セサル場合ヲ生ス。此等ノ場合ニ於テ之ヲ解決スルノ手段ナクンハ其人ノ本國法ヲ適用セントスルモ之ヲ爲ス能ハサルノミナラス、國際法上ニ於テモ二國間ニ戰爭ノ起リタル場合等ニ於テ不都合ヲ生ス。以下其解決方法ニ付キ敍述セントス。

(一)　積極的牴觸　茲ニ積極的牴觸トハ同一人カ二個以上ノ國籍ヲ有スル狀態ヲ謂フ。此場合ニ於テ若シ二個以上ノ國籍中其一カ日本ノ國籍ナルトキハ日本ノ國籍ノミヲ認ムヘキモノトス(法例二七條一項但書)。蓋シ國籍ニ關スル規定ハ我公益規定ナルヲ以テナリ。之ト異リ二個以上ノ國籍カ皆外國ノ國籍ナル場合ニ於テハ其國籍取得ニ先後ノ別アラハ後ニ取得シタル國籍ヲ認ムヘキナリ(法例二七條一項)。然レトモ先後ノ別ヲ爲シ得サル場合ハ之ヲ如何ニスヘキカ、法例ニ何等ノ規定ナキヲ以テ專ラ理論ニ從ヒテ解決セサルヘカラス、諸說アリ。惟フニ此場合ニ於テ若シ何レカ一方ニ住所ヲ有スルトキハ現ニ住居スル國ノ國籍ニ依ルヲ以テ最モ本人ノ意思ニ合致スルノミナラス實際ニ適スルモノト信ス。又何レニモ住所ヲ有セス又ハ雙方ニ住所ヲ有スルトキハ先ツ雙方ノ國籍法ノ主義ヲ比較シテ我國法ノ主義ニ近キモノ又ハ同一ナルモノヲ認ムヘク、兩者其主義ヲ同シクスル場合ハ居所地法ヲ以テシ、居所地ナキトキハ當事者ヲシテ何レカ一ヲ選ハシメ、當事者之ヲ選ハサルトキハ裁判所ニ於テ之ヲ定ムヘキモノト解スルヲ正當ナリトス。尙ホ一國數法ノ場合卽チ地方ニ依リ法律ヲ異ニスル國ノ人民ニ付テハ凡テ其者ノ屬スル地方ノ法律ニ依ルヘキナリ(法例二七條三項)。

(二)　消極的牴觸　消極的牴觸トハ何レノ國籍ヲモ有セサル狀態ヲ謂フ。此場合ニ於テハ其住所地法ヲ以テ本國法ト看做ス。若シ住所不明ナルトキハ其者ノ居所地法ヲ適用スヘキモノトス。住所ナキ場合モ亦同一ニ解スヘキナリ(法例二七條二項)。

第二　住所ノ牴觸

法例上當事者ノ住所地法ノ適用ヲ見ルコト少カラス。然ルニ住所ニ關スル諸國ノ規定ハ必スシモ一致セサルカ故ニ國籍ト同シク積極的竝ニ消極的牴觸ヲ生ス。而シテ法例ハ其積極的牴觸及一國數法ノ場合ハ國籍ニ關スル規定ヲ準用シテ決定スヘク(法例二八條二項)消極的牴觸ノ場合卽チ全然住所存在セサルカ又ハ縱令存在スルモ事實上不明ナルトキハ其居所地法ニ依ルヘキ旨ヲ規定シタリ(法例二八條一項)。

第三　法律ノ牴觸

國際私法ハ相牴觸セル涉外的私法關係ニ付キ何レノ法律ヲ適用スヘキヤヲ定ムル法則ナルヲ以テ法例ノ指定ニ基キ外國法ノ適用セラルヘキ場合極メテ多シ。而シテ其外國法ノ性質如何又外國法

ノ適用ニ當リ內國ノ公益公安ニ關スル場合ニハ其適用ヲ制限スヘキヤ否ヤ、所謂反致ハ之ヲ認ムヘキヤ否ヤ、此等ハ法律ノ抵觸問題全般ニ通スル重要ナル問題ナレハ左ニ說示スヘシ。

(一) 外國法　國際私法適用ノ結果適用セラルヘキ外國法ノ性質ニ付テハ所說一ナラス。大陸ノ學說ハ外國法モ亦法律ナリトシ、英米ノ學說ハ外國法ハ內國ニ於テハ單純ナル事實ニ過キスシテ法律ニ非スト唱フ。前說ノ理由トスル所ハ國際團體ヲ組織セル各國ハ相互ニ其主權ヲ尊重スルノ義務ヲ負フノ結果其主權ノ作用タル法律ヲモ尊重セサルヘカラサル義務アリ、從テ國際私法上適用セラルヘキ外國法ハ實質上ニ於テモ亦外國法ナリト云フニ在リ。然レトモ此說ハ主權カ其領土外ニ效力ヲ有セサル點ヲ看過シタルモノニシテ採ルニ足ラス。後說ハ外國ノ法律カ外國法トシテ內國ニ行ハルト云フハ主權ノ本質ニ反シ又一國ノ裁判官ハ內國法ヲ適用スヘキ職務ヲ有スルノミニシテ外國法ヲ適用スヘキ職務アルモノニ非サルコトヲ理由トスルモノナレトモ、國家ハ外國法ヲ內國法ノ內容トシテ適用スルコトヲ得ルノミナラス外國法ヲ外國法トシテ其效力ヲ認メ得ヘキモノナルヲ以テ本說亦正當ナリト云フヲ得ス。思フニ國際私法上適用セラルル外國法ハ實質上外國法ニアラス又事實ニモアラス、內國法タル國際私法カ外國法ノ適用ヲ規定スルノ結果當該外國法ハ內國國際私法ノ實質的內容ヲ形成シ之ニ依リテ內國法ト爲リタルモノニシテ唯其外形カ外國法タルニ過キサルナリ。從テ我法例其他ノ國際私法的規定自體ニ直接違背シタル場合例ヘハ本國法ヲ適用スヘキ場合ニ法廷地法ヲ適用シタルカ如キハ勿論、間接違背卽チ法例其他ノ國際私法的規定ノ指定ニ基キ當該外國法ヲ適用シタレトモ其外國法ノ解釋ヲ誤リタル場合ニ於テモ凡テ民事訴訟法第四百三十四條ニ所謂法律ニ違背シタル裁判ニ外ナラサルヲ以テ常ニ上告ノ理由トナルモノト云ハサルヘカラス。而シテ國際私法カ外國法ノ適用ヲ命スル場合ト雖モ其規定ノ如何ヲ問ハス絕對的ニ適用スヘキモノニアラスシテ其適用カ內國ノ公益存立ヲ害スルトキハ之ヲ制限セサルヘカラサルコト寧ロ當然ナリ。我法例第三十條ハ「外國法ニ依ルヘキ場合ニ於テ其規定カ公ノ秩序又ハ善良ノ風俗ニ反スルトキハ之ヲ適用セス」ト明規シタリ。

(二) 準據法　涉外的私法關係ニ適用スヘク指定セラレタル內國又ハ外國ノ法律ヲ其法律關係ノ準據法ト稱ス。而シテ準據法ヲ定ムルノ基礎タル標準ヲ大別スレハ本國法、住所地法、所在地法、行爲地法及法廷地法ノ五者ト爲スコトヲ得。又準據法ニハ法定準據法ト任意準據法トアリ、法例第七條第一項ノ場合ヲ除クノ外總テ前者ニ屬ス。

(三) 反致法　反致法トハ我國ノ國際私法カ一定ノ涉外的私法關係ニ付キ外國ノ實質法ヲ以テ準據法ト爲セル場合ニ於テ該外國ノ國際私法ニ依レハ却テ我國ノ實質法ヲ以テ準據法トスルトキハ此反致ヲ認メテ我國ノ實質法ヲ適用スヘキコトヲ定メタル法則ヲ謂フ。而シテ理論上反致

ヲ認ムルノ可否ニ付テハ頗ル議論ノ存スル所ナレトモ、我法例ハ第二十九條ニ於テ反致ノ原則ヲ認メ「當事者ノ本國法ニ依ルヘキ場合ニ於テ其國ノ法律ニ從ヒ日本ノ法律ニ依ルヘキトキハ日本ノ法律ニ依ル」ト規定セリ。

一國內ノ或地方ニシテ統治上ノ便宜ニ依リ法域ヲ異ニスルモノアリ。其各法域ノ相互間ニモ國家間ニ於ケルト同シク法律適用ノ問題ヲ惹起スヘシ。學者之ヲ準國際私法ト稱ス。現ニ我邦ノ內地、臺灣、朝鮮、關東州、南洋群島ノ相互間ニ此例ヲ見ル(共通法參照)。

尙ホ國際私法ノ研究ニ在リテ國籍問題ハ重要ナルコト勿論タリ。然レトモ之ニ關シテハ前ニ述ヘタル所ナルヲ以テ茲ニ之ヲ再說セス(總論第二十一章第三節參照)。其他次節以下ニ於テ說明スル所ハ總テ總論第十八章第二節ト對照シテ研究スヘシ。

第三節　國際民法

第一款　能力

人ノ能力ハ何レノ國法ニ依リテ決スヘキヤニ付テ二個ノ主義アリ。一ハ卽チ各人ノ本國法ヲ適用スヘシト爲スモノニシテ、例ヘハ日本人カ佛國ニ在ルモ其成年ナルカ未成年ナルカハ日本ノ法律ニ依リテ決スヘシト云フナリ。他ハ卽チ各人ノ住所地ノ法律ニ依リテ決スヘシト云フモノニシテ、例ヘハ日本人タル妻カ夫ト共ニ英國ニ住所ヲ有スルトキハ妻ノ能力問題ハ其本國法タル日本ノ法律ニ依ラスシテ英國ノ法律ニ依ルヘシト云フナリ。前說ハ歐洲大陸學者ノ主張スル所ニシテ後說ハ英米ノ學者ノ採用スル所ナリ(法例三條參照)。尙ホ行爲能力、禁治產、準禁治產及失踪ニ關シテハ既ニ總論ニ於テ之ヲ述ヘタリ(總論第十八章第二節參照)。

第二款　親族關係

第一　婚姻及離婚

婚姻ハ之ニ因リテ正當ナル一家ヲ組織シ一切ノ親族權ヲ生スル本源ナルヲ以テ人生ノ行爲中最モ重要ナルモノナリ。而シテ婚姻ハ人ノ自然ノ性情ニ基クモノナルヲ以テ土地、習慣ヲ異ニスルニ從ツテ之ニ關スル法則モ亦區々タリ、各國法ノ差異殊ニ多シ。此ノ如キ場合ニ婚姻ニ關スル問題ハ何レノ國法ニ依リテ定ムヘキモノナリヤニ付テ之ヲ實質上ノ要件ト形式上ノ要件トニ分ツ。

實質上ノ要件ニ付テハ(一)本國法ニ依ルヘシトノ說ト(二)住所地法ニ依ルヘシトノ說ト(三)行爲地法ニ依ルヘシトノ說トアリ。而シテ本國法說ヲ採ル者最モ多シ。故ニ原則トシテハ本國法ニ依ルヘク、本國ノ不明ナルトキ若クハ本國法ナキトキハ住所地法ニ依ル。更ニ住所ノ不明ナルトキ又ハ住所ナキ者ニハ居所ノ法律ヲ適用スヘキモノトセリ。而シテ能力ヲ本國法ニ從ハシムル法律上ノ理由ハ、能力ニ關スル規定ハ素ト當事者保護ノ趣旨ニ出テタルモノニシテ人ノ能力ナルモノハ其

本國ノ地勢、風俗、人情等ニ由リテ發達ニ遲速アルカ故ニ其保護ノ目的ヲ達センニハ各當事者ニ付キ其本國ノ法律ニ依ラシムルノ外ナシト云フニ在リ(法例一三條參照)。

婚姻ノ形式上ノ要件ニ付テハ一般ニ行爲地法ニ依ルモノトス。蓋シ方式ノ事ハ本國ニ密接ノ關係ナク却テ行爲地ト重大ノ關係ヲ有シ且當事者ノ之ニ從フヲ便宜トスル所ナレハナリ。然レトモ凡テ此原則ニ依ルヘキモノトセハ外國ニ於テ我國民カ婚姻ヲ爲シ得サル場合ナキニ非サルヲ以テ、在外日本人間ノ婚姻ニ付キ民法第七百七十七條ノ適用ヲ認メ其國ニ駐在スル日本ノ公使又ハ領事ニ届出ヲ爲スコトニ依リ有效ニ婚姻ヲ爲シ得ルモノトシタリ(同上)。

婚姻ヨリ生スル法律上ノ效果ニ付テハ夫ノ本國法ニ依ルヘシトノ說多キヲ占ム。是レ一家統一上ノ便宜ヨリ出タルモノニシテ、例ヘハ夫婦間ノ權利義務ノ如キハ一ニ夫ノ本國法ニ從フヘキモノトス。又夫婦財產制ハ婚姻當時ニ於ケル夫ノ本國法ニ依ル。但シ外國人カ女戸主ト入夫婚姻ヲ爲シ又ハ日本人ノ壻養子ト爲リタル場合ニ於ケル婚姻ノ效力ハ日本ノ法律ニ依ルヘキコト當然ナリ(法例一四條一五條參照)。

離婚ニ付テハ(一)本國法ニ依ルヘシトノ說ト(二)住所地法ニ依ルヘシトノ說ト(三)訴訟地法(法廷地法)ニ依ルヘシトノ說トアリ。我法例ノ如キハ離婚ノ原因タル事實ノ發生セル當時ニ於ケル夫ノ本國法ニ依ルノ說ヲ採ル。例ヘハ日本人タル夫婦アリ夫カ强盜ヲ爲シ後暹羅國ニ歸化シタリトセハ暹羅ノ法律ニ夫ノ强盜カ離婚請求ノ原因タルヲ認メサルニ拘ハラス妻ハ其原因タル事實發生ノ當時ニ於ケル夫ノ本國法卽チ日本ノ法律ニ依リテ離婚ノ請求ヲ爲スノ權利ヲ有スルモノナリ。但シ原因タル事實發生ノ當時夫カ外國人ナル場合ニ於テハ裁判所ハ其原因タル事實カ日本ノ法律ニ依ルモ離婚ノ原因タルトキニ非サレハ離婚ノ宣告ヲ爲スコトヲ得サルモノトス。蓋シ離婚ノ原因如何ハ法廷地ノ公序良俗ニ關スルコト頗ル大ナルヲ以テナリ(法例一六條參照)。

第二　親子

子カ嫡出子タルヤ否ヤハ其子ノ出生ノ當時父ノ屬シタル本國ノ法律ニ依リテ決ス。若シ父カ子ノ出生前ニ死亡シタルトキハ其最後ニ屬シタル國ノ法律ニ依リテ定ム。否認訴權ノ如キハ卽チ然リ。

私生子ニ付テ生スル問題ハ私生子ヲ認知シテ親子間ニ於ケル權利義務ヲ明ニスルニ在リ。私生子認知ノ要件ニ付テハ之ヲ雙方ノ方面ヨリ見テ、認知ヲ爲スコトハ認知當時認知者タル父又ハ母ノ本國法ニ依リ、認知セラルル子ノ能力ニ關シテハ認知當時其子ノ本國法ニ依リテ之ヲ定ムヘキモノトス。認知ノ效力ニ關シ私生子ノ本國法ニ依ル主義アリト雖モ既ニ親子關係成立セル以上認知者タル父又ハ母ノ本國法ニ依ルヲ正當トス。我法例亦之ニ從フ(法例一七條一八條參照)。

養子緣組ニ付テハ養親ト爲ル要件ト養子ト爲ル要件トニ分チテ各々其本國法ニ依リテ定ムヘキモノトシ、養子緣組ノ效力卽チ養親子ノ分限カ確定シタル以後ノ法律關係ハ養親ノ本國法ニ依リテ

支配セラルヘキモノトス。獨リ一身上ノ權利關係ノミニ止ラス財産上ノコトニ付キ亦然リ。離緣ニ關シテハ現在ノ養親ノ本國法ニ依ルヘキモノトス（法例一九條參照）。親子間ノ法律關係ニ付テハ諸主義アレトモ、我法例ハ先ツ父ノ本國法ニ依リ、若シ父在ラサル場合ニ於テハ母ノ本國法ニ依リテ定ムヘキモノトセリ（法例二〇條參照）。

第三　扶養義務

親子又ハ其他ノ親族間ニ於ケル扶養ノ義務ニ付テ問題ヲ生スルトキハ扶養ノ請求ヲ受クル者ノ本國法ニ依リテ定ムヘキモノトス。蓋シ此事タル扶養ノ請求ヲ受クル者ニ最モ重大ナル利害關係ヲ有スルモノナレハナリ（法例二一條參照）。

第四　一般的補充規定

法例第二十二條ハ右第一乃第三ニ說明シタル以外ノ親族關係及之ニ因リテ生スル權利義務ハ當事者ノ本國法ニ依リテ定ムヘキ旨ノ補充的規定ヲ設ケタリ。從テ特別ノ規定ナキ親族關係ニ付テハ總テ當事者ノ本國法ニ依ルモノトス。

第五　後見及保佐

後見ハ被後見人ノ本國法ニ依ルヲ原則トスレトモ、例外トシテ日本ニ住所又ハ居所ヲ有スル外國人ニシテ其本國法ニ依リ後見開始ノ原因アルモ後見ノ事務ヲ行フ者ナキ場合及外國人ニ付キ日本ニ於テ禁治産ノ宣告アリタル場合（法例四條）ニ於テハ日本ノ法律ニ依ル。從テ後見ノ效力モ亦外國裁判所カ後見人ヲ附シタルトキハ被後見人ノ本國法ニ依ルヘク、我國ニ於テ後見人ヲ附シタルトキハ日本ノ法律ニ依ルヘキハ法例ノ規定上明カナリ（法例二三條參照）。保佐ニ付キテハ後見ノ規定カ準用セラル（法例二四條）。

第三款　物權

物權ニ關シテハ何レノ國法ヲ適用スヘキカ。此事ニ付キテハ（一）動産、不動産共ニ其所在地法ニ從フヘシトノ說ト（二）動産、不動産共ニ本國法又ハ住所地法ニ依ルヘシトノ說ト（三）動産ト不動産トヲ分チ、不動産ニ付テハ所在地法ニ依リ動産ニ付テハ其所有者ノ本國法又ハ住所地法ニ依リテ決スヘシトノ三說ニ岐ル。而シテ不動産カ其所在地法ニ依ルヘシトノ學說ニ付テハ一般ニ異論ヲ挾ム者ナシ。其理由トスル所ハ不動産ハ其所在地ト密接ノ關係ヲ有シ所在國ノ安寧秩序ニ關スト云フニ在リ。然ルニ動産ハ常ニ其所在地ヲ變更シ不動産ト揆ヲ一ニスルコト能ハサルヲ以テ其所有者ノ本國法又ハ住所地法ニ依ルヘシト主張スル者多シ。

我法例第十條ハ「動産及不動産ニ關スル物權其他登記スヘキ權利ハ其目的物ノ所在地法ニ依ル前項ニ揭ケタル權利ノ得喪ハ其原因タル事實ノ完成シタル當時ニ於ケル目的物ノ所在地法ニ依ル」ト規定セリ。故ニ所有權、占有權、用益權、地役權等ニ關スルコト其他物上擔保ニ關スルコト皆此原則ヲ適

用スルコトヲ得ヘシ。

第四款　債權

契約ニ關スル法律ハ專ラ個人ノ意思ヲ本據トシテ定メタルカ故ニ苟クモ一國ノ公ノ秩序、善良ノ風俗ニ反セサル限リハ凡テ個人ノ自由意思ヲ以テ法律ノ規定ニ從フコトヲ得。故ニ或國ノ人カ外國ニ在ル場合ニモ能力ノ點ヲ除クノ外ハ何レノ國ノ法律ニ從フノ契約ヲ爲スモ毫モ妨クル所ナク一ニ當事者ノ意思如何ニ任ス。故ニ契約ノ成立及效力ヲ定ムルニ付テ明カニ當事者ノ意思ヲ認ムルトキハ何レノ國ノ法律ニ於テモ當事者ノ依ラント欲スル國ノ法律ニ從テ決スヘキモノトス。然ルニ當事者カ明カニ其意思表示ヲ爲ササル場合ニ於テ他ノ事情ヨリスルモ之ヲ知ルコト能ハサル場合ニハ如何ニシテ決スヘキカ。此事ニ付テハ(一)行爲地法ニ依ルヘシトノ說ト(二)債務者ノ本國法ニ依ルヘシトノ說ト(四)債權者ノ住所地法ニ依ルヘシトノ說ト(五)債務者ノ住所地法ニ依ルヘシトノ說ト(六)履行地法ニ依ルヘシトノ說ト(七)訴訟地法(法廷地法)ニ依ルヘシトノ說トアリ。債權者ノ本國法又ハ住所地法ニ依ルヘシトノ說ハ契約ニハ債權者ニ重キヲ置クヘシトノ理由ニ出テ、債務者ノ本國法又ハ住所地法說ハ契約ニハ債務者ニ重キヲ置クヘシトノ理由ヲ本トシ、履行地法說ヲ採ル者ハ契約ハ履行ヲ目的トスルカ故ニ履行地法ヲ重ンスヘシト云ヒ、訴訟地法(法廷地法)ニ依ルヘシトノ說ハ裁判所ノ所在地カ其事件ニ最モ大ナル關係ヲ有スルトノ理由

ニ出ツルモノナリ。然リト雖モ當事者ノ最モ知リ易キ法律ハ行爲地法ニシテ且ツ當事者ハ行爲地ニ最モ大ナル關係ヲ有スルトノ理由ニ依リ行爲地法說最モ多數ヲ占ム。從ツテ契約ノ效力ノ如キモ苟モ自國ノ公ノ安寧秩序ニ反セサル限リハ行爲地法ニ依ルコトヲ認ムヘキモノナリ。契約ノ方式ニ付テハ其行爲ノ效力ヲ定ムル法律ニ依ルヘシト雖モ猶ホ「場所ハ行爲ノ方式ヲ支配ス」トノ原則ニ從ヒ凡テ行爲地法ニ依リタル方式ハ之ヲ有效ナリトス。但シ物權其他登記スヘキ權利ヲ設定シ又ハ處分スル法律行爲ニ付テハ此限ニ在ラス(法例七條八條參照)。

法律ヲ異ニスル地ヲ隔ツル者ノ間ノ契約ニ付テハ我法例第九條ニ於テ「法律ヲ異ニスル地ニ對シテ爲シタル意思表示ニ付テハ其通知ヲ發シタル地ヲ行爲地ト看做ス契約ノ成立及效力ニ付テハ申込ノ通知ヲ發シタル地ヲ行爲地ト看做ス若シ其申込ヲ受ケタル者カ承諾ヲ爲シタル當時申込ノ發信地ヲ知ラサリシトキハ申込者ノ住所地ヲ行爲地ト看做ス」ト規定セリ。

事務管理、不當利得、不法行爲ニ付テハ其權利ノ原因タル事實發生地ノ法律ニ依ル。是レ一般ノ契約カ行爲地ノ法律ニ從フト同一ノ理由ニ出ツ。但シ不法行爲ニ付テハ外國ニ於テ發生シタル事實カ日本ノ法律ニ依ルモ不法ナルコトヲ要シ且被害者ハ日本ノ法律カ認メタル範圍ニ於テノミ損害賠償其他ノ處分ヲ請求スルコトヲ得。蓋シ內國ノ公益維持ノ必要上已ムヲ得サル所ナリ(法例一一條參照)。

債權讓渡ノ第三者ニ對スル效力ニ付テハ諸說アリ。或ハ債權者ノ住所地法ニ依ルヘシト云ヒ、或ハ債

權讓渡行爲地法ニ依ルヘキモノナリト唱ヘ、或ハ債權自體ノ準據法ニ從フヘシト主張ス。然レトモ債權讓渡ニ付キ其公示方法卽チ債務者ノ承諾又ハ之ニ對スル通知等ヲ必要トシタルハ主トシテ債務者ノ利益保護ノ趣旨ニ出テ且此等ノ手續ハ又債務者ノ住所地ニ於テ行ハルルヲ通常トスルヲ以テ、債權讓渡ノ第三者ニ對スル效力ハ債務者ノ住所地法ニ依ルヲ最モ妥當ナリト云ハサルヘカラス（法例一二條參照）。

第五款　相續

相續ノ準據法ニ關シテハ相續財產ノ所在地法ニ從フヘシト主張スル者アルモ、被相續人ノ本國法ニ依ルヘシトノ說多數ナリ。我法例モ此主義ニ依リ相續ニ關スル一切ノ問題ヲ擧ケテ被相續人ノ本國法ニ委ネタリ。蓋シ若シ被相續人ノ本國法ニ依ラサルトキハ時ニ被相續人ノ意思ニ反スルノ虞アルノミナラス、相續ノ事ハ被相續人ノ本國ノ公ノ秩序ニ併セテ關スルモノナレハナリ（法例二五條參照）。遺言ノ成立及效力ハ其成立ノ當時ニ於ケル遺言者ノ本國法ニ依リテ定ムヘク、遺言取消ノ準據法ハ其當時ニ於ケル遺言者ノ本國法ナリ。而シテ遺言ノ方式ニ關シテハ「場所ハ行爲ヲ支配ス」トノ原則ニ從ヒ行爲地法ニ依ルコトヲ妨ケサルモノトセリ（法例二六條參照）。

第四節　國際商法

第一款　手形

手形能力ノ管轄法ニ付テモ亦「能力ハ本國法ニ從フ」ト云フ一般ノ原則ヲ絕對ニ之ニ及ホスヘキモノト爲ストキハ頻繁ノ取引ニ付キ一々相手方ノ本國ト其能力ノ有無トヲ査按セサルヘカラサルカ如キ不便アリ、迅速流通ヲ旨トスル手形ノ效用ヲ殺クノ憂ナシトセス。是ニ於テ或ル國ノ法律ニ於テハ手形ノ能力ニ付テ特ニ例外ヲ認メ、其本國法ニ於テ手形能力ナキトキト雖モ行爲地ノ法律ヲ適用シテ能力アルトキハ之ヲ能力者ト看做セリ。例ヘハ獨逸ノ手形法第八十四條ノ規定ノ如キ是ナリ。我商法施行法第百二十五條第一項モ之ト同一趣旨ノ規定ヲ爲セリ。英米兩國ニ於テハ手形能力ニ關シ行爲地法主義ヲ採リ、本國法ニ依レハ無能力ナリト雖モ行爲地法ニ依リ有能力ナルトキハ之ヲ有能力者トセリ。尤モ絕對的ニ行爲地法主義ヲ貫クモノニ非スシテ、行爲地法カ有能力者ト認メ居ル場合ニハ本國法ノ如何ニ拘ラス有能力ト爲スモ、本國法カ有能力者ト爲シ行爲地法カ無能力者トスルトキハ之ヲ無能力者トセスシテ本國法ニ從ハシムル趣旨ナリ。之ニ反シテ佛國ニ於テハ絕對ノ本國法主義ヲ採用ス（商法施行法一二五條二項）。

手形ノ方式ハ行爲地法ニ從フ。是レ「場所ハ行爲ノ方式ヲ支配ス」トノ一般ノ原則ヨリ出テタルモノナリ。我商法施行法第百二十六條ハ此原則ニ依レリ。英國ノ手形法第七十二條但書ニ於テハ外國ニテ發行セル手形ナルモ英國法ノ定ムル方式ニ從フトキハ之ヲ有效トスルノ旨ヲ規定シタリ。而シテ今

日一般ニ採用セラルル所ハ手形契約成立地卽チ行爲地法主義ナリ。

手形義務ノ履行卽チ手形ノ支拂ニ付テハ履行地法ニ從フヘキコトハ普通債務ノ履行ノ場合ニ異ナラス。蓋シ履行地ノ法律ニ依ラスシテ支拂ヲ爲サントスルモ事實上爲シ得ヘカラサレハナリ。

手形ノ效力ニ付テハ均シク行爲地法ニ從フヲ原則トシ之ニ或例外ヲ設ケタル一ノ折衷說行ハル。此折衷說ハ千八百八十五年ノ國際法協會ノ議決ニ於テ採用セラレタルモノニシテ「爲替手形、約束手形ノ效果及效力竝ニ裏書、引受、保證ノ效果及效力ハ署名者ノ能力ニ關スル規定ヲ妨ケサル限リニ於テ此等ノ行爲ヲ爲シタル國ノ法律ニ依リテ之ヲ定ム但シ手形振出後ノ行爲ノ效果ハ手形振出地法ノ定メタル效果ヲ超ユヘカラス」トアリ。此折衷說ノ外ニ履行地說アリ。ポチエー等ノ唱道スル所ニシテ、支拂地法卽チ履行地法ニ從フヘシト云フニ在リ。然レトモ此說ハ今日ニ於テ行ハレス。

第二款　海商

船舶ニ關スル私法關係ニ付テハ所在地法說又ハ訴訟地法說(法廷地法說)ヲ唱フル者アリト雖モ何レモ妥當ナラス。殊ニ所在地法說ニ從ヘハ船舶カ其所在地ヲ變更スル毎ニ準據法ヲ異ニスルノ缺點アリ。能ク此等ノ缺點ヲ補フテ今日ニ於テ行ハルル說ヲ本國法說ト爲ス。例ヘハ船長ノ權限ノ如キハ船舶ノ國籍ノ屬スル國卽チ本國法ニ從フヘシト爲スモノ是ナリ。

運送契約ニ付テハ運送契約地ト船舶到著地ト同一ナル場合ニハ問題ヲ生セスト雖モ、運送契約地ト船舶到著地ト國法ヲ異ニスルトキハ茲ニ國際私法上ノ問題ヲ惹起ス。此場合ニ於ケル原則ハ契約地法ニ從ヒ、唯契約ノ效果ニ付テ多少ノ例外ヲ認ムヘキモノナリ。例外トハ船舶ノ到著地ニ於テ履行ヲ爲ス場合ニ履行地卽チ到著地ノ法律ニ從フヘシト爲スモノニシテ、運送貨物ノ損害ヨリ生スル請求權ニ對スル抗辯ノ如キモ其貨物ノ受取後ニ係ルトキハ亦履行地卽チ到著地法ニ從フヘキモノトス。

海損ニ付テハ五說アリ(一)船舶到著地法說(二)訴訟地法說(法廷地法說)(三)船舶發航地法說(四)船舶本國法說(五)貨物荷卸地法說是ナリ。此諸說中現今一般ニ行ハルル所ハ第一說ニシテ、千八百八十七年ノ萬國商法會議ニ於テモ亦此說ヲ採用セリ。

船舶ノ衝突ハ不法行爲ノ一種ニ外ナラサルヲ以テ一國ノ領海內ニ於テ衝突シタルトキハ法例第十一條ノ適用ヲ受ケ事實發生地タル領海所屬國ノ法律ニ依ルヘキコト明カナリト雖モ、若シ公海ニ於テ衝突シタル場合ニ於テハ事實發生地法ニ依ルノ原則ヲ適用スルコト能ハス、此場合ニ於テ若シ衝突セル船舶カ其船籍國ヲ同シフスルトキハ雙方カ共ニ同一法律ノ支配ニ服スル當然ノ結果トシテ其旗國法ニ依ルヘキモノトス。然レトモ船籍國ヲ異ニスルトキハ兩者何レノ法律ニ依ルヘキカ、此點ニ關シテハ諸說アリ、(一)法廷地法說(二)加害船舶旗國法說(三)被害船舶旗國法說(四)衝突兩船舶旗國法折衷說是ナリ。我法例ハ其第十一條ニ於テ不法行爲ニ付キ事實發生地法ト法廷地法トヲ折衷シテ適用スヘキモノトスル主義ヲ採用セルノミナラス、又不法行爲ノ理論ニ鑑ミルモ最後ノ說ヲ以テ最

モ妥當ナルモノト云ハサルヘカラス。

海難救助卽チ船舶カ海難ニ遭遇セル場合ニ於テ若シ難船者ノ請求ニ依リテ之ヲ救助シタルトキハ疑モナク契約ニ屬スルヲ以テ法例第七條ニ依ルヘキモノトス。之ニ反シテ契約上ノ義務ナクシテ救助シタル場合ハ事務管理ニ外ナラス、從テ法例第十一條第一項ニ依リ事實發生地法ヲ適用スヘキナリ。而シテ事務管理タル救助カ領海內ニ於テ生シタルトキハ此原則ヲ適用シテ領海所屬國法ニ依ルヘシト雖モ、公海上ニ於テ生シタルトキハ之ニ依ルヲ得ス。蓋シ公海ニ法律ナケレハナリ。仍テ船舶衝突ノ場合ニ於ケルカ如ク雙方ノ船舶所屬國法ノ認ムル範圍ニ於テ債權債務ヲ成立セシムルヲ以テ我法例ノ精神ニ適合スルモノナリト解ス。尙ホ海難救助ニ關シ千九百十年ブリユクセル會議ニ於テ議決セラレタル海難ニ於ケル救援救助ニ付テノ規定ノ統一ニ關スル條約（大正三年二月條約二號）ハ右ノ原則ニ對シ幾多ノ制限的規定ヲ設ケタリ、須ク參照スヘシ。

第三款　會社

會社ハ一個ノ法人ナリ。法人ハ法律ノ力ニ依リテ創設セラルルモノニシテ元來人ニ非サルモノヲ法律ノ擬制ニ依リテ人ト看做シタルヨリ存在スルモノナルヲ以テ、自然人ノ如ク何レノ國ニ於テモ當然其人格ヲ認メラルルモノニ非ス。從テ外國法人ノ人格ヲ認ムヘキヤ否ヤハ全ク其國ノ自由ニシテ或ル國ニ於テ成立シタル法人ヲ他國カ必シモ認ムヘキノ義務アルモノニ非ス。然レトモ方今ニ於ケル文明ノ進歩ハ經濟上ノ理法ヲ實地ニ應用セシメ、勞力資本ノ協合ハ益々其效力ヲ逞フシ、法人殊ニ商事會社ノ設立ハ踵ヲ接シテ起リ、一方ニ於テハ各國ノ交際日ニ親密ヲ加ヘ、私人ノ交通モ益々頻繁ナルニ至リ、甲國ノ會社ニシテ乙國ニ其效力ヲ認メラルルニ因リテ其利益ヲ享受シ、乙國若クハ乙國人民モ亦甲國會社ノ爲メニ利益ヲ蒙ルコト尠カラサルモノアリ。故ヲ以テ今日ニ於テ外國會社ヲ法人トシテ國內ニ認許スルハ獨リ其國家ニ利益アルノミナラス、各國互ニ他國ノ國益ヲ斟酌スル國交上ヨリスルモ亦之ヲ認ムルノ必要アリ。今此事ニ關スル諸國ノ法律又ハ條約ヲ以テ採用スル主義ヲ見ルニ、概ネ下ノ四個ニ歸ス。(一)無條件承認主義(二)或ル國ノ會社ニ限リ承認スル主義(三)或ル場合ヲ限リテ外國ノ法人ヲ承認スル主義(四)外國會社ノ種類ニ由テ或者ハ之ヲ承認シ或者ハ之ヲ承認セサルノ主義是ナリ。會社ノ國籍ニ關シテハ原則トシテ其本店所在地ヲ本國ト看做ス。

內國會社法ノ規定カ外國會社ニ及フハ內國ノ秩序ニ關スルコトナリ。我商法第二百六十條ハ「外國會社カ日本ニ支店ヲ設ケタル場合ニ於テ其代表者カ會社ノ業務ニ付キ公ノ秩序又ハ善良ノ風俗ニ反スル行爲ヲ爲シタルトキハ裁判所ハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其支店ノ閉鎖ヲ命スルコトヲ得」ト規定セリ。

又國內ニ於テ特別ノ許可ヲ受クルコトヲ要シ、或ハ特別ノ監督ノ下ニ立ツヘキコトヲ要スル內國ノ會社ト同一ノ目的ヲ有シ同一ノ事業ヲ爲ス外國ノ會社ハ內國ノモノト同一ニ許可ヲ受ケ又ハ監督ノ

下ニ立ツヘキモノトス。我商法第二百五十八條ハ明カニ此趣旨ヲ表ハセルモノニシテ「日本ニ本店ヲ設ケ又ハ日本ニ於テ商業ヲ營ムヲ以テ主タル目的トスル會社ハ外國ニ於テ設立スルモノト雖モ日本ニ於テ設立スル會社ト同一ノ規定ニ從フコトヲ要ス」トアル是ナリ。外國會社カ內國ニ於テ支店、代理店等ヲ設クルトキハ內國ニ於テ定ムルカ如ク內國ニ在ル外國會社ノ支店、代理店ノ所在地ニ於テ登記及公告ヲ爲スヘキモノトス（商法二五五條二五七條參照）。

株式會社カ株券又ハ債券ヲ發行スル場合ニハ發行地ノ法律ニ從フヘキモノトス（商法二五九條參照）。

〔追補〕陪審法

第一　陪審ノ意義及性質

陪審制度トハ裁判官ヲ常職トセサル者ヲシテ裁判事務ニ參與セシムルノ制度ナリ。陪審制度ノ起源ニ付テハ學說一ナラスト雖モ、此ノ制度カ英國ニ於テ健全ナル發達ヲ遂ケ漸次歐米諸國ニ傳リタルモノナルコトハ疑ナキ所ナリ。現今立憲國ニシテ此ノ制ヲ布カサルモノ殆ント稀ナリ。其ノ本旨トスル所ハ專門家ノ知識ト經驗トニ普通人ノ常識判斷ヲ加ヘ以テ裁判ニ對スル國民ノ信賴ヲ厚カラシムルト共ニ關係者ヲシテ判決ニ悅服セシメントスルニ在リ。蓋シ陪審手續ハ普通人タル陪審員ヲ訟廷ニ列席セシメ其ノ面前ニ於テ審理ヲ爲スモノナレハ裁判官ヲシテ自ラ其ノ事件ニ對スル態度ヲ愼重ナラシムヘク、又陪審手續ハ犯罪事實ノ有無ヲ陪審員ノ穩健ナル常識ニヨリテ判斷セシムルモノナルヲ以テ常識裁判官カ動モスレハ各個ノ事件ニ存スル特別ナル事情ヲ査察セスシテ形式一片ノ裁判ヲ爲シ、或ハ其ノ專門ニ泥ミテ非常識ナル斷案ヲ下スカ如キ缺點ナカラシメ且ツ斷獄ノ事一ニ全ク官權ノ專行スル所ニ委セラレ毫モ民意ヲ容レサルモノナリトノ不平ヲ芟除センコトヲ目的トスルモノナリ。

帝國憲法ハ陪審制ニ付テ何等規定スル所ナキノミナラス却テ第五十七條ニ於テ「司法權ハ天皇ノ

名ニ於テ法律ニ依リ裁判所之ヲ行フ」ト規定シ、第五十八條ハ「裁判官ハ法律ニ定メタル資格ヲ具フル者ヲ以テ之ニ任ス」ト定メ、第二十四條ニ「日本臣民ハ法律ニ定メタル裁判官ノ裁判ヲ受クルノ權ヲ奪ハルルコトナシト」アルヲ以テ陪審制度ハ是等ノ條規ニ違反スルモノニシテ帝國憲法ノ認容セサル所ナリト論スル者アレトモ、是レ我陪審法ノ眞髓ヲ窮メサル者ノ言ノミ。蓋シ我陪審法ニ於テハ陪審ハ裁判所ノ構成ニ關與スルモノニアラスシテ裁判所ノ外ニ獨立スル一機關ナレハナリ。陪審ハ裁判手續ニ參與スルモ裁判權ヲ行使スルモノニアラス、裁判權ハ全ク裁判所ノ行フ所ナリ。又裁判所ハ犯罪事實ノ判斷ヲ陪審ノ評議ニ付シ其ノ答申ヲ得テ裁判ヲ爲スモノナリト雖モ、裁判所ハ法律上直接ニ陪審ノ答申ニ拘束セラルルコトナク若シ其ノ答申ヲ不當ト認ムルトキハ更ニ他ノ陪審ノ評議ニ付シテ答申ヲ求ムルコトヲ得ルモノニシテ而モ陪審更新ノ回數ヲ限ルコトナシ、從テ事實ノ判定權ハ裁判所ニ存シ陪審ノ有スル所ニアラス。陪審ハ裁判所ニ對シテ意見ヲ答申スルモノニシテ其ノ答申ノ採否ハ裁判所之ヲ決スルノ權ヲ有シ、裁判所ハ自ラ不當ナリト認ムル答申ニ拘束セラレ裁判所ノ判斷ニ反スル裁判ヲ爲スコトナシ。只陪審事件ニ在リテハ裁判所ハ必ス陪審ノ意見ヲ聽クコトヲ要シ且ツ其ノ答申ニ反スル裁判ヲ爲スコトヲ得サルノミ、卽チ手續ニ於テ拘束ヲ受クルモ裁判夫レ自體ニ付テハ拘束ヲ受クルモノニアラス。尙被告人ハ何時ニテモ事件ヲ陪審ニ付スルコトヲ辭シ又ハ請求ヲ取下クルコトヲ得ルモノト爲シタルヲ以テ、陪審制カ毫モ憲法ニ違反スルモノニ非サルヤ極メテ明カナリ。

第二　陪審事件

陪審手續ハ一定ノ範圍ニ於ケル刑事々件ニ限リ且ツ第一審裁判所ニ於テノミ行ハルルモノニシテ、民事々件ニ付テハ勿論、控訴審及上告審ニテハ絕對ニ之ヲ行ハサルモノトス（一條一一條）。而シテ刑事々件ニ對スル陪審ノ權限ハ唯犯罪構成事實ノ有無ヲ評議シ其ノ結果ヲ裁判所ニ答申スルニ在リテ事實ニ對スル法律ノ適用ニ付テハ全ク關與セス裁判權ハ專ラ裁判所ノ有スル所ナリ。

陪審事件ハ之ヲ分テ二トス、其一ハ法定陪審事件ニシテ死刑又ハ無期ノ懲役若クハ禁錮ニ該ル事件是ナリ（二條）。卽チ重大ナル犯罪ニ付テハ法律上當然陪審ノ評議ニ付スヘキモノト爲シタルナリ例ハ刑法第百八條第百十二條爆發物取締罰則第一條第二條等ニ該當スル犯罪ハ之ニ屬ス其二ハ請求陪審事件ニシテ卽チ被告人ノ請求ニ因リテ陪審ニ付セラルル事件ナリ。法定刑上長期三年ヲ超ユル有期ノ懲役又ハ禁錮ニ該ル事件ニシテ地方裁判所ノ管轄ニ屬スルモノ是ナリ（三條）。被告人ノ陪審請求ハ第一回ノ公判期日前ニ之ヲ爲スコトヲ要ス。但シ其ノ期日前ト雖モ最初ニ定メタル公判期日ノ召喚ヲ受ケタル日ヨリ十日ヲ經過シタルトキハ之ヲ爲スヲ得ス。罪ニ對スル刑ノ如何ヲ問ハス犯人ノ身分若クハ犯罪ノ性質上絕對ニ陪審手續ヲ許ササル事件アリ之ヲ陪審不適事件ト云フ（四條）。下ニ擧クル四者卽チ是ナリ。（イ）大審院ノ特別權限ニ屬スル罪（裁構法五〇條）、（ロ）刑法第二編第一章乃至第

八章ノ罪、(八)軍機保護法、陸軍刑法又ハ海軍刑法ノ罪其ノ他軍機ニ關シ犯シタル罪、(ニ)法令ニ依リテ行フ公選ニ關シ犯シタル罪

陪審事件ナリヤ否ヤハ公判ノ當初ニ於テ之ヲ決セサルヘカラス。卽チ檢事カ直接ニ公判ヲ請求シタル事件ニ付テハ公判請求書ニ記載シタル事實ニ依リ豫審ヲ請求シタル事件ニ付テハ豫審終結決定書ニ記載シタル事實ニ依リテ定ムヘキモノトス。

第三　陪審ノ辭退、取下及自白トノ關係

被告人ハ檢事ノ被告事件陳述前ニ於テハ何時タリトモ事件ヲ陪審ノ評議ニ付スルコトヲ辭退シ又ハ請求ヲ取下クルコトヲ得ルモノトス(六條一項)。公判手續ヲ更新スル場合(九五條九八條)。又ハ上告裁判所ヨリ事件ノ差戻又ハ移送ヲ受ケタル裁判所カ更ニ公判手續ヲ爲ス場合(一〇五條)ニ於テハ新ナル公判手續ニ於ケル檢事ノ被告事件陳述前ニ於テ辭退又ハ請求ヲ取下クルコトヲ得ヘク、又第百八條ニ依リ管轄移轉ノ請求アリタルトキハ檢事ノ被告事件陳述後ト雖モ其ノ決定アル迄ハ辭退ヲ爲シ又ハ請求ノ取下ヲ爲スコトヲ得(一〇條一項)。一旦辭退ヲ爲シ又ハ請求ノ取下ヲ爲シタルトキハ陪審事件タル性質ヲ失ヒ再ヒ陪審ノ評議ニ付スルコトヲ得サルニ至ル(六條二項)。又被告人公判又ハ公判準備ニ於ケル取調ニ於テ公訴事實ヲ認メタルトキハ事件ヲ陪審ノ評議ニ付セス、但シ共同被告人中公訴事實ヲ認メサル者アルトキハ此ノ限ニ在ラス(七條)。

第四　管轄ノ移轉

管轄ハ刑事訴訟法一般ノ原則ニ依リテ定マルヘク、又之カ移轉ニ付テモ同法第十七條及第十六條第二號ノ適用アルコト勿論ナリト雖モ、陪審手續ヲ行フ場合ニ於テ地方ノ情況ニ由リ陪審ノ評議公平ヲ失スルノ虞アルトキハ檢事ハ其ノ理由ヲ具シ書面ヲ以テ直近上級裁判所ニ管轄移轉ノ請求ヲ爲スコトヲ得。公判ニ繫屬スル事件ニ付テ此ノ請求アリタルトキハ訴訟手續ヲ停止セサルヘカラス。直近上級裁判所ハ檢事ノ意見ヲ聽キ決定ヲ爲ス(八條九條)。若シ被告人カ事件ヲ陪審ノ評議ニ付スルコトヲ辭退シ又ハ請求ヲ取下ケタルトキハ檢事ノ管轄移轉ノ請求ハ其ノ理由ヲ失フニ至ルヲ以テ之ヲ取下ケタルモノト看做サル(一〇條)。

第五　陪審員タル資格

陪審員タル資格ニハ積極的要件ト消極的要件トアリ。積極的要件ハ(一)帝國臣民タル男子ニシテ三十歲以上タルコト(二)引續キ二年以上同一市町村內ニ住居スルコト(三)引續キ二年以上直接國稅三圓以上ヲ納ムルコト(直接國稅ノ種類ハ勅令ヲ以テ定メラル)(四)讀ミ書キヲ爲シ得ルコトノ四者ナリ、而シテ(二)及(三)ノ要件ハ名簿作成ノ年ニ於ケル九月一日ノ現在ニ依ルヘキモノトス(一二條)。消極的要件ハ一ニ之ヲ除斥原因ト云フ。卽チ(一)禁治產者、準禁治產者(二)破產者ニシテ復權ヲ得サルモノ(三)聾者、啞者、盲者(四)懲役、六年以上ノ禁錮、舊刑法ノ重罪ノ刑又ハ重禁錮ニ處セラ

レタル者是ナリ(一三條)。尙ホ右ノ外國務大臣、在職ノ司法官、行政官、市町村長、一定ノ現業ニ從事スル者等ハ特殊ノ事由ニ依リ陪審員タルコトヲ得サルモノトス(一四條)。

第六　陪審員ノ除斥、忌避及辭退

陪審員ハ公廷ニ列席シテ審理ニ參與シ犯罪事實ノ有無ヲ評議シ其ノ結果ヲ裁判所ニ答申スルノ重大ナル職責ヲ有スルモノナレハ其心公平無私ナルヘキハ勿論ナル而已ナラス、外部ヨリ其公平ヲ疑フヘキ事由ノ存セサルコトヲ必要トス。是レ一定ノ原由ノ存スル場合ニ於テ陪審員ヲシテ法律上必然的ニ職務ノ執行ヨリ脫退セシムル所以ナリ(一五條)。除斥ノ手續ニ付テハ第六十二條ニ規定セリ。

檢事及被告人ハ法律上一定ノ理由アルコトヲ要セスシテ陪審構成前ニ限リ陪審員ヲ忌避スルコトヲ得。是レ民事訴訟刑事訴訟ニ於テ判事ヲ忌避スル場合ト大ニ異ル所ニシテ畢竟陪審制ノ本旨ニ由來スルモノナリ(六四條乃至六六條)。自ラ陪審員ノ職務ヲ辭退スルコトヲ得ル者アリ(一)六十歲以上ノ者(二)在職ノ官吏、公吏、敎員(三)貴族院議員、衆議院議員及法令ヲ以テ組織シタル議會ノ議員(但シ會期中ニ限ル)是ナリ(一六條)。尙陪審員ハ疾病其ノ他已ムヲ得サル事由ニ依テ呼出ニ應スルコト能ハサルトキハ書面ヲ以テ其ノ事由ヲ疏明シテ職務ヲ辭退スルコトヲ得(五九條)。

第七　名簿調製

陪審員ニ關スル名簿ハ陪審員資格者名簿ト陪審員候補者名簿ノ二ト爲ス。市町村長ハ毎年九月一日現在ニ依リ其ノ市町村內ニ於テ陪審員タル資格ヲ有スル者ヲ調査シ陪審員資格者名簿ヲ調製シテ之ヲ登載スルコトヲ要シ、又之カ副本ヲ調製シテ管轄區裁判所判事ニ送付スヘキモノトス。市町村長ハ陪審員資格者名簿ヲ十月一日ヨリ七日間其ノ廳ニ於テ縱覽ニ供セサルヘカラス。而シテ此ノ名簿ニ登載セラレタル者及登載セラレサル者ハ之カ法律ニ違反セルコトヲ疏明シ書面ヲ以テ縱覽期間內及其ノ後七日內ニ於テ市町村長ニ對シテ異議ノ申立ヲ爲スコトヲ得(一七條乃至二一條)。

地方裁判所長ハ毎年九月一日迄ニ翌年所要ノ陪審員ノ員數ヲ定メ管內ノ市町村ニ割當テ之ヲ市町村長ニ通知スヘキモノニシテ、其ノ通知ヲ受ケタル市町村長ハ陪審員資格者名簿ニ基キ資格者三人以上ノ立會ヲ以テ抽籤ニ依リ割當ラレタル員數ノ陪審員候補者ヲ選定シ、陪審員候補者名簿ヲ調製シ十一月三十日迄ニ之ヲ管轄地方裁判所長ニ送付シ、別ニ其ノ副本ヲ調製シテ管轄區裁判所判事ニ送付スヘク、又該名簿ニ登載セラレタル者ニ其ノ旨ヲ通知シ且其ノ氏名ヲ告示セサルヘカラス(二二條乃至二六)。地方裁判所長ハ豫メ定メタル市町村ノ順序ニ依リ各陪審員候補者名簿ニ基キ裁判所書記ノ立會ヲ以テ一人又ハ數人ノ陪審員ヲ抽籤シ陪審員三十六人ヲ選定スヘキモノトス(二七條)。選定セラレタル陪審員ハ裁判所ノ呼出ニ應シテ陪審ノ職務ニ就クモノナリト雖モ、一度呼出ニ應シタル者ハ其ノ市町村ニ於ケル陪審員候補者名簿ニ登載セラレタル者四分ノ三呼出ニ應シタル後ニ非サレハ其ノ年內ニ再ヒ陪審員ニ選定セラルルコトナシ(二八條)。

第八　陪審ノ構成

陪審ハ第二十七條ニ依リ選定セラレタル三十六人ノ陪審員中ノ十二人ヲ以テ構成セラル(二九條)。構成手續ハ公判廷ニ於テ行ハルル所ナリ(六〇條乃至六七條)。陪審ハ檢事被告事件ヲ陳述スル時ヨリ裁判所書記陪審ノ答申ヲ朗讀スル迄同一ノ陪審員ヲ以テ構成スルコトヲ要シ更迭ヲ許サス(三〇條)ト雖モ、裁判長事件二日以上ニ亘ルモノト思料スルトキハ陪審ヲ構成スヘキ陪審員疾病其ノ他ノ事由ニ因リ職務ヲ行フコト能ハサル場合ニ於テ之ニ代ラシムル爲十二人ノ陪審員ノ外一人又ハ數人ノ補充陪審員ヲ公判ニ立會ハシムルコトヲ得(三一條六五條)。同日ニ數個ノ事件ノ公判ヲ開ク場合ニ於テハ事件毎ニ陪審構成ノ正式手續ヲ採ラスシテ數個ノ事件ニ付同一陪審員ヲ以テ陪審ヲ構成スルコトヲ得即チ三十六人ノ同一陪審員ヲ母體トシテ此ノ中ヨリ一般ノ手續ニ依リ各事件ノ陪審ヲ構成スヘキモノナリ。但シ此ノ場合ノ手續ハ最初ノ事件ノ取調以前ニ之ヲ爲ササルヘカラス。尙檢事及被告人異議ナキトキハ一事件ノ爲構成セラレタル陪審ヲシテ同日ニ審理スヘキ他ノ事件ノ爲ニ其ノ職務ヲ行ハシムルコトヲ得(三二條三三條)。

第九　公判準備手續

公判準備手續ノ主タル目的ハ公判開廷前ニ於テ豫メ之カ資料ヲ整備シ公判期日ニ總テノ證據ヲ一擧ニ開顯シ以テ迅速ニ審理ヲ遂ケシメ裁判官ヲシテ事件ノ眞相ニ徹スル心證ヲ形成セシメムトスルニ存ス。準備手續ニ於テハ陪審事件公判ニ繫屬スルトキハ裁判長ハ先ツ公判準備期日ヲ定メテ之ヲ檢事ニ通知シ、辯護人ノ選任ヲ爲シ、被告人及辯護人ヲ召喚ス(三五條乃至三九條)。公判準備期日ニ於ケル取調ハ公行セス、定數ノ判事檢事及裁判所書記列席シテ之ヲ爲スヘク尙ホ辯護人ノ出頭ヲ必要トス。裁判長ハ法定陪審事件ニ付テハ被告人ニ對シ陪審手續ヲ辭シ得ヘキ旨ヲ告ケ、公訴事實ニ付被告人ヲ訊問シ、裁判所ハ必要ナル證據ノ決定ヲ爲ス。檢事、被告人及辯護人ハ證人訊問、鑑定檢證又ハ證據物若ハ證據物若ハ證據書類ノ集取ヲ請求スルコトヲ得、公判準備期日前ニ於テモ亦然リ、又被告人ハ管轄違ノ申立ヲ爲スコトヲ得ヘク、裁判所ハ公訴棄却、管轄違又ハ免訴ノ原因アルコト認メタルトキハ、其ノ旨ノ決定ヲ爲シ公判ヲ開クコトナクシテ訴訟手續ヲ完結スヘキモノトス。裁判所書記ハ公判準備調書ヲ作リ公判準備期日中ニ於ケル一切ノ訴訟手續ヲ記載セサルヘカラス。若シ公判準備中陪審ノ評議ニ付スヘカラサル事由ノ生シタルトキハ通常ノ手續ニ依リテ審理セラルルコト論ヲ俟タス。裁判長ハ公判開始ノ準備ヲ終リタルトキハ公判期日ヲ定メ被告人、辯護人、輔佐人ヲ召喚(刑訴法三二〇條)スルト共ニ第二十七條ノ規定ニ依リ選定セラレタル陪審員三十六人ヲ呼出スヘキモノトス(四〇條乃至五九條)。

第十　公判手續及公判ノ裁判

陪審手續ヲ行フニハ先ツ陪審ヲ構成セサルカヘラス。陪審ノ構成ハ判事、檢事、裁判所書記、被告

人、辯護人及二十四人以上ノ陪審員列席シ公判廷ニ於テ行ハルル所ニシテ此手續ハ公開セサルモノトス。若シ出頭シタル陪審員カ二十四人ニ滿タサルトキハ裁判長ハ一定ノ方法ニ依リ之ヲ補充スルコトヲ要ス。二十四人以上ノ出頭アラハ裁判長ハ檢事被告人及陪審員ニ付除斥ノ原因アリヤ否ヤ又陪審員中ニ缺格者ナキヤ否ヤヲ調査シ、陪審員ノ氏名票ヲ抽籤函ニ入レタル後檢事及被告人ノ忌避スルコトヲ得ル員數ヲ告知シテ氏名票ヲ一票宛抽出シ其氏名ヲ讀上ケ檢事及被告人ハ之ニ對シテ承認若クハ忌避スル旨ヲ陳述スヘキモノトス。但シ忌避スルコトヲ得ル員數ニ付テハ一定ノ制限アリ。斯クシテ陪審ヲ構成スヘキ陪審員及補充陪審員ノ數ヲ充シタルトキハ、裁判長ハ抽籤ヲ終リタル旨ノ宣言ヲ爲シ、初ニ當籤シタル十二人ノ陪審員ヲ以テ陪審ヲ構成シ其ノ他ノ當籤者ヲ以テ補充陪審員ニ充ツ（六〇條乃至六八條）。陪審構成手續ヲ完了シタルトキハ裁判長ハ檢事ノ被告事件陳述前陪審員ニ對シ其ノ心得ヲ諭告シ宣誓書ニ依リ宣誓ヲ爲サシメサルヘカラス。宣誓書ニハ良心ニ從ヒ公平誠實ニ其ノ職務ヲ行フヘキコトヲ誓フ旨ヲ記載シ、裁判長ハ起立シテ之ヲ朗讀シタル後陪審員ヲシテ署名捺印セシムヘキモノトス（六九條）。陪審員ノ宣誓了ルトキハ檢事ハ被告事件ノ要旨ヲ陳述スヘクシムルコトヲ得ヘク、又陪審員ハ裁判長ノ許可ヲ受ケテ被告人、證人、鑑定人、通事及飜譯人ヲ訊問スルコトヲ得（七〇條）。其他證據調手續ニ付テハ總テ刑事訴訟法ノ定ムル所ニ從フヘキモノナリ。（刑訴法三四九條）其ノ後裁判長ハ自ラ被告人ノ訊問及證據調ヲ爲シ又ハ陪席判事ノ一人ヲシテ之ヲ爲サ

諸般ノ證據ハ原則トシテ裁判所ノ直接ニ取調ヘタルモノナラサルヘカラスト雖モ、實際上ノ必要ヲ慮リ第七十二條乃至第七十五條ニ於テ之カ例外ノ場合ヲ規定シタリ。證據調ヲ終リタルトキハ檢事被告人及辯護人ハ犯罪ノ構成要素ニ關スル事實上及法律上ノ問題ノミニ付意見ヲ陳述スヘキモノニシテ、單ニ情狀又ハ刑罰ニ關スル事項ノ如キハ陳述スルコトヲ得サルノミナラス、公判廷ニ現レサル證據ノ援用ヲ許サス、又被告人又ハ辯護人ニハ最終ニ陳述スルノ機會ヲ與ヘサルヘカラス（七六條）。檢事被告人及辯護人ノ辯論終結後裁判長ハ陪審ニ對シ犯罪ノ構成ニ關シ法律上ノ論點及問題トナルヘキ事實竝證據ノ要領ヲ說示シ犯罪構成事實ノ有無ヲ問ヒ評議ノ結果ヲ答申スヘキ旨ヲ命スルコトヲ要ス。然レトモ證據ノ信否及罪責ノ有無ニ關シ意見ヲ表示スルコトヲ得ス。蓋シ證據ノ信否及罪責ノ有無ハ一ニ之ヲ陪審員ノ判斷ニ委スヘキ所ニシテ、若シ之ニ關スル意見ヲ表示センカ陪審員ノ純眞ナル心裡ニ大ナル影響ヲ與ヘ延テハ陪審制ノ本旨ニ背戻スルノ結果ヲ生スルノ虞アルヲ以テナリ。而シテ裁判長ノ說示ニ對シテハ異議ノ申立テヲ許サス（七七條七八條）。裁判長ハ說示ノ後問書ヲ陪審ニ交付スルコトヲ要ス。其ノ問書ニ記載スヘキ問ハ之ヲ主問ト補問トニ區別シ、主問ハ公判ニ付セラレタル犯罪構成事實ノ有無ヲ評議セシムル爲ニ之ヲ爲シ、補問ハ不告不理ノ原則ニ反セサル範圍內ニ於テ公判ニ付セラレタルモノト異リタル犯罪構成事實ノ有無ヲ評議セシムル必要アリト認メタル場合ニ之ヲ爲スモノナリ。主問及補問ハ陪審ニ於テ然リ又ハ然ラスト答ヘ得ヘキ書文ヲ以テ之

ヲ爲シ裁判長之ニ署名捺印スヘキモノトス。陪審員、檢事、被告人及辯護人ハ問ノ變更ヲ申立ツルコトヲ得此ノ申立アリタルトキハ裁判所ハ之カ決定ヲ爲ササルヘカラス（七七條乃至八一條）。裁判長ハ問書ヲ陪審ニ交付シタルトキハ評議ヲ爲サシムル爲直チニ陪審員ヲシテ特ニ設ケラレタル評議室ニ退カシムヘク、其ノ際公判廷ニ於テ示シタル證據物及證據書類ヲ陪審ニ交付スルコトヲ得ルモノトス。陪審員評議室ニ入リタル後ニ於テハ裁判長ノ許可ヲ受クルニ非サレハ評議ノ了ル迄評議室ヲ出テ又ハ他人ト交通スルコトヲ得ス、又陪審員ニ非サル者ハ裁判長ノ許可ナクシテ評議室ニ入ルコトヲ得ス。尙公判手續ノ續行セラルヽニ如キ場合ニ於テ陪審員其ノ答申前ニ裁判所ヨリ退出シタルトキハ滯留ノ場所及他人トノ交通ニ關シ裁判長ヨリ指示セラレタル事項ヲ遵守セサルヘカラス（八三條乃至八五條）。評議室ニ於テ陪審ノ議事ヲ整理セシムル爲陪審員ハ陪審長ヲ互選スヘク、評議ハ先ツ主問ニ付之ヲ爲シ、主問ヲ否定シタル場合ニ於テ補問アルトキハ之ニ付評議ヲ爲スヘキモノトス。而シテ陪審員ハ問ニ對シ各其ノ意見ヲ表示シ、陪審長ハ最後ニ其ノ意見ヲ表示スルコトヲ要ス。是レ實ニ陪審員ニ與ヘラレタル至重ノ權利ニシテ陪審ノ評決ハ結局多數意見ニ依リテ定マルモノナレハ須ラク其ノ責任ヲ自覺シテ私情ニ驅ラルルカ如キコトナク良心ノ命スル所ニ從ヒ公正ナル意見ヲ述ヘサルヘカラス。陪審ノ評決ハ過半數主義ニ依リ犯罪事實ヲ肯定スルニハ七人以上ノ同意アルヲ必要トス。陪審評決ヲ終リタルトキハ其ノ結果ヲ答申セサルヘカラス。答申ハ問ニ對シ簡明ニ然リ又ハ然ラスノ一語ヲ以テシ、之ヲ第八十一條ノ規定ニ依リ交付ヲ受ケタル問書ニ記載シ、陪審長署名捺印ノ上裁判長ニ提出スヘク、裁判長ハ其ノ答申ヲ調査シ之ニ不備又ハ齟齬アルヲ認メタルトキハ問書ヲ返付シ更ニ評議ヲ爲シ答申ヲ訂正スヘキ旨ヲ命スヘキモノナリ。然ル後裁判長ハ問及之ニ對スル陪審ノ答申ヲ公判廷ニ於テ裁判所書記ヲシテ朗讀セシメ此ノ手續ヲ了ルトキハ陪審員ヲシテ退廷セシムヘキモノトス（八六條乃至九四條）。陪審ハ犯罪事實ノ有無ヲ評議決定シテ其ノ結果ヲ答申スルモノナレトモ其ノ答申ハ毫モ裁判所ノ判斷ヲ拘束スルノ力ナク、裁判所其ノ答申ヲ不當ナリト認ムルトキハ訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス決定ヲ以テ事件ヲ更ニ他ノ陪審ノ評議ニ付スルコトヲ得ルモノナリ。此ノ決定ヲ爲シタルトキハ公判手續モ亦更新シテ始ヨリ行ハサルヘカラス。陪審カ犯罪構成事實ヲ肯定スルノ答申ヲ爲シタル場合ニ於テ裁判所之ヲ不當ト認メサルトキハ檢事ハ之ニ適用スヘキ法令及處刑ニ關シ意見ヲ陳述スヘク、被告人及辯護人モ亦意見ヲ陳述スルコトヲ得ヘシ。反之、陪審犯罪事實ヲ否定スルノ答申ヲ爲シタル場合ニ於テハ之ヲ不當ト認ムレハ陪審更新ノ手續ニ出ツヘシト雖モ、不當ト認メサルトキハ別ニ辯論ヲ爲スコトナク直チニ無罪ノ判決ヲ言渡スヘキモノナリ（八六條乃至九六條）。

裁判所カ陪審ノ答申ヲ是認シテ判決ノ言渡ヲ爲ス場合ニハ必ス陪審ノ評議ニ付シテ事實ノ判斷ヲ爲シタル旨ヲ記載スルコトヲ要シ、有罪ノ言渡ヲ爲ス場合ハ罪トナルヘキ事實及法令ノ適用ヲ示シ

刑ノ加重減免ノ原因タル事實上ノ主張アリタルトキハ之ニ對スル判斷ヲ揭ケサルヘカラスト雖モ、證據上ノ理由ハ勿論犯罪ノ成立ヲ阻却スヘキ事實上ノ主張アリタル場合ニ於テモ之ヲ排斥スル理由ヲ說明スルノ要ナシ。又無罪ノ判決ヲ爲ス場合ニハ其ノ理由カ犯罪構成事實ヲ認メサルニ基クモノナリヤ又ハ犯罪ノ成立ヲ阻却スル原因タル事實ヲ認メタルニ存スルヤヲ示ササルヘカラス(九七條)。

陪審手續ハ一回ノ公判ヲ以テ終結セシムルヲ原則トシ然ラサル場合ニ於テハ引續キ連日開廷シテ審理ヲ遂クヘキモノナレトモ已ムヲ得サル事情ノ爲引續キ七日以上開廷セサリシトキハ既ニ進行シタル手續ヲ廢シ更ニ新ニ公判手續及陪審構成手續ヲ行フコトヲ要ス。陪審ヲ構成スヘキ陪審員疾病其ノ他ノ事由ニ因リ職務ヲ行フコト能ハサル場合ニ於テ補充陪審員アラサルトキ亦然リ。陪審ノ評議ハ犯罪事實ノ有無ニ關スル事項ニ限ラルルモノナルカ故ニ裁判所ハ公判手續ニ於テ公訴棄却、管轄違又ハ免訴ノ裁判ヲ爲スヘキ原因アルコトヲ認メタルトキハ訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス事件ヲ陪審ノ評議ニ付セスシテ通常ノ手續ニ從ヒ審理判決ヲ爲スヘキモノトス。裁判所書記ハ公判調書ヲ作リ之ニ通常ノ手續ニ於テ記載スヘキ事項(刑訴六〇條)ノ外陪審員ノ氏名、陪審ノ構成其ノ他陪審ニ關スル訴訟手續及裁判長ノ說示ノ要領ヲ記載スルコトヲ要ス(九八條乃至一〇〇條)。

第十一　上訴

陪審員ノ答申ヲ正當ト認メテ事實ノ判斷ヲ爲シタル事件ノ判決ニ對シテハ控訴ヲ爲スコトヲ許サス直チニ大審員ニ上告ヲ爲スコトヲ得ルノミ。蓋シ陪審手續ハ直接審理ノ原則(七一條)ニ從ヒテ鄭重ナル審理ヲ遂ケ且ツ陪審ノ評決ト裁判所ノ認定ト符合シタル所ニ依テ判決ヲ爲シタルモノナレハ更ニ控訴シテ覆審セシムルノ要ナシト雖モ陪審ハ法律ノ適用ニ關スル事項ニ關ハラサルモノナレハ法律ノ違背ヲ理由トスル上告ヲ禁スヘキニ非サルナリ。上告ハ刑事訴訟法ニ於テ第二審判決ニ對シ上告ヲ爲スコトヲ得ル理由アル場合(刑訴四〇九條乃至四一五條)ニ於テ陪審手續ニ於ケル第一審判決ニ對シテ之ヲ爲スコトヲ得ルモノトス。然レトモ事實ノ誤認ヲ理由トスル場合(刑訴四一四條)ハ此ノ限ニ在ラス(一〇一條乃至一〇三條)。其ノ他陪審法第百四條ハ陪審手續ニ依リタル判決ニ對スル特殊ノ上告理由ヲ定メタリ。大審院ニ於テ上告陪審事件ヲ審理シタル結果其ノ理由アリト認メ原判決ヲ破毀スル場合ニ於テハ事實ノ審理ヲ爲サスシテ自ラ裁判ヲ爲ス場合ヲ除クノ外事件ヲ原裁判所ニ差戻シ又ハ原裁判所ト同等ナル他ノ裁判所ニ移送スヘキモノトス。差戻又ハ移送ヲ受ケタル裁判所ハ更ニ事件ニ付審判ヲ爲スモノナリト雖モ破毀ノ理由トナリタル事項カ犯罪構成事實ノ認定ニ關係ナキモノナルトキハ前ニ爲シタル陪審ノ答申ハ其ノ效力ヲ失フコトナク裁判所ハ答申以後ノ手續ノミヲ爲スヲ以テ足ル(一〇五條)。再審及ヒ非常上告ニ付テハ陪審法ニ規定ナキヲ以テ刑事訴訟法第四百八十五條以下及第五百十六條以下ニ定ムル所ト同一ノ法則ニ從フヘキモノトス。

第十二　陪審費用

20691

陪審手續ニ於ケル陪審員ノ呼出ニ要スル費用及陪審員ニ給與スヘキ旅費日當竝止宿料ハ之ヲ陪審費用トシ訴訟費用ノ一部ヲ成スモノト爲シタリ、從テ訴訟費用ニ關スル一般法則(刑訴二三七條乃至二四五條)ノ適用アルコト論ナシ。陪審費用ハ請求陪審事件(第二條)ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲ス場合ニ限リ被告人ヲシテ其ノ全部又ハ一部ヲ負擔セシムルモノニシテ、法定陪審事件(第二條)ニ付テハ如何ナル場合ニ於テモ被告人ヲシテ之ヲ負擔セシムルコトヲ得ス(一〇六條一〇七條)。

第十三　制裁

陪審員ハ法律ノ定ムル所ニ依リテ選定セラレ誠實公正ニ其ノ職務ヲ行フヘキモノナルヲ以テ陪審法ハ其ノ職務ノ厲行ヲ期センカ爲第百八條乃至第百十一條ニ於テ嚴重ナル制裁ヲ設ケタリ。

3005
3
40

法學通論(完)

衆議院圖書館
購入
3.10.12

明治四十三年二月二十日初版發行
大正六年十二月十日全部改訂十版發行
大正十一年四月二十日改訂二十一版發行
大正十三年一月十五日改訂二十七版發行
大正十三年三月五日二十八版發行
昭和三年五月二十五日四十二版印刷
昭和三年五月三十日四十二版發行

大正十三年五月十日二十九版發行
大正十三年九月廿五日三十版發行
大正十五年四月廿日全部改訂卅四版發行
昭和二年四月二十日三十七版發行
昭和三年四月十日訂正增補四十版發行

法學通論 奥付
定價金參圓五拾錢

著作者　中村進午
東京市神田區中猿樂町二番地

發行者　株式會社 巖松堂書店
右代表者　波多野重太郎

印刷者　白井赫太郎
東京市神田區錦町三丁目十七番地

發兌元　巖松堂書店
東京市神田區中猿樂町二番地
電話九段(33)二二六一番 二六七六番
(振替東京六五五六番)

東京・印刷所精興社・神田

著作權所有

終